方正友好交流の会　会報８号

星火方正（せいかほうまさ）

～燎原の火は方正から～

方正日本人公墓の前にたたずむ映画作家の羽田澄子さん

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、インターナショナルな友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第８号）　～燎原の火は方正から～

目　次

特集　羽田澄子さんへのインタビュー

「戦争をやめる」という選択肢があるとは思わなかった！ ——羽田澄子さん、大連での敗戦前後を語る——		1
映画「嗚呼　満蒙開拓団」を作って	羽田　澄子	19
地方での上映スケジュール	自由工房	20
私の知る羽田澄子さん	佐渡　京子	23
日本人公墓建立史の隠れた部分は・・・	可児　力一郎	26
孫たちへ言い残すこと　　ユウちゃんとコウちゃんへ——	酒井　武史	32
「帰ってきたおばあさん」を演じて —私が辿った道—	神田　さち子	36
漫画家にはなぜか旧満州出身が多い ——神田さち子さんを支援するちばてつやさんらが南京で展示会——	大類　善啓	41
方正日本人公墓と世代友好碑	武吉　次朗	42
方正日本人公墓修理費支援を！	方正県政府	44
班忠義さんと方正	奥村　正雄	45
前史と方正交流の歳月	林　郁	47
日中友好よ、永遠に	吉川　春子	50
満州開拓移民について思う——二つの書籍に触れて——	藤井　正義	53
「日本人公墓」訪問を呼びかける今村春江さん	日中友好新聞	56
資料　「方正県」との出会いとその関わり ——ある一つの方正支援活動報告——	大類　善啓	57
資料　方正地区日本人公墓の由来	王　鳳山	63
中国・交流と歴史検証の旅　ご案内		67
近現代歴史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅　ご案内		68
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの ——「方正友好交流の会」へのお誘い——	編集部	69
書籍案内　報告　編集後記	編集部	70

「戦争をやめる」という選択肢が
あるとは思わなかった！

――羽田澄子さん、大連での敗戦前後を語る――

（聞き手・文）　大類 善啓

羽田澄子（はねだ・すみこ）

１９２６年、大連生まれ。自由学園卒業。５０年、岩波映画製作所創立とともに入社。岩波写真文庫の編集を担当後、記録映画の演出、脚本に携わる。８２年以降、フリーの演出家とした活躍。代表作に「薄墨の桜」「早池峰の賦」（芸術選奨文部大臣賞、エイボン芸術賞）「AKIKO―あるダンサーの肖像」（文化庁芸術作品賞）「痴呆性老人の世界」（毎日映画コンクール賞ほか）「安心して老いるために」「歌舞伎役者　片岡仁左衛門」「住民が選択した町の福祉」「平塚らいてうの生涯」「終りよければすべてよし」他多数。著書に『映画と私』『早池峰の賦』『安心して老いるために』など。

はじめに

記録映画作家である羽田澄子さんのお名前は、もちろん以前から知ってはいた。が、正直に告白すれば、作品を見ているのは今回の『嗚呼　満蒙開拓団』以外では、『終りよければすべてよし』だけである。それも、羽田さんが方正日本人公墓に関心を持っていただいているということがわかり、これは見なければという思いで上映中の岩波ホールに駆け込んだ。その後、新聞でのインタビュー記事を読んだりしたが、『終りよければすべてよし』の反響の大きさもあってか、老人問題が中心だったり、記録映画そのものがテーマだったりして、私が関心をもっている敗戦前後の大連での話は、メディアではほんの少し見られる程度だった。そこで今回は、大連での話を中心にお聞きし、羽田さんの知られざる側面を紹介したいと思った。

実は、羽田さんは２月に入ったあと、お疲れが重なったのか、心筋梗塞になってしまった。しかし幸いにも元気を取り戻され、インタビューに応じていただいた。

なお、映画『嗚呼　満蒙開拓団』は、2008 年キネマ旬報 文化映画ベスト第１位、2008

年日本映画ペンクラブ 文化映画ベスト１、第21回東京国際女性映画祭オープニング作品、シネマ・シンジケート推薦作品になっている。この映画についての羽田さんの思いは、日中文化交流協会に書かれた文章が簡潔に表しているので、Ｐ１９に紹介した。ぜひお読みいただきたい。

大連―日本、そして旅順へ

――まず、なぜ大連にお父上が行かれたのか、そのあたりからお伺いしたい。

羽田　父は広島の高等師範を出て大連の弥生(やよい)高女（高等女学校）の教師だったんです。誰が誘ったかそのあたりは知らないんですが、最初に赴任したのが弥生高女です。当時、大連には弥生と神明(しんめい)という二つの、歴史ある女学校がありました。その一つである弥生に赴任し、そこで父は母と結婚し私が生まれました。母はもともと北朝鮮の清津にいたんですが、家を離れて神明高女に入ったんです。母が卒業後、誰かがどうやったかわからないんですが（笑)、父と結婚したんです。父が７つ年上で、よくあるケースですよね。

――お父さんの考え方、思想というか、お父上はどういう方だったんですか。

羽田　全然わからないですね。父は口をきかない人でしたので・・・(笑）父の専門は博物で、植物、鉱物、動物、そういうものを教えていたんです。一番の専門というのは植物学でした。

――牧野富太郎みたいだったわけですね。

羽田　家の押入れには、父が集めてきて標本にする植物がみんな新聞に挟まれて積んでありました。私が４歳の時、父が転勤で三重県の津の女学校に行きました。私も一緒に行き、津の小学校に入学しました。妹はその津で生まれたんですが、私がまだ一年の途中で、母は私と妹を連れて、おじいちゃん（父方の祖父）の看病のため静岡に移ったんです。その静岡で４年生の途中までいました。おじいちゃんの看病をしなくなって、また父のいる津に戻り、小学校５年生の時に父が旅順の女学校に移り、私も旅順に行きました。

――なんていう小学校だったんですか

羽田　旅順女子師範付属小学校というんですが、５年生と６年生の２年間行ったわけです。その後、旅順高等女学校に入ったんです。当時、女学校は４年制でしたが、上級学校に行かないで、５年いることもできたんです。私は４年で卒業しました。当時、父は教頭でした。私も父の博物の授業を受けていました。

――羽田さんの書かれた文章の中に、岩波映画に誘われた時、「父が教育者だったから、なぜか教育者にはなりたくなかった。教育映画だというので興味がなくなった」と言って、最初は断ったという話が出ていますが（笑)・・・

羽田　なんとなく・・・(笑)・・・ところが私の妹はちゃんと学校の先生になったんですよ。フランスに留学してフランス文学の先生になりました。早死にして残念でしたが。

――旅順の小学校や女学校を思い出してみて、どんな生活だったですか。

羽田　まぁ、非常に・・・ちょうど戦争が始ってましたけどねぇ・・・でも、楽しかったですね。・・・あのなんて言うのかなぁ・・・静岡にちょっといたから日本の雰囲気もわかっていましたが、全体に（旅順は）コセコセしていないんですよね。街自体も日本のように木造建築ではなくて、帝政ロシア時代の建物ですから、道は車道と歩道でできていて、

並木があり、まったく雰囲気が違っていて、のんびりしていて・・・。旅順の女学校は全満州で唯一、寄宿舎があったので、生徒のほとんど半数は満州の奥地から来た人たちでした。学校の建物もロシア時代のものですから、日本から行くとまったく雰囲気が違っていて、旅順工科大学もあり高等学校も、その学校の寮もあって・・・大学生は角帽をかぶって、高等学校の学生はマントを着ていて・・・

――そういう人たちとのお付き合いはあったんですか

羽田　その当時は、男の人とお喋りしたり、一緒に歩いたりしたら大変なことでしたから、男の人が道のこっち側を歩いていたら、私たちは反対側を歩くという具合でしたね。秘かになんかあったかもしれませんが、そんなこと、わかんないですよね。

ほとんどなかった中国人との付き合い

――女学校にいわゆる中国人の子弟はいたんですか。

羽田　いました。私たちのクラスには二人いたかな。それから、蒙古の王様になっていた人の血縁の人が二人いました。孟志英、孟亜英という方です。もちろん日本語ができましたし、普通にクラスメートとして付き合っていました。学校は全く日本人に対する教育でしたから、そういう中国系の人たちで日本の学校に入っている人たちは、お家でも日本との繋がりがあったんでしょうねぇ。そういう人たちが戦後、どうなったのかわかりませんが。

――中国の庶民というか、いわゆる老百姓（ラオバイシン）という人との付き合いはありました？

羽田　庶民って？　中国の？　ないです。それはもう全然ないですね。家に来る人というのは、お店の注文取りに来る人とか、お掃除や洗濯をしてくれるおばさんが来てくれるぐらいです。だから仕事の上で中国の人を使っていたというような男の人がいるかもしれないでしょうが、少なくとも普通の奥さんや家庭の人は、中国人との付き合いはありませんねぇ。

――女学校で中国語の授業はあったんですか。

羽田　ありました。小学校の５年生から女学校の２年生まで、週２時間ほど中国語の授業がありました。

羽田さんは、大連よりも旅順に対して、とても親しみをもっていたようである。「アカシアの坂道」と題された、羽田さんが旅順を追憶したエッセイの一部を紹介しよう。

＜教師であった父の転勤で、昭和十一年に四人のわが家族は旅順に住むことになった。父母、五年生の私、一年生の妹である。旅順はほとんどロシア人がつくったままの街で、わが家は港から次第に高くなる斜面の坂の上にある赤煉瓦の二階建てだった。

二階の子供部屋からは港の方に下りてゆくアカシアの並木路が見おろせる。私は飽かずに窓から道を眺めた。アカシアは季節につれて刻々と表情を変える。初夏とともに若い緑に包まれ、やがて緑の中にいっぱいの白い花房が風にゆれるようになる。よく、花の房を手に、一つずつ花をつまんでは蜜を吸って歩いた。

・　・・・・・・略・・・・・・

山からは街のむこうの港まで見渡せる。街はアカシアの緑に埋もれて見えた。波打つような緑の中に、石造りや赤煉瓦や、白やクリーム色の壁のロシア風の建物が点在している。「こんな美しい街に住んでいるのだ」。私は息をのむ思いで、つくづく眺めた。

そしてその瞬間、「この風景を一生忘れないだろうな」と思ったのである。

それから五年後、東京の学校に入り、再び戻れないとは考えもしないで旅順の家を出た。しかし、昭和二十年の敗戦後、旅順は中国の要塞となり、日本人にはそのまま閉ざされた土地となった。旅順の生活が日本の侵略行為の上にあったことを自覚したのは戦後のことである。それでも旅順は私の家族が最も幸せな時代を過ごした土地であった。父も母も妹ももういない。

いまいちどあの街を思う存分、歩いてみたい。＞

（初出「想いでの風景」（Ｂｕｎｋａｍｕｒａ）1988年
羽田澄子著『映画と私』（2002年・晶文社）所収）

――「アカシアの坂道」なんかを読むと、２階建ての赤煉瓦の家に住んでいて、まぁ本当に豊かなコロン（植民者）の生活というか、それが本当によくわかりますよね。

羽田　だからまぁ、日本がどんな悪いことをしていたかなんて全然知らないから、実にのんびりと生活していましたねぇ。

――日本では一部の人が、そういう生活をしていたというのはあったかもしれないですが、普通はちょっと考えられないですよね。

羽田　そうですねぇ。旅順の家のわりあい近くに、粛親王の屋敷なんかもあったりして・・・

飽き飽きした学校教育！

――あぁ、そうですか。それで卒業されて自由学園に入学されましたね。

羽田　女学校を卒業して、「選んで入った」のが自由学園です。

――それはどういうわけで？

羽田　それは・・・実は学校の教育に飽き飽きしたんです。女学校にしろ、なんにしろ。校長先生にしろなんにしろ、訓示を垂れるって、決まったことしか言わないじゃないですか。もっと他の考え方もあるんじゃないか　たまたま私の母が「婦人之友」の愛読者で、家に羽仁もと子の著作集があったんです。それを読んでみたら、面白い教育をしていると思い、自由学園に入るかなと、私が自分で選んで入ったんです。

――石堂清倫（いしどうきよとも）さんの本の中に、「大連から自由学園に行った人が多い」と書かれていますね。

（大類注：石堂清倫、1904年～2001年。東大新人会で活動、28年、3・15事件で検挙され、その後満鉄調査部に入るも43年満鉄事件で検挙される。敗戦時は二等兵としてハルピンで迎えた。49年大連より帰国。興安丸で舞鶴に着くと、左翼分子ということで米軍の尋問を受けたという。汽車で品川駅に着いた時の出迎えの中に、その後『人間の条件』で有名になった作家の五味川純平がいた。五味川とは大連仲間だった。

戦後の石堂は、マルクス主義の翻訳・研究に従事。イタリア共産党の構造改革政策を提唱したアントニオ・グラムシの思想を日本に精力的に紹介した。作家の中野重治は、石堂

にとって学生時代からの生涯の友人である。中野の長編小説『むらぎも』の中では、藤堂として登場する。鶴見太郎によれば、石堂は、＜学生運動家にありがちな性急さ、傲慢さ、そして冷酷なところがない、というのが中野評である＞と書いている。また鶴見はこうも評している。＜『むらぎも』における石堂氏は稀有の才能と同時に、無私の誠実さによって夭逝の予感を漂わせる人物として描かれている。しかし、そのふたつは戦中戦後、互いに強く結びつくことによって、こんにち最も信頼できる現代史学のひとつを築き上げたのである＞

本文で引用し紹介する石堂の本というのはすべて、『わが異端の昭和史』である。この書名は石堂によると羽田澄子さんが考えたという。勁草書房から刊行されていたが絶版。現在平凡社ライブラリーで読める。前出の鶴見の言葉は、平凡社ライブラリーの巻末の解説からの引用である）

羽田　大連には、「婦人之友」の読者がつくる「友の会」という組織があったんですね。ですから旅順から行ったのは私一人なんですが、大連からは何人か行ってるんです。当時、自由学園は田無町（東京都下）、今の“ひばりが丘”にあって、学校の寮に入って３年いました。ともかく一人で船で神戸まで行って、東京に出てってという感じですね。学校に３年いましたけど、私は終戦の年の卒業ですから、最後の１年間は学徒動員で工場に行っていました。

――３月の卒業ですね。自由学園の教育は良かったですか。自由じゃないという人もいるけど・・・

羽田　自由学園はキリスト教が土台の学校で、自由というのは、「真理はあなた方を自由にする」という聖書の言葉に基づいているのです。私が自由学園に入って、本当によかったと思って感動したのは、学園長の羽仁もと子先生が、思っていること、感じられたことをとても卒直にお話しされたことです。

それまでの学校で聞く先生の話とは全然違いました。学校の教育は「生活即教育」という考えで、いわゆる専門家を育てる教育ではありません。私が在学したのは太平洋戦争の真っただ中の３年間。最後の１年は学徒動員で工場に動員され、旋盤工でした。卒業は終戦の年です。だから私は、勉強らしい勉強はしていないんですよ。

東京で遭遇した空襲体験

――３月卒業ですが、空襲には遭われましたか。

羽田　えぇ。動員されて行った工場が中島飛行機製作所でしたから。今で言うと三鷹と田無の間ぐらいですが、東京の空襲が始まった時、最初に爆弾を落とされたのが中島飛行機だったんです。１１月（昭和１９年、１９４４年）でしたが、飛行機の製作工場ということで狙われたんです。米軍は、飛行機の工場だというのは知っていたんですね。その時は、空襲警報が出ないうちに米軍の飛行機が来ていました。私たちのクラスでは、中島飛行機で一人亡くなっていますし、広島の原爆で、やはり一人亡くなっています。

――逃げ惑ったという感じでしたか。

羽田　そうです。空襲警報がなると、とにかく防空壕に逃げるんですよ。最初の時はなん

だかわからなくてとにかく、なんか爆音がしているので、みんなで一番近い防空壕に飛び込んだんです。そうしたらどどっと防空壕の土が崩れるし、何時間かして外に出てきたら、すぐそばにこんな大きい穴があいていたんです。それまで動員され工場の寮に入っていたんですが、工場の寮がみんな潰れちゃって入れないんで、学校から工場まで通うようになったんです。それからは空襲警報がわりあい早く出るんで、空襲が出るたびに急いで逃げていたんです。そうするとＢ２９（米軍の飛行機）が来るのが見えてくるんです。Ｂ２９を見ながら防空壕まで走りました。空襲のたびに爆弾が落ちますから、工場がどんどん潰れていくんです。工員で亡くなる方もいました。

――３月１０日（昭和２０年、１９４５年）の東京大空襲の時はどうされましたか。

羽田　その時は夜だったんですけど、学校の寮にいて、空襲だというのですぐ防空壕に入ったんです。終わって出て見たら、東京の空が真っ赤！・・田無、今のひばりが丘から見たら、東京の空が真っ赤！・・・これは大変だと思いましたね。

――その後、釜山経由で旅順に帰られたんですね。

羽田　３月の卒業式の途中で空襲警報が鳴って、私たちの卒業写真なんかは、写真屋さんが空爆で潰れてしまって何もないんですが、３月の２５日ぐらいだったかなぁ、大連の友だちが私の他に２人いて、友だちのお父さんが日本まで迎えに来てくれて、３人で一緒に帰ろうと、日満航路（神戸―門司―大連）は、もうなくなっていましたから、朝鮮経由しかない。下関に行ったけど、関釜連絡船は出なかったんです。で結局、博多まで渡って、博多の埠頭で野宿して待って、やっと船が来て釜山に渡った。釜山から安東（現在の丹東）に出て、瀋陽の手前の蘇家屯まで行って大連に帰ったんです。

東京から下関までの間、行く先々で空襲があって、列車は止まり止まりで、スムーズに行かないわけですよ。東京も焼け野原だったけど、名古屋も焼け野原、大阪も焼け野原、たまたま友だちが広島からはずれた田舎に親戚がいて、食べるものが無くて、そこに行って二晩泊めてもらい、おにぎりを作ってもらって博多まで出て、結局、大連に着くまで、１２日ぐらいかかったかな。

――それから満鉄の中央試験所にお入りになったんですよね。卒業したらはじめから満鉄に入る予定だったんですか。

羽田　いやいや、そうじゃないです。当時は、卒業しても遊ばないで動員されるというのが普通でしたから、たまたま満鉄の中央試験所にいた人の奥さんが、やっぱり自由学園の卒業生で、そのツテがあって今度は自由学園の卒業生を入れようと、私と一緒に帰った友人と二人が試験所に入ったんです。特別、化学を勉強したわけではないですから、試験管などを洗う助手の仕事をやっていたんです。本筋の実験はなかなかできません。私の入った有機化学研究室は、大豆油で潤滑油を作る研究をしていたので大豆油がいっぱいありました。その頃は世の中には石鹸もなかったので、「君は石鹸を作れ」と言われて、大豆油を原料にせっせと石鹸を作っていたんです。中央試験所に入ったのは６月でしたから（８月

の終戦で)、いたのは２ヶ月ほどです。

（大類注：満鉄中央試験所は、天野博之著『満鉄を知るための十二章』や竹中憲一著『大連歴史散歩』によれば、「満州」における殖産興業を目的として1907年（明治40年）開設、有機化学、農産化学、電気研究などの部門があり、敗戦時には所員600名、中国人従業員が100名ほどいたという。現在は大連化学物理研究所となっている。また中日関係史学会編、武吉次朗訳『続　新中国に貢献した日本人たち』の中に、「中国化学工業への献身――丸沢常哉博士」と題して中国人の湯重南氏が書いている。それによれば、敗戦時、所長（３度目の就任）になっていた丸沢常哉氏は、「私は政治経済に無知だったので、中国侵略の担い手になってしまった」と語り、戦後も中国に10年残り、新中国建設に貢献した）

イメージが湧かなかった「ソ連参戦」

――ソ連の参戦はお聞きになったですよね。

羽田　もちろん。

――その時はどんな感じでしたか。

羽田　それはとにかく・・・ソ連の参戦があったけど、どんな被害が起きていたかというニュースはまったく無くて・・・ソ連軍が大連に入ってきたのは８月２２日か３日か、そのあたりでしたね。

――「ソ連が参戦した」というニュースの第一報はラジオですか？それとも新聞かな？あるいは他の誰かからですか？

羽田　新聞ですよね。

――新聞ですか。その時は、どんな気持ちですか？

羽田　ほとんどなんにも（感じなかった）。別にどうっていうことはない（笑）・・・

――えっ！　そうですか？

羽田　えぇ。だって、「それがどんなことになるか」というイメージがないから。

――私の母なんか（大正３年、１９１４年生まれ）、もちろん死んでますが、ソ連が参戦したと知って、「あぁもうこれで、日本は戦争に負けると思った」と言ってましたがね。

羽田　そうですか。私の想像力なんか、日本が負けるなんていうイメージ全然ないし、だってノモンハンだって、日本が勝っていたんだと思っていたんですから。

――旅順にいらしたでしょ。参戦してロシア人が怖いとか、そんな気持ちはなかったんですか。

羽田　街の中に白系ロシア人もいたけど、「怖い」という意識は全然なかったですね。

――中央試験所の中でも動揺はなかったんですか。

羽田　いやぁ、だから、本当の大人たちの間にはあったかもしれないけど、こっちはまだそういう意味では（子供だったのか）まったくなかったです。

――旧満州の開拓民の中にはソ連の参戦で大変な目にあっているなんていうことは・・・

羽田　そんなニュースなんてないし、周りからもそんな話はないし、まったく大連は平穏でしたね。

――じゃぁ、８月１５日の玉音放送が一番驚かれたニュースというわけですね。

羽田　そう、それが一番大きかった。

――それはどういう感じでお聞きになったんですか。
羽田　その辺から、実は私が書いたものがあるんです。

「戦争をやめる」という選択肢があるとは・・・

以下に紹介するのは「私の終戦記念日」と題された羽田さんのエッセイである。長くなるが紹介しよう。

＜重大放送の声は、よく聞きとれない。いよいよ本土決戦なのかと思ったが、そうではない。どうやら戦争はやめるらしいと分かったときの驚きは何といったらよいか。

日本は私が物心ついたときから戦争をしていた。それは聖戦であって、勝つためにはどんなことにも耐えなければならなかった。私たちは最後の一人になっても、お国のために戦わなければならない、と教え込まれていた。

「戦争で死ぬ」と思い込んでいた私には「戦争をやめる」という選択肢があることは、想像もつかないことであった。「そんなことができるのか」。急に目隠しを外されたような気持ちだった。戦争に負けた悲壮感とともに放心していた私の目に、研究室の主任が頬に笑いを浮かべて、腰かけている回転いすをうれしそうに揺すっている姿がみえた。私には不思議な光景だった。

それでも世界が急にのびやかに感じられた。「もう戦争はないのだ」「ずっと生きていけるのだ」。家に帰ると私は防空頭巾を脱ぎ捨てて、長い間しまってあった紺にピンクの花模様のワンピースと、紺のスエードのサンダルをとりだした。どちらも戦前、ニューヨークから帰った叔母にもらったお土産だった。家を飛び出すと、近くの公園の大きな池のほとりを、ワンピースのすそをひるがえして、ひと回りした。十九歳だった。

一週間ほど後にはソ連軍が進駐してきた。いろんなことがあって、私は戦争の本質を知ることになる。そして、研究室の主任が韓国の人であったことも知ったのである。あれから五十年もたってしまった。いま私は、人間とは状況によって狂気に走る生き物であることを肝に銘じなければと思っている＞　（『映画と私』）

もう一つ、前出と重複する部分はあるが、「敗戦後の大連でのあれこれ」と題された羽田さんの文章を紹介しよう。これはインタビューの当日、羽田さんからいただいたものである。

＜最後の一人まで戦わなければならないと、本気で思っていた私は、このとき初めて「戦争をやめる」という選択肢のあることを知ったのである。たちまち私を襲ったのは「そんなら、なぜもっと早くやめなかったのか」という思いだった。そして自分でも驚いたことに、「負けた」というショックよりも、戦争がなくなった、という解放感のほうが大きかった。研究室の人たちは、「負けた」と誰かが言ったきり、言葉もなかった。

このとき驚いたのは、研究室の責任者の広田晃三氏が、腰掛けていた椅子を大きく揺すりながら、嬉しそうに笑っていたことである。この人はどうしたのかと不思議に思ったが、数日後に、広田氏は韓国の人だったことを知って納得した。広田氏は韓国名・田豊鎭氏、

後に韓陽大学の学長になられたと聞いている。私にとって敗戦の日の強い印象の一つが、広田氏の笑顔である＞　（「あごら」311号、2007年5月20日付）

羽田さんから見た広田さんは「４０代になられたかなぁ」という方だった。研究所の「えらい人」だったから、「私のような下っ端とお付き合いはなく」、敗戦後は一度もお会いすることもなかったという。

羽田　玉音放送を聞いて、天皇陛下があんな口のきき方をするのかなと思って、びっくりしましたね。玉音放送は、「陛下の放送がありますから」と、机の前に立って整列して聞きました。

――こういう選択肢もあるのかと書かれていますね。

羽田　本当にそう思いましたね。なんて馬鹿馬鹿しいことをしたんだろうかと思いましたねぇ。

――羽田さんもいわば皇国少女だったわけですよね。

羽田　まぁ一応、そうでしょうねぇ。

――自由学園って、わりあい自由主義的な学風ということになってますよね。そうじゃないという説もあるけども。

羽田　いわゆる型にはまったことは言わないところで、自分の気持ちで自主的にやって決めていくという方針でしたね。ただ、当時の日本の国の動きには忠実なところで、特に反戦的なことはなく、天皇も尊敬していました。

――いわゆる八紘一宇というか、羽田さんの中にも当時の価値観はあったわけですよね。現にそういう教育を受けていた。それが変わってしまった。それに対する動揺、「大人は信用できない」というようなことはなかったんですか。あるいは騙されたとか・・

羽田　いや、すぐにはそういうことはなかったですね。うちの知り合いには、満鉄の調査部の人が多かったんです。石堂清倫さんとか野々村一雄さん（後に一橋大学経済学部教授）とか、それに私の叔母である許斐浪子（このみなみこ）が満鉄調査部で石堂さんと仕事をしていて、それで石堂さんとも親しくしていたんです。

――許斐さんは左翼だったんですか。

羽田　まあ、左翼的といえるでしょうね。そういう関係もあって、調査部に入ったんじゃないですか。許斐は母の関係でしたから。浪子の父と母の父とが兄弟だったんです。母の線で知り合って、私の父とは関係ないですね。母の関係者は、ほとんど満鉄関係だったんです。

敗戦後の大連で着物を売りケーキを売り・・・

――敗戦後の生活についてお伺いしたい。敗戦後、すぐ中国人がソ連国旗を振ってソ連軍を歓迎したとか。その後青天白日旗（国民党）、その後、共産党の赤旗がはためいたということを聞いたことがありましたが、そういう光景は見ましたか。

羽田　そういう風景は私は見ませんでした。ロシア軍がはじめに入ってきた場所にいた人たちは大変だったという話は聞いています。私たちが住んでいるところは、そこから遠く

離れていて、ロシア人の暴行などという話は聞いていましたが、「何かよこせ」と家に来た兵隊もいましたけど、時計を取られたぐらいで、女性に対する横暴なことなどは表面には出てなかったんです。敗戦の時に住んでいたのは、南山麓から下って来たら、「鏡が池」という池の岸辺だったんです。南山麓のすそのところです。

――日本人が中国人に襲撃されたという情景もあったようですが。

羽田　あったという話は聞いていますが、現実に私の見たまわりでは、まったくない。中国人が住んでいた地域でそういうことがあったということは聞いています。しかし私の周りには、危険なことはまったくなかったです。

――お父さんの「先生の仕事」はなくなりましたよね。生活はどうされたんですか。

羽田　そうです。そこから先は大変でした。その辺のところも前に書きました。父はその時、大連実業の校長だったんですが、すぐに引っ張られたんです。

――ソ連軍に？

羽田　ソ連軍だか・・たぶん中国の大連市政府だったんじゃないでしょうか。１ヶ月ぐらい牢屋に入れられて、なんかいろいろ調べられたんです。結局出されてきて、それっきり職はないわけです。後は、母が売り食いして私たちと一緒に活動しました。

――具体的には？　着物などを売られたんですか。

羽田　ええ、着物を売りました。母は結構、好きで洋裁もやっていましたから、着物で洋服を作って、近所のおばさんたちと近くの広場に行って一緒に売ったりしました。ロシア人の兵隊や中国の人たちが買うんです。

――お母さんが着物を売っていた時、羽田さん自身もそこに立ち会われたこともありましたか。

羽田　私は、露店ではないんですけども、日本人も喫茶店を作って、結構いろいろ商売していた人もいるんで、私もピロシキを作ってそこに売りに行ったこともありました。それとは別に、自由学園の卒業生が、「みんなでなんかやろうよ」ということになって・・・大連のデパートがケースを貸し出すということを始めたんです。幾久屋（きくや）というデパートですが、そこでケースを一つ借りて、「友の会」のツテがあり、それで洋服とかおもちゃや、いろんな物を集めて委託販売をやったんです。ソ連の兵隊とか中国の人が買いに来たんです。よく売れました。

――ちゃんと機能していたんですね。

羽田　そうです。そういう意味では、よく売れました。

日本人労働組合の専従職員に

――ソ連の支配下になった大連で、ソ連司令部が唯一許した日本人の組織が日本人労働組合でしたね。羽田さんも石堂さんに誘われて組合の活動を始めたわけですか。

羽田　いや、すぐには誘われませんでした。すぐに誘われて働いたのは、私の妹の方だったんです。妹はその頃まだ女学校の３年生で終戦になってしまいました。

――妹さんは、意識が高いというか、左翼的な精神があったようですね。

羽田　いや妹は左翼的な精神というのではなく、やたら頭がいい人だったんですよ。石堂さんは、私より妹をいたく「あの子は頭がいい」って（笑）、とても可愛がっていたんです。

それでまだ子供なのに、組合の調査室に入れたんです。

――石堂さんの文章の中に、「妹さんは資本論を読んでいた」とか書かれていますが。

羽田　妹はそういう意味じゃ、ものすごく早くからいろんな本を読んでいて、資本論もそうだけど、実は源氏物語なども全部読んでいたんですよ。家にある本はみんなたちまち読んでしまって、それでなんかわかっちゃったみたいなところがあるんですよ。妹は特に、左翼思想とかいうんでなくて、とにかく物覚えが良くて理解が早かったんです。

――羽田さん自身は、石堂さんとのお付き合いもあったし、戦前から左翼的なというか進歩的な思想というかあったんですか。

羽田　私はなかったですね。周りにそういう人がいるっていうことは知ってたけど。それがどういう思想かなんてというのは知りませんでした。そういうことを勉強したのは戦後です。前にも書きましたけど、戦後、初めて日本の歴史というのを知って、組合の仕事もやるようになったんです。周りの左翼の人たちは、子供に向かって、そういうことを言うような人はいなかったのですが、家にはそういう人たちの出入りが多かったんで、周りの人が憲兵に引っ張られたということはよく聞いていました。

――戦前は中国人との付き合いもないようでしたが、戦後はどうだったんですか。

羽田　戦後も私の場合は、お付き合いということはなかったですね。ただ家になにかと出入りしていた中国の人というのは、一人二人いましたけれども。引き揚げる前にそういう人たちに、家のいろんな物を全部あげたりしました。そうしたら自宅に招待されて、たいへんご馳走になりました。そして、「日本に帰っても大変だったら中国に残らないか。僕たちが面倒を見る」と言われたんですけど・・・。

――その後、石堂さんに誘われて組合活動を始めたわけですね。

羽田　ええ。まず入ったのは本部ではありません。満鉄が中国に接収されて中国長春鉄路公司になり、昔の中央試験所は科学研究所になったんです。私は、科学研究所ではなくて、そこの日本人労働組合支部の職員、事務局の専従職員になったわけです。日本人労働組合は、日本人社会や生活を支えるためにいろんなことをやらなければいけない。そのためにお金を集めなきゃいけない。そこでいろんなカンパ活動をして、金持ちからお金を集めて、避難してきた人たちに食糧を援助するなどの活動をするわけですが、それが実際にものすごく大変なわけです。支部の事務局の仕事は、組合の活動を組合員に伝えることでした。

避難民（開拓民）の子供たちに紙芝居

――北満から逃れてきた開拓民の弥栄村（いやさかむら）の人たちにいろんな援助活動をされていますね。あれはどういう経緯だったんですか。

羽田　大連にはいろんな人たちが奥地から入ってきたらしいのですが、弥栄村の人たちは、父が校長をしていた実業学校に収容されたんです。みんなそこの教室に入ったわけです。

そこで、「弥栄村の人たちが大勢入ってきたわよ」という話を聞いたわけです。父は思うところがあったのか、避難民の食事作りを手伝っていたんです。私は避難民の人たちのことを聞いて、自由学園の人たちと、「とにかく行こう」ということになって、いろんなことをしたわけです。

――石堂さんの本を読むと、羽田さんたちは、避難民たちの子供たちをドラム缶風呂に入れたり、集めてきた下着類を着せたり、洗濯物を乾く間に歌を教えたり、紙芝居をやったりされたようですね。どんな紙芝居をおやりになったんですか。

羽田　ええとね、「どんぐりころころ」だとか、「熊のプーさん」だとか。私、はっきり覚えていない。ま、それからいろんな話をほとんど私が描いたんですよ（笑）。

――絵を描くのが好きだったんですね。

羽田　好きだったんです。今はやらないけど、その頃は一生懸命描きました。それを見て、石堂さんがすごく喜んで・・・あとで、紙芝居をソ連将校に見せたということを聞いたんです。

――その将校がこの紙芝居を書いたのは誰かと聞いたようですね。その頃から羽田さんにはクリエイティブなセンスがあったんだなぁと思って・・・

羽田　友だちは大勢いるけど、絵を描く人がいないんで、それじゃ私が描こうということになったんです。

――台詞はどうしたんですか。台本はどうしたんですか。

羽田　いやそれは、もともと本があるわけでしょ。

――それで実際、子供たちに講堂で見せたわけですね。子供たちは喜んだでしょうね。

羽田　喜びましたよね。

――前に、「開拓民のことは知らなかった」とおっしゃったりしていましたけど。

羽田　「避難民がずいぶんひどい格好をしてきている」ということは知っていましたよ。だけど、「北満で何が起きていたのか」は知らなかったですね。つい最近も、友だちと話したんですけど、もしそれが今だったら、すぐそういう人たちにインタビューをして事情を聞いたかもしれない。でもその頃はただ、自分たちが紙芝居をするだけが精一杯で、あぁみんな喜んでくれたと思って・・・。いったいどういうことがあったかなんていうことについて、取材なんていう意識はまったくなかったから。

――その子供たちというと、小学生とか幼稚園のような年頃ですね。お母さんたちはいるわけですよね。お父さんたちは召集されていなかったでしょうが。

羽田　ええ、でもお母さんたちは昼間、だいたいみんな働きに出ているわけです。

――そういう意味では、お母さんたちとは羽田さんは接触ないわけですね。石堂さんが『わが異端の昭和史』の中で、＜生まれつつある社会主義政権のもとで、敗戦国民を新しい連帯のなかにどのように導きいれるかという課題をまったく未経験のなかで、いわば手さぐりで、しばしば傷つきながら果たそうとしたことにあった。羽田のような優れた映画監督が生まれたのは、こうした体験によるところも多いだろうと思われる＞と書いていますね。羽田さん、婦人部の部長になられたでしょう？　その頃まだ、２１か２２でしょ。

羽田　いや恥ずかしい（苦笑）・・・婦人部長になったのは第一次引き揚げの後です。だから、２１の時です。

すぐに日本には帰りたくなかった

――１９４６年の第一次の引き揚げの時に、なぜ引き揚げなかったんですか。

羽田　いや私は大連が好きだったから、帰りたくなかったんです。

――そうなんですか。

羽田　まだ大連にいられるなら、いた方がいいかなと思って。

――どういうところですか、大連が好きなところは？

羽田　街が好きだし・・・空気が、そして雰囲気がとっても好きだったから。

――市民音楽会もあったようですね。藤沢嵐子（戦後アルゼンチン・タンゴを教わり、タンゴ歌手として人気を博した）が歌っていたという記憶はありますか。

羽田　それは知らない。大連には大連芸術座という糸山貞家、藤川夏子夫妻が主宰する新劇の劇団があったんです。その人たちがいろいろ演劇をやってくれたということはありますよ。

――富永孝子さんの著作『大連　空白の六百日』という本に、藤沢嵐子が「あの時代って思い出すのも嫌ですねェ」と書かれている。実は私はタンゴが好きで、知人のタンゴ研究家の重鎮である蟹江丈夫さんに藤沢嵐子のことを聞いたんです。そしたら蟹江さんは、何度も藤沢嵐子に大連のことを聞こうとしたけど、「もう大連のことは話したくない。思い出したくもない」といって話してくれなかったと語ってくれました。「よっぽどいやな目にあったんでしょうね」というのが蟹江さんの話でした。そういう話を聞くと、羽田さんは幸せなっていうとおかしいかもしれないけど、大連時代は良かったんでしょうね。

藤沢嵐子は、その著作『カンタンド　タンゴと嵐子と真平と』で、少しばかり大連のことに触れている。嵐子の父が勤めていた大連郊外の瓦房店に、嵐子と母と末の弟が船で満州へ行き、着いたのは昭和２０年、１９４５年の元旦だった。＜満州―ニラの匂い。母はすぐ父とけんかをはじめた。「どうして、こんな臭い、不潔なところへ連れてきたの！」＞　そして続いて、＜やがて戦争は終わり、日本は負け、瓦房店の工場は接収されて、父は仕事がなくなった。その時から家計は私がみなければならなかった＞とある。嵐子は、大連のダンスホールや音楽喫茶で歌いはじめた。

羽田　「まるで大連は収容所のようだった」みたいに言う人もいます。いろんな雰囲気があったんですよ、大連は広いところだし。私自身はだから、そういう意味じゃ運がよかったんでしょうね。大連でひどい目にあったという印象は全くないんですよね。でもうちの父は、第一次の引き揚げで帰ったんですよ。父は「お前たちはどうする」って言うから、「どうするって、私は残る」って言ったら、「こんなところにいつまでいるんだ。俺は帰るぞって」（笑）、父はさっさと帰っちゃったんですよ。

――お母さんは？

羽田　母と妹と私の３人で大連に残ったんです。母は「あんたが残るなら、私も残るわって」いうわけで・・・。だから、うちもおかしな家ですけどね（笑）。父は父で勝手に帰り、母と娘は残ったんです。「大連に残りたいなぁ」と思っていたら、石堂さんも残るっていうんで、それじゃって残ったんです。母の親戚にも残った人はいるんです。実は妹は、体調

を崩していてもう一年残ったんです。私は昭和２３年（１９４８年）の第二次で帰り、妹は２４年（１９４９年）の第三次で、石堂さんと一緒に帰ってきたんです。

中国人の街に急速に「変貌した」大連

――羽田さんも、次の２４年の第三次で帰っても良かったんですよね。

羽田　ええ、まぁそうですけどね。でも、さすがにやっぱり日本人がいなくなって、寂しくなってきて・・・。第一次の引き揚げで、日本人はほとんど帰っちゃって・・・残っているのは７５００人ぐらいになって・・・。そうすると街の雰囲気が変わりますからね。それに私は中国語ができないから、これはダメだと思って・・・日本人が大勢残っていれば私なども役に立ったでしょうが。もう私がいても役に立つ仕事もあまりないですし・・・。科学者だとか技術者は（中国の役に立つので）残った方がいいわけですよ。私なんかがいても何も役に立たないということが、非常によくわかっていましたから、帰ることにしたわけです。

――どんな雰囲気になったわけですか。

羽田　どんな雰囲気って・・・もう「中国」というふうになって。日本語を話す中国人がいなくなっちゃって・・・

――あぁそうですか。中国人の中には日本語を話すことができても、「話さない」ということもあったでしょうね。ソ連司令部の認可で日本人労働組合が出来て、その後八路軍（中国共産党系）の人民政府が１９４７年に成立した後、日本人の捕虜だった人たちで、延安から来た日本人グループと労働組合の幹部の間で不協和音があったということを聞いていますが・・・。

羽田　えぇ、そのことは知ってました。日本人労働組合ができた時から、延安グループの人たちが入っていました。石堂さんからも聞いたことがあるけど、満鉄調査部にいた人や日本で左翼だった人たちが労働組合の幹部だったわけですが、延安グループとは、意識の違いがあるわけですよ。中国人民政府の方は、延安組の方を信用するわけです。こちら側の、日本の左翼の方には距離があるわけです。相当いろいろあったようですけど、私なんかはよくわかりませんでした。でも、そばで見聞きしていて、私うんざりしたんですね。どうもなんかおかしい。左翼で日本の軍国主義に対して闘った人たちが、新しい社会を創るということで、もっと理想的に事が進むと思っていたけど、政治というのはそんな単純じゃないということが、なんとなくわかってきましたね。

石堂さんという方は本当にストレートで、ウラオモテのない人で、ある意味ではいわゆる政治屋的な動きをほとんどなさらない人ですから、私は信頼していたんです。でもずいぶんいじめられたらしいんです。

帰国の船中では・・・

――大連中央放送局のアナウンサーだった糸居五郎、僕なんかはラジオのジャズ番組のＤＪで親しんでいた彼は、「誰はばかることなくジャズが聞け、所持金がなくなれば働き、金ができればうまいものが食べられる。ダンスホールもあれば、恋も花咲く」（『大連　空白の六百日』）なんて言ってますよね。糸居五郎は、大連をすごく楽しんでいるよ（笑）。

羽田　大連は、大人の人にはすごく楽しい場所だったみたいですよ。私なんかは子供の時は、映画館も行っちゃいけない、外に一人でご飯食べに出てはいけないという時代でしたから、大連の楽しいそういうところは全然知らないうちに敗戦になって・・・。大人の遊びを知らないままです。

――彼がこのことを言っているのは戦後です。戦前もダンスホールはあったようですがね。羽田さんは、日本という国から棄民された意識はありましたか。

羽田　全然ないです、私はね。家が接収されて、どんどん引っ越ししなければならなくて大変でしたけど。

――技術者で留用ということで残った人がいましたよね。

羽田　何人もいましたよね。ずいぶん八路軍に貢献された方が多いですよね。看護婦さんも多かったですね。（大類注：当時、留用された技術者には高給を出し管理職につけたという。ソ連のシベリア抑留に比して、新中国建設の熱意、その懐の深さが伺えるだろう）

――帰るに際しては、荷物などを含めてどんな感じで帰られたんですか。

羽田　いやぁ、荷物なんてちょっぴりしかないから。

――船はなんていう名前ですか。

羽田　山澄丸。

――どれぐらい船に乗っていたんですか。

羽田　どれぐらい乗っていたんだろう？　４泊５日だったと思います。

――大連港からお帰りになった時、港には石堂さんや妹さんが見送りにいらっしゃいました？

羽田　いえ・・・・・（昔を思い出し考えるふうに）・・・送りになんて・・・・来なかったですね。収容所に入って、いつ出発するかわからないのですから。

――感傷というか、好きな大連を離れるということでは、どうだったんですか。

羽田　もう収容所に入っちゃうと、周りの景色などもうあまり見えないから・・・（笑）

――あぁそうか。町から出て、船に乗るまでは収容所生活だったわけですね。収容所は大連港のそばですか。

羽田　えぇ、そうです。

――どこが収容所になったんですか。

羽田　どこって？　港の近くです。そこに１週間ほどいて・・・だから感傷もなかったです。船の中では、これも書きましたけど、反組合の動きがありましたからね。船に乗ったらすぐですよ。

――じゃ羽田さんも吊るしあげられて・・・

羽田　えぇ吊るしあげられて・・・（笑）。石堂さんが帰国された時もあったようですけど、石堂さんはこんこんと演説できる人ですから、途中でみんなシーンとなっちゃったらしい

けど。第一次の引き揚げでは、本当に海に放り込まれた人もいるみたいですよ。

――身の危険はありましたか。

羽田　身の危険というほどじゃないけれども、甲板には出ない方がいいと言われましたねぇ。もちろん仲間もいましたが・・・でも本当に、大連にいた時は、ニコニコ私と話していた人が、実は反対側の人だったりして（笑）・・えっ！この人どうしちゃったんだろうって、びっくりしたようなこともありました。

――５日かかって舞鶴に着かれた時は、どんな感慨でしたか。

羽田　まぁ・・感慨って・・・実は船の中で天然痘が発生したんですよ、一人ね。それで船からあがるのにも時間がかかったし、収容所に一ヶ月留められたんです。その時は、野々村一雄さんも向坂正雄さん、向坂逸郎さんの弟さんと一緒でしたね。

しかし実は、この船中では羽田さんは大変な目にあった。前出の「あごら」でこう書いている。

＜船が公海に出ると、船内の状況は一変した。すでに準備していたのだろう。たちまち「組合に反対する勢力がリードする組織」が立ち上げられた。やがて広い船室に人を集め、組合のメンバーを弾劾する集会が開かれた。何人かの組合幹部に混ざって、私まで台の上に上げられて、悪口を浴びさせられた。

全く知らない顔が並んでいる。何を言われたのか、具体的な言葉は忘れたが「労働組合は日本人を苦しめた」「裸にして海に放り込め」といったような罵詈雑言が浴びせられた。不思議なことに、ひどい騒ぎなのに、騒ぎが一段落するまで、船の関係者は一人も出てこなかった。

同じようなことは、入港した舞鶴の収容所でも起きた。実は「山澄丸」では天然痘が出たために、私たちは一ヶ月も収容所に留められた。その間、組合の幹部は集会でつるし上げられ、その後、つぎつぎと、殴られていた。私も呼び出された。見たこともない男たちに囲まれて殴られ、体が吹っ飛び、顔はお多福のように腫れあがった。親に叩かれたこともないので、殴るとはこういうことかと、びっくりした。そしてここでも、ＣＩＡの調査は厳しかったが、騒ぎの間、収容所の係りは一人も出てこなかった＞

日本に帰国してから

――舞鶴から、どちらに向かわれたんですか。

羽田　神戸に私の父のお兄さんの家があったんで、そこにまず行きました。その頃、父が静岡県の稲取（いなとり）という所の高校の先生をしていて、静岡に親戚の家があって、そこがまぁ羽田家の本籍地ということで、母と二人で一緒に静岡に行きました。私はすぐ職探しをして、静岡教育図書という出版社に勤めました。そこで本当は編集をやるんだといいなぁと思ったら、経理をやらされたんです（笑）。そう、一番苦手な（笑）・・・でも文句を言っちゃいけないと思って、「おとなしくハイ」としばらくそこにいたんですが、経理が苦手なので、なんとかしたい、東京に出たいと思ったんです。その頃、東京は入居制限していたんです。そこで向坂さんの家に泊めてもらって職探しをして入れたのが、もう今無くなっちゃった

けど、国会議事堂のそばにあったＧＨＱチャペルセンターです。

――チャペルセンターって何だったんですか。

羽田　チャペル、教会だったんです。ＧＨＱのチャペルだったところです。

――じゃあ、ＧＨＱに勤められたみたいなわけですね。またどうしてですか。

羽田　なんだったんだろうかなぁ。たぶん向坂さんのツテだったと思います。そこでは出勤簿の担当（笑）、タイムレコーダーです。そこに半年もいたかなぁ、１年はいなかった。そしたら、自由学園の先生だった羽仁説子先生が岩波映画に誘ってくれたわけです。チャペルセンターは、アメリカの兵隊が何人も出たり入ったりしていて結構面白かったです。

――羽田さんは、２１歳まで、５年間の日本での生活を除くと、ずっと大陸育ちですよね。日本での生活では、何か違和感というようなものがありましたか。

羽田　うーん・・・まぁ・・・そういう意味では、大陸がなんとなく一番身が合っていたけど、日本でも結構、あちこちうろうろしているわけですよ。津にいて静岡にいて、家は大連でしたが、東京の学校にいてと、雰囲気の違いというのがよくわかるわけです。ただ同じ所に長く暮らすといったことがなかったわけです。みんなちょんちょん変わっているから。一番長く過ごしていたのは、大連と旅順だったわけですね。だけど、日本の雰囲気もわからないじゃなかったから・・・

――ずっと日本育ちの人と、なにか違和感というのは・・・

羽田　それはちょっと、ありましたね。ずいぶんこう、違ってたんじゃないかなぁ。母も外地育ちだし、私はあんがい気がつかない方だから。でも日本の人たちの人間関係が面倒で、ええ？！なんて思うこともありましたね。

――旧満州の人たちと、戦後も付き合いはありますか。

羽田　旅順や大連で一緒だった人で近所に住んでいる人とはしょっちゅう電話で話したりしています。旅順時代の同窓会とか、大連会の会合などもできるだけ出席します。

――岩波映画時代ではいろいろな映画創りに携われたけど、旧満州での体験を映画にしたいということは思わなかったんですか。

羽田　それはずいぶん思いましたけど、私は大連よりも旅順を撮りたかったんですね。でも旅順は、ずっと閉鎖されていて・・・

――旅順の何を撮りたかったんですか。

羽田　旅順がいろんな意味で、一番懐かしい場所なわけですよ。

――あの赤煉瓦の家から見た光景とか・・・

羽田　えぇ、えぇ。ＮＨＫが「わが心の旅」という番組で、「大連でやりませんか」とだいぶ誘われたんだけど、私は旅順でやるんだったら行くけどと言ったんですが、（外国人には開放していず）旅順はダメなもので、その時は山田洋次さんが出られたんじゃないかと思います。そういうわけで旅順ならいいなと思っていました。

――帰国後、最初に中国に行かれたのはいつですか。

羽田　１９８５年だったかな。改革開放になってからです。その時、イギリスの船で行ったら、大連時代に親しかった香山磐根（注：長い間、大連会の事務局長を務め、現在は国際善隣協会の専務理事。今回の映画でも協力された。筆者は方正に関わる以前から、残留婦人のことでお付き合いがある方だ）さんもいらしてました。そのずっと前から中国に行きたいとは思っていたんですが、岩波映画の仕事がたくさんありましたから、休暇も取れ

ず、やっと定年退職（５５歳）になって、休暇が取れて行くようになったわけです。

映画『鳴呼　満蒙開拓団』の意味

――羽田さんは映画作家としていろんな作品を創られたわけですが、今回の『鳴呼　満蒙開拓団』という作品は、羽田さんの長い映画人生にとって、どんなふうに位置づけられますか。

羽田　まぁ、いつかはやらなきゃならなかった問題を、とにかくやることができたなぁと思っていますよね。ただ、映画を創ること自体が大変でしたから、自分の創りたい仕事ができるようになる頃は、ほとんど定年直前ですよね。その頃やっぱり、自分がやりたいことというのは、少しでも日本の社会を良くすることに役に立つ映画を創りたいということが一番ベースにありましたから。それで、老人問題の映画を創ったわけですね。だけどそれとは別に、私は結構、絵が好きだったり、いろんなことが好きなわけで、そういう自分の好きなものを創っていたわけですよ。

その老人問題もある意味で一応一段落した時に、この残留孤児の国家賠償訴訟問題がありました。訴訟が始まってからは、（裁判に）ほとんど行けるだけ行って（裁判を）聞いていたんです。それで撮れる時には人に頼んで撮ってもらっていたんです。だけど、この問題をどういうふうに扱うかは非常に難しいと思っていた時に、方正（日本人公墓）の話を知ったものですから。だから今まで生きていて、いつかは自分の人生の中でやらなきゃならなかった問題ではあると思いましたね。だからそれをやれたから、本当はこれで終わりになってもいいやぐらいの思ってやったんだけど。そうしたら心筋梗塞になって（笑）・・・

――まだまだこれからも、いろんな映画を羽田さんに創ってもらいたい気持ちはあるけど、今度の作品は、ある意味では、映画人生の集大成というふうに言えますかね。

羽田　まぁね。これで終わりになってもいいなっていうふうには思いましたねぇ。

――まぁ、悔いはないというか（笑）・・・

羽田　でも、夫（プロデューサーの工藤氏）は、まだ創れなんて言ってますがね。

――でも、まぁいいご主人というか伴侶というか、幸せな人生でしたね。

羽田　さぁ・・どうだか・・・(笑)。まぁ私は本当は、旅順が撮れるようになったら、撮りたいんですよねぇ。どういうふうに撮るかはまだ考えていませんがね。

インタビュー後、羽田さんは、「羽仁もと子先生はキリストのことを大事に言われたけど、私はそれにとらわれていない。それでも人生は、社会のために役立つようにしなければいけない、という言葉はしっかりと刻まれたように思いました」と語るのだった。お体を大事にして、いずれは旅順を舞台にした記録を撮っていただきたいと思う、と締めくくるつもりでいたら、４月１６日、旅順口区（旧旅順）の恵凱区長は一部の日本メディアと会見し、軍事施設周辺を除き、今年の夏にも旅順を全面的に対外開放する意向を明らかにしたというニュースが入った。これはすぐにでも旅順を舞台に、「わが懐かしの旅順、そして今」といったテーマで新たな作品に着手していただきたいと思った。

日本中国文化交流協会　2009年3月1日発行の「日中文化交流」より転載

映画「嗚呼　満蒙開拓団」を作って

記録映画作家　羽田澄子

これは昨年（2008）仕上げた映画ですが、この映画を作ることが出来て、私は大きな重い宿題をひとつ果たしたような気持ちです。

私は旧満州、大連生まれ。父は女学校の教師でした。父の転勤で一時日本に帰りましたが、転勤で再び満州に戻り、旅順と大連で暮し、日本に引揚げて来たのは戦後3年経った1948年です。

国際港のある大連は満州で最も繁栄していた都会で、日本人の支配する社会がつくられていました。敗戦によって状況は一変しましたが、それでも大連は他と比べれば平穏でした。当時、音信は途絶え、日本の様子も満州奥地の様子も解りませんでした。私は殆どの日本人が引揚げた第1次の引揚げでは帰国せず、1年後の第2次引揚げで帰国しましたが、引揚船に乗る桟橋を渡りながら、「これで本当にみんな日本に帰れるのだろうか」と思いました。しかしその後、日本での生活に追われ、満州の奥地で起きていたことも、引揚げの実態も知ることなく何十年も過ぎてしまいました。

改めて関心を持つことになったのは、残留孤児の来日調査がはじまり、新聞に報道されるのを見るようになってからです。2002年に中国「残留孤児」国家賠償請求訴訟が始まってからは、裁判の成り行きに大きな関心をもつことになりました。その頃のことです。「星火方正」（せいかほうまさ）という不思議な冊子が届きました。「方正（ほうまさ）友好交流の会」の会報です。見て驚きました。中国東北部ハルピンに近い方正県に、亡くなった日本開拓村の難民のために中国人が建立してくれたお墓「方正地区日本人公墓」があるというのです。関東軍に侵略され、開拓団に土地を奪われ、日本人に恨みをもって当然な中国の人が「何故日本人のお墓を」と思いました。

ソ連の満州侵攻、日本敗戦のとき、関東軍の兵站基地のあった方正地区には奥地の開拓村から多くの避難民が集まって来たのでした。しかし極寒のこの地で越冬できず、数千人の人が亡くなっているのです。戦後、年月を経て、散乱した遺骨の山を見た残留婦人・松田ちゑさんの「この遺骨をお墓に」という願いが実現したのは、「日本人民も開拓民も日本軍国主義の被害者だ。」とした周恩来総理の判断でした。

「方正地区日本人公墓」へのツアーのあることを知って、私は早速参加。映画の製作を決心したのでした。「お国のため」と送り込まれた満州移民は敗戦後、廃棄されたも同然になったのです。体験者の多くは既になくなっていますが、多くの方にインタビューしました。映画が日本の近現代史を考え、日中関係の大切さを考える役に立てればと願います。

〈はねだ・すみこ〉

映画「嗚呼 満蒙開拓団」上映について

私どもは、ドキュメンタリー映画「嗚呼 満蒙開拓団」（羽田澄子演出）を製作いたしました。

戦後60年以上経った現在の日本では、遠い昔のこととして忘れ去られているかのような「満蒙」という言葉。しかし、満蒙開拓団の悲劇は、今に続く問題です。

映画を通じて、満蒙開拓団とその時代を振り返り、生き残った方々の話しに耳を傾け、この問題を１人でも多くの方々と共有できれば、と願っています。

映画は、来る６月１３日からの東京、岩波ホールでのロードショーを皮切りに、シネマシンジケートの協力を得て、全国20数箇所の映画館で上映が予定されています。映画館上映の宣伝などお力添えいただける方がいらっしゃいましたら、各映画館までご連絡いただければ大変有難く存じます。

さらに広く、全国各地でこの映画をご覧いただきたく、劇場公開とともに、自主上映会への映画の貸出も積極的に進めていきたいと考えております。自主上映会にご関心の方は、弊社までご連絡ください（TEL:03-3463-7543）。

この映画は、今までの弊社作品と同様、自主製作の映画です。特定のスポンサーはなく、映画の製作費は、映画貸出料、映画館での入場料によって支えられております。どうぞご理解・ご支援をいただきたく、宜しくお願い申し上げます。

映画製作・配給　株式会社自由工房
TEL：03－3463－7543　FAX：03－3496－4295
〒150-0036 東京都渋谷区南平台町15－1
mail:jiyu-kobo@nifty.com

映画館　上映予定

都道府県	都市名	劇場名	TEL	上映初日
北海道	札幌市	シアターキノ	011-231-9355	未定
	函館市	シネマアイリス	0138-31-6761	未定
青森	八戸市	八戸フォーラム	0178-71-1555	未定
岩手	盛岡市	盛岡フォーラム	019-622-4703	未定
宮城	仙台市	仙台フォーラム	022-728-7866	8月8日
山形	山形市	山形フォーラム	023-632-3220	未定
福島	福島市	福島フォーラム	024-533-1717	未定
東京	千代田区	岩波ホール	03-3262-5252	6月13日
神奈川	横浜市	シネマ・ジャック　＆　ベティ	045-241-5460	８月
	川崎市	川崎市アートセンター	044-955-0107	夏
	深谷市	深谷シネマ	048-551-4592	９月
群馬	高崎	シネマテークたかさき	027-325-1744	未定
新潟	新潟市	新潟・市民映画館シネウインド	025-243-5530	7月25日
長野	松本市	松本CINEMA SELECT		7月25日
静岡	浜松市	シネマe_ra	053-489-5539	8月29日
愛知	名古屋市	名古屋シネマテーク	052-733-3959	8月15日
石川	金沢市	シネモンド	076-220-5007	8月8日
大阪	大阪市	第七藝術劇場	06-6302-2073	８月
京都	京都市	京都みなみ会館	075-661-3993	夏
滋賀	大津市	滋賀会館シネマホール	077-522-6232	未定
岡山	岡山市	シネマ・クレール丸の内	086-231-0019	夏
広島	広島市	横川シネマ	082-231-1001	夏
福岡	福岡市	シネテリエ天神	092-781-5508	8月15日
沖縄	那覇市	桜坂劇場（3ｽｸﾘｰﾝ）	098-860-9555	未定

あなたは満蒙開拓団の悲劇を知っていますか。

羽田澄子演出作品

鳴呼 満蒙開拓団

妹は最後に
「お芋食べたーい、お芋食べたーい」
と言っている間に
連れていかれた。

今でも誰か官僚に聞きたい。
何で私たちを
満州へ送り出したのかって。

2008年キネマ旬報文化映画ベストテン第1位
2008年日本映画ペンクラブ文化映画ベスト1
2008年東京国際女性映画祭オープニング作品

開拓団の人たちが
トラックの窓に手をかけて
「乗せてってくれ」って。
それを振り払って
行っちゃうんだから。

満州に行くときは、
皆「国のため」と行ったの。
あんな遺骨を見ると
残念で。

なぜ、この悲劇は起きたのか。

製作：工藤充　演出：羽田澄子（ナレーター兼）　撮影：相馬健司　整音：滝澤修　ピアノ：高橋アキ（サティ：ピアノ音楽全集より）　吹替ナレーター：喜多道枝　協力：ハルピン市方正県人民政府／方正県人民政府外事僑務弁公室主任 王偉新／ハルピン市日本中国残留孤児養父母懇親会 秘書長 石金楷／黒龍江民族旅行社／方正友好交流の会／長野県泰阜村　2008年／120分／カラー／スタンダード　自由工房作品

次ページは、このチラシの裏面である。

満蒙開拓団とこの映画について……羽田澄子

私は旧満州の一部と見られていた関東州の大連に生まれ、小学校も女学校も旅順。そして戦後、引揚げてきました。しかし、同じ満州でも最南端の都会に暮らしていた私は、戦後、満州の奥地で起きていたことを知りませんでした。知ることになったのは1981年、「中国残留日本人孤児」の訪日調査がはじまり、さらに2002年に中国「残留孤児」国家賠償請求訴訟がはじまったことがきっかけでした。裁判がどうなるかと見守っている間に、中国東北地区の方正（ほうまさ）県にある「方正地区日本人公墓」のことを偶然知ることになりました。

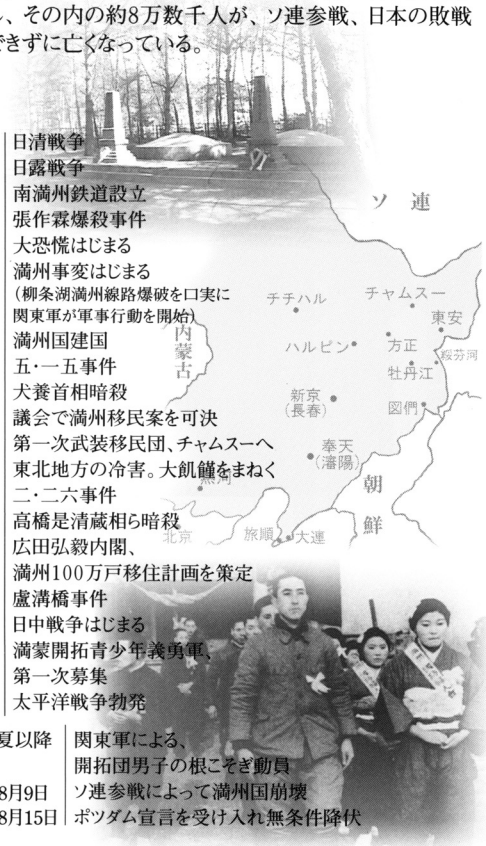
方正地区には、ソ連軍の満州進駐、日本の敗戦によって、満州の奥地から多くの開拓民が避難してきて、ここで数千人もの人が亡くなっているのです。「この人たちの遺骨をお墓に」と願った、ある残留婦人の思いを受け止めたのは中国の周恩来総理でした。周恩来の指示によって、中国方正県政府が建設したのが「方正地区日本人公墓」なのです。「お国のため」と送り込まれた満州移民は敗戦によって、遺棄されたも同然となりました。その体験者の多くはすでに亡くなっていますが、多くの方に取材し、日本の近現代史を振り返り、日中友好が大切であることを考えました。

嗚呼 満蒙開拓団

ああ　まんもうかいたくだん

満蒙開拓と時代の流れ

満蒙開拓団とは、1931年の満州事変以後、日本政府の国策によって、中国大陸の旧満州、内蒙古に入植させられた日本移民のこと。1945年の太平洋戦争敗戦までに送り込まれた開拓団員は約27万人と言われている。しかし、その内の約8万数千人が、ソ連参戦、日本の敗戦によって、帰国できずに亡くなっている。



■年表

1894年（明治27年）	日清戦争
1904年（明治37年）	日露戦争
1906年（明治39年）	南満州鉄道設立
1928年（昭和3年）	張作霖爆殺事件
1929年（昭和4年）	大恐慌はじまる
1931年（昭和6年）	満州事変はじまる （柳条湖満州線路爆破を口実に関東軍が軍事行動を開始）
1932年（昭和7年）	満州国建国 五・一五事件 犬養首相暗殺 議会で満州移民案を可決 第一次武装移民団、チャムスーへ
1934年（昭和9年）	東北地方の冷害。大飢饉をまねく
1936年（昭和11年）	二・二六事件 高橋是清蔵相ら暗殺 広田弘毅内閣、 満州100万戸移住計画を策定
1937年（昭和12年）	盧溝橋事件 日中戦争はじまる
1938年（昭和13年）	満蒙開拓青少年義勇軍、 第一次募集
1941年（昭和16年）	太平洋戦争勃発
1944年（昭和19年）夏以降	関東軍による、 開拓団男子の根こそぎ動員
1945年（昭和20年）8月9日	ソ連参戦によって満州国崩壊
8月15日	ポツダム宣言を受け入れ無条件降伏

出演者の証言

今でも誰か官僚に聞きたい。何で私たちを満州へ送り出したのかって。

■石原政子さん

戦争が進む中、父母は、5人の子供を抱え食うや食わずの生活に陥る。役場の人に「満州へ行けばお米もたくさんあるし、作物は誰でもできる」と何度も勧誘され、一家で満州へ渡ることに。彼の地に着いたのは昭和20年5月26日。間もなく終戦。開拓団から避難命令が出たその日に日本から届いた荷物を、紐とくこともなく逃避行。満州で父母、妹らを亡くす。

開拓団の人たちがトラックの窓に手をかけて「乗せてってくれ」って。それを振り払って行っちゃうんだから。

■樽沢仁さん

終戦の2ヶ月前、10歳の時に、父の小部隊のある綏芬河へ渡る。ソ連との国境の町であったが、終戦時は軍人家族として最優先で後方へ逃がしてもらえた。軍のトラックに乗って避難する道中に見たのは、何十台と続く軍のトラックが、逃亡手段を持たない開拓民たちを置き去りにして進む姿だった。満州で母と妹を亡くす。

妹は最後に「お芋食べたーい、お芋食べたーい」と言っている間に連れていかれた。

■金丸キヌ子さん

開拓団家族として満州へ。終戦当時8歳。母と姉妹、同じ集落の女性、子供たちとともに逃避行を始める。襲撃の危険に晒され、飢えと疲労で泣き叫ぶ子供たちを犠牲にせざるを得ない悲劇が次々に起こる。方正の避難所に着いてからも、厳しい冬を越せずに多くの人々が亡くなっていった。幼い妹は避難途中に犠牲となり、母も避難所で亡くなった。

満州に行くときは、皆「国のため」と行ったの。あんな遺骨を見ると残念で。

■松田ちゑさん

開拓団員として満州へ。夫は徴兵され、避難した方正で一人娘を失う。自身も重い病気で生死をさまよい、助けてくれた中国人と再婚し中国で暮らす。戦後十数年経った頃、砲台山の麓の畑を開墾していたとき、山となった日本人の遺骨を見つける。せめて埋葬してあげたいと、方正県政府に日本人の墓を作る許可を願い出た。

製作：工藤充　演出：羽田澄子（ナレーター兼）　撮影：相馬健司　整音：滝澤修　ピアノ：高橋アキ「貧者のミサ Ⅵ.死の危険にさらされている旅人」「貧しき者の空想」（サティ・ピアノ音楽全集第3集より）　吹替ナレーター：喜多道枝　［協力スタッフ…演出：佐藤斗久枝／石井かほり　撮影：西尾清　コーディネーター：奥村正雄　中国語翻訳：仲偉江　中国語通訳：佐渡京子］　アオイスタジオ
協力：ハルピン市方正県人民政府／方正県人民政府外事僑務弁公室主任 王偉新／ハルピン市日本中国残留孤児養父母懇親会 秘書長 石金楷／黒龍江民族旅行社／方正友好交流の会／長野県泰阜村／大類善啓／香山磐根／大竹洋子／国友俊太郎　資料提供：新華社／毎日新聞社／愛知県立農業大学校／寺村謙一／藤田繁　　ポスターデザイン：小笠原正勝／秋山京子
製作・配給：株式会社自由工房　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町15-1　TEL:03-3463-7543 FAX:03-3496-4295　　Email: jiyu-kobo@nifty.com

6月13日(土)より ロードショー！

岩波ホール
03-3262-5252 http://www.iwanami-hall.com/
●地下鉄（都営三田線・新宿線／半蔵門線）神保町駅・A6出口スグ
JR（中央線）水道橋またはお茶の水駅・下車徒歩12分●神保町交差点角

特別ご鑑賞券1,500円（税込）
●ペア前売券（お二人様・岩波ホール窓口のみ）2,900円（税込）
当日料金（税込）：一般 1,800円／シニア・学生 1,500円

上映時間［入替制／自由席定員制］				
	月～金	11:30	2:30	6:30
	土・日・祝	11:30	2:30	5:30

私の知る羽田澄子さん

佐渡　京子

私が羽田さんの演出助手として働いていたのは1999年～2001年までの3年間、作品では、「続・住民の選択した町の福祉」、「平塚らいてうの生涯」の2本に関わった。

子供の頃から映画が好きで、漠然と映画の仕事につきたいと思っていた私は、大学卒業の年にたまたま観た「住民の選択した町の福祉」がきっかけで、どうしても羽田さんと仕事がしたいと思い、羽田さんと同じ学校を卒業したというだけで、強引に演出助手にしていただいた。羽田さんは学校の先輩と言っても、私とは50歳以上も歳が離れており、卒業したばかりの私は、助手として仕事をサポートしたというより、迷惑をかけたことのほうが多く、羽田さん、それから羽田さんのご主人でプロデューサーでもある工藤さんには、映画作りのみならず、かけがえのない多くのことを教えていただいたと思っている。

日本の記録映画界の先駆け的存在である羽田さんは、伝統芸能や社会福祉など、独自の視点とメッセージで社会を変える作品をたくさん撮ってこられた。しかし今回は、羽田さんの映画監督としての評価や社会的評価は他に譲りたい。なぜなら、私のなかの羽田さんは、「偉大な映画監督」ではなく、どこまでも「かわいらしい人」というイメージなのだから。

誰もが和らぐ羽田さんの素顔

羽田さんに会ったことがある人なら、誰もがそう思うと思うが、羽田さんは、いつもにこにこ、ふわふわしていて、誰にも警戒感、緊張を感じさせない。羽田さんがいるだけで、その場の空気が和らぐ。羽田さんの醸しだすその雰囲気は、映画の被写体の中に溶け込み、彼らが気を許して本当の姿をさらけだしたり、彼らの口から直に本音を聞きだすという、記録映画には必要不可欠な材料づくりにとても役立っていると思う。

被写体が羽田さんを信頼し、羽田さんになら見せてもいい、羽田さんになら本当のことを話す、羽田さんの作品になら登場してもいいというケースが何度もあった。

記録映画は劇映画と違い、撮影スタジオやセットのなかで、登場人物に台詞を言わせるのではないから、特に人物が動いたり話したりするシーンの撮影のチャンスはたった一度きり。だからそれを逃したらもうその後はない、という緊張感が常につきまとう。

映画監督としての羽田さんの才能については、多くの人が評価しているが、私は、画面のなかに直に写らない、この羽田さんの魅力こそが、記録映画作家としての天性の才能だと思う。

作品には妥協しない作家精神

しかし羽田さんはやわらかいだけかというとそうではない。羽田さんは、よく「魂を込めて作品をつくる」と言うが、羽田さんのなかには、魂というか、決して譲れない信念というものがあり、それは何においても優先的に追求される。たとえ時間と労力とお金がかかっても、誰かの機嫌を損ねることであっても、羽田さんは恐れない。

長い時間をかけて編集し、やっと完成間近というときに、仕上がりに違和感を感じてほとんどをやり直したこと、無理を承知でやっとインタビューに漕ぎ付けたが、思うように話が引き出せなくて、もう一度頼み込んだこと、有名な方に出演していただいたものの、編集するうちに構成上必要ないことに気づき、結局採用しなかったことなど、インタビューのアレンジなどのスケジュール管理と資金を調達するプロデューサー泣かせだと工藤さ

んは言うが、しかし誰もが羽田さんの信念なしには映画は成り立たないことを知っている。
周囲でサポートする私たちが困惑しなかったと言えば嘘になるが、自分の気持ちを迷いなく表現したいという強い意志を持ち、信念を貫くためには、あらゆる雑音を一切遮断できてしまう羽田さんの潔さには心打たれるものがあった。
私は幸運なことに演出助手という仕事柄、多くの時間を羽田さんと一緒に過ごすことができた。ロケ先に移動しながら、食事をしながら、休憩時間にお茶を飲みながら羽田さんとお喋りしたことが、なつかしく思い出される。
助手として、監督の考えや思想を知ることは何よりも大切なので、羽田さんをよく知って仕事に生かしたいという気持ちもあった。しかしそれ以上に、私は人間として、女性として、羽田澄子さんという人に強く興味を持っていたと思う。羽田さん、あなたはどうしてこんなにかわいらしくて魅力的なのですか、と。

鋭い問題意識と責任感

戦時中の話、旅順での生活の話、戦後引き揚げてきた頃の話、岩波記録映画製作所で仕事をしていたときの話、古きよき時代の映画界の話や逸話など、羽田さんの生き方、考え方を知ることは、当時の生きた歴史をまるごと知ることだった。
羽田さんが生きた昭和という時代は、時代そのものがドラマチックだったのだが、羽田さんにはその艱難辛苦の澱のようなものが全く残っておらず、不思議な透明で穏やかな空気が漂っている。本当の意味で人生の荒波を乗り越えて生きてきた人には、どこか超越しているところがあるのかもしれない。
とはいえ困難を乗り越えてきたからこそわかる他人の痛みや苦しみ、それを理解して相手を思いやれること、何かををしなければという強い問題意識と責任感、それこそが羽田さんの美徳であり、それが羽田さんの作品にはっきりと映し出されていると思う。
羽田さんと私が卒業した自由学園には、創立者の羽仁もと子先生が多くの言葉を残しているが、そのなかで羽田さんがよく言っていたのは、「感じた人が行う責任がある」という言葉だった。
「感じた人が行う責任がある」というのは、小さな例では、道にゴミが落ちていて、汚いなと感じる、汚いなと感じたのに素通りするのはいけなくて、そう思った人が自ら拾って捨てるべきということである。

心に訴える表現力

映画というものは記録映画に限らず、映画監督の感性で出来ているものだが、まず羽田さんの感性のベースには、「感じた人が行う責任がある」ということがあり、羽田さんの多くの社会福祉を題材にした映画は、お母様を自宅で介護した実体験と社会福祉とは何かという社会への問いかけが源になっているし、最近の作品である終末期医療に問題を投げかけた映画「終わりよければすべてよし」は、羽田さんの実の妹さんが病院で亡くなられたときに感じた違和感がきっかけとなってできた作品だという。
羽田さんの感性に忠実に映像化されたものが、こんなに多くの人々に受け入れられるのは、映画の根底に流れるものが、素直でシンプルな、人間として当たり前の感情であって、扱っているテーマが特殊な分野にあるものであったとしても、核心にある問題提起は誰にもわかりやすいように噛み砕いて表現されいるからだと思う。
そして私が一番素晴らしいと思うのは、羽田さんの映画の題材となった社会福祉や医療にしろ、政治にしろ、現実がどんなに暗く悲惨でも、そのテーマは必ず希望的なメッセージとなって人々の心に訴えかけるように表現されているところである。どんな状況におい

ても、希望こそが現状を打開し、前を向いて進むことこそ、何かを変える第一歩であるという考え方は、おそらく厳しい時代を曲がることなくまっすぐに生き抜いた羽田さんの実感であり、それが作品を通じて、観る人に勇気を与えるのだと思う。

「感じること」を大切に！

羽田さんからは「感じることを大切にしなさい」と教わってきた。私が突然中国行きを決めたのも、WTO 加入や、北京オリンピックの開催が決定して中国が世界から脚光を浴び、経済が活発になっていたからではない。初めて中国に行ったとき、この国は面白い、懐が深い、中国に行けば何かがあると漠然と感じたからであった。それがなんなのかを知りたい一心で私は中国に渡ってきた。正直言ってその何かはまだわからないし、私がこの国で何が出来るかもよくわからないが、今回、羽田さんの方正のロケに通訳としてお手伝いし、方正のことを知り、「方正友好交流の会」の方々と触れ合うチャンスを与えられたことは、少なからず中国に来た意味があるのかなと思っている。

志を持続させること

私が折に触れて思い出すのは、羽田さんがいつも仕事の時に私に言っていた、「何をするにも志を持ち続けること」ということである。羽田さんの言う「志」とは、何かをするときに自分の利益だけを考えるのではなく、その行動が少しでも誰かの、世の中のために役に立つことをするということである。

「志」を持ちながら、「感じた人が行う責任がある」というのを真の意味で実行しようとすれば一生をかけて取り組まなければいけない仕事になるはずだが、誰もがそう思って行動すれば、この世の中も少しは変わるんじゃないかと思う。

羽田さんは映画を通して、これまでもこれからも多くの人に影響を与えていくと思うが、私は私のやり方で羽田さんから感じたことを後世に確実に引き継いでいくことが私なりの「感じた人が行う責任」を全うすることだと思っている。

＜さわたり・きょうこ、1977 年生まれ。自由学園卒。1999 年～2001 年まで（株）自由工房で羽田澄子監督の助監督として勤務。2001 年中国留学。2003 年～2005 年河北省燕山大学に勤務。2006 年～現在、在中国日本国大使館に委嘱員として勤務＞

日本人公墓建立史の影に隠れた部分は・・・

可児　力一郎

逃避行から避難所生活の終わりまで

泰阜（長野県）中川（埼玉県）七虎力（岡山県）読書（長野県現在南木曽町）、四つの開拓団約3000人の集団が行軍開始して二日目、八虎力と言う河の中州を通過中に襲撃を受けて、暴徒と白兵戦をまじえ、次々と凶弾に倒れて行く同胞達の血で染まった中州では、怪我や病気で動けなくなり、荷車に乗ってここまで来たが車は移動出来なくなり、肉親を置き去りにするしかなかった人達や、父親が現地召集され母親に手を引かれて行動して来たが戦闘で往きはぐれた子供達が、かあちゃん母ちゃんと泣き叫びながら隊に着いて行動していた。中途で合流した兵士達の中には重傷の戦友を背負って行動する姿も。その動けない重傷兵士が自決した時、一緒に自決に加わった開拓民の婦女子もいた。松花江最大の支流・牡丹江を夜間渡河中、誤って幼児を河に落としてしまった母親や、力尽きて我が子を川へ捨てるしかなかった母親達が、老爺嶺山中で飢えを凌ぎ、乳児を背負い幼児の手を引いて、降りしきる雨で泥濘になった山道を、傷だらけになって昼間は行軍、夜は野宿を続けながら西へ向かう老若婦女子の集団が大勢の同胞を失い、辿り着いた方正県伊漢通開拓団の本部跡を避難所代わりに雨風を凌ぎながら、松花江から引き揚げ船が迎えに来る日を待つ毎日。無情な大陸の冬があっという間に衣食無しの同胞達に襲いかかり、松花江は凍結して引き揚げ船を待つ望みも消えた絶望の日々の食べ物は、戦時中日本人から増産を強いられていた中国人たちが出荷した大豆の集荷場になっていた伊漢通港付近に、黴たり腐ったりして捨てられていた大豆を拾い集めて持ち帰り、ビール瓶を臼がわりにして棒で搗き皮を剥ぎ、鍋替わりの鉄兜で雑炊にして飢えを凌いでいた。

真夏の八月に開拓地を出発した為、身に纏う衣服は夏着だけだった。九月に入ると霜が降り大地に緑色は見当たらない寒空の下、攻め寄る飢えと寒さに加え、襲いかかる疫病で次々と倒れて逝く同胞たちを埋めた土饅頭が日に日に多くなり、避難所周辺には、もう亡骸を個別に埋める場所さえ無いほどになって来た。そこで考え出された方法は、まだ動ける人たちが集まって、大きな穴を掘り、亡くなる人達を次々と其の穴に運び入れていたが、幾日も経たないうちに満杯になってしまい、遺体を片付ける場所がない状態に陥り、仕方なく本部集落の西側に在る伊漢通開拓団小学校の寄宿舎裏へ積み上げて亡骸の山を築いていった。そのうちに死んだ仲間を運び出す力さえ尽きて、生きている人と死んだ人達が同居する状態に陥っていた。

傀儡国家“満州国”で苦痛を強いられていた中国人たちが一番欠乏していたものは、布地や衣服だったから、亡骸が積み上げられる所へ寄ってきた彼らに、全亡骸の衣服が剥ぎ取られて裸体の山に変わり果てて行った。夜になると何処から集まってくるのか知れない、狼の群れに遺体が食い散らされて首と胴体が別々になったり、はらわたを食べられて空洞になった遺体など、まともに視線を向けることができない凄惨な地獄絵そのものだった。

生きてこの避難所で帰国を待つのは不可能だと分かって来たから、体力の残っている人

達の中には元の開拓団へ帰る人たちもいたがその数は僅かだった。

最後の一人までと言う戦時中教育に洗脳されて、避難所で死を待つ人たちは皆、此処の土になっていった。

わが身を中国人家庭に投じて得たお金で風前の灯火になった家族の命を救った大和なでしこ達、そっと避難所を抜け出して中国人家庭に身を寄せる人達。言葉巧みな人身ブローカーに誘われて中国人家庭へ行く人達。親を失い餓死寸前に成っているところを、中国人に救われていった幼児たち。こうして生き延びる道を求めながら、その願いが叶わないうちに、もう動けなくなって息を引き取った人たち等、避難所の人影は日に日に少なくなるにつれ、亡骸の数だけが増えて、雪解けが始まる頃には生存者が見当たらなくなったと聞いている。

私たちが雨風をしのいだ、第 18 次、伊漢通開拓団跡には、六つの集落《地図参考》（本部・青雲・北進。臨口・尖山・楡樹園）が有った。そのうち尖山・楡樹園を除く 4 集落と開拓合作社跡の五か所に集結した 11 個開拓団の老人・婦女子約 9000 人のうち、4500 人が一口の水・一握りの食べ物を求めながら息絶えて方正の大地に亡骸を晒して避難所生活に終わりを告げたのだった。

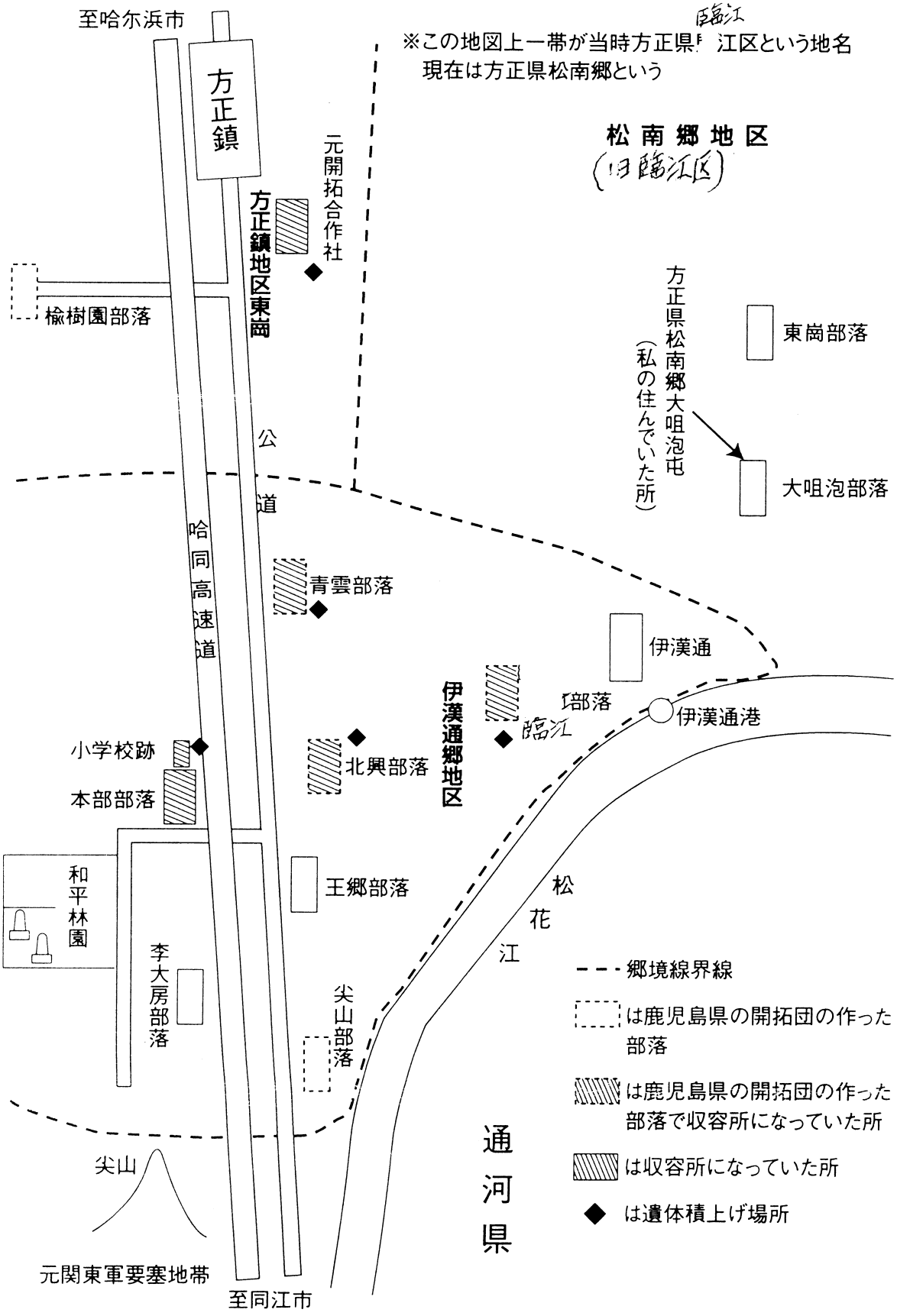
ほとんど知られていない。遺体収集を実現させた影に在った人道

中国では古来から、女性は夫以外の男性に裸体を見せてはならないと言う厳しい仕来たりが在った。雪解けで無数の裸体が陽光にさらされている場面に視線を向けた避難所に隣接する集落の中国人達大勢が、「無数の日本人女性の裸体が、陽光にさらされたままでは、不吉の祟りが怖い。腐乱しないうちに収集してほしい」と方正県の臨時政府に申し出たのだ。事態を重視した県政府が避難所に近い臨江区《現在の松南郷》・伊漢通区一帯の全集落の牛車の出動を呼び掛け動員して（中国では、花嫁は馬車で迎え、遺体は牛車で送ると言う仕来たりがあった。）裸体を砲台山麓の黄泥河沿いへ運搬して積み上げ、埋められている遺体も掘り起こして一緒に火葬にしてくれた。その後、1963 年５月４日、ここに最初の日本人墓地が建立され、その場所は 1973 年春、黄泥河ダム建設によって水没することになり、砲台山西山麓に省政府の補助を得て遺骨を移転して建立されたのが，現在の方正日本人公墓だと聞いている

文化大革命の嵐を始めて知ったのは・・・

94 年７月４日方正を表敬訪問した時、会いに来てくれた大工修行の兄弟子が、話してくれた当時の状況は、遺体収集を人道的に申し出た中国人たちは、後に起きた文化大革命の時に厳しい仕置きを受けたと聞いているが、現在方正の人達は、私たちに対し、この歴史について口を閉ざしているのだよと話していた。

敗戦のあくる年には、避難所だった本部集落や北進集落の全家屋は、すでに中国人たちが住み着いていた。その東側に在る李大房屯で私が大工修行をはじめた頃には、すでに火葬にしてもらった遺骨があまりにも大量だから埋葬出来ずに山積みされたまま、野晒しの状態で月日が経つにつれて散らばり、夜になると青い火が燃えているのが周囲の集落から


至哈尔浜市
※この地図上一帯が当時方正県臨江区という地名
現在は方正県松南郷という
松南郷地区
(旧臨江区)
方正鎮
元開拓合作社
方正鎮地区東岡
楡樹園部落
方正県松南郷大咀泡屯
(私の住んでいた所)
東岡部落
大咀泡部落
公道
哈同高速道
青雲部落
伊漢通
伊漢通郷地区
部落
伊漢通港
臨江
小学校跡
北興部落
本部部落
和平林園
王郷部落
李大房部落
尖山部落
松花江
郷境線界線
は鹿児島県の開拓団の作った部落
は鹿児島県の開拓団の作った部落で収容所になっていた所
は収容所になっていた所
は遺体積上げ場所
尖山
元関東軍要塞地帯
通河県
至同江市

見えると言う噂が広がっていたので、子供たちは夜になると怖がって外へ用足しにも出ないと言われていた。

遺骨から生じる燐の青い火を中国人たちは、鬼火（発音はぐいふお、翻訳すると幽霊の火）と呼んでいるほどだから、この地の人達の中には、「大量の日本人の骨が野晒しになったままだから不吉な前兆らしい鬼火が出るのだ。何とかして葬ってほしい」と政府に申し出てくれたのだ。この人たちの人道的申し出が後の公墓建立の影の力になってくれた。その当時を知る人たちも高齢化して、この歴史も風化の路を辿っているようだ。

新中国では、仏や幽霊は迷信だとして、信心すると罰則された例も在ったから、文革では、敵国の加害者だった日本人に対しての善意だと非難され、人道と言う二文字は通じず、やはり厳しい嵐の仕置きを課せられたと兄弟子から聞いた。

松田ちゑさんが県政府にお願いし、周恩来首相が許可して公墓建立が実現したと言う日本側の資料には、影で貢献してくれた当地の人達について触れていない。私達は公墓を建立してくれた周首相と中国政府への感謝は永久に忘れてはならない。加えて、人道的申し出をしたが故に仕置きまで受けた人達への感謝も忘れてはならないのに、歴史を知らないままでいる為、当時、影で貢献してくれた人達を知る術も無いのが寂しい。

本部集落周辺の土地全部は、明年から此処に住み着いた人達が耕作し始めた。

遺体収集した時は、大地の一部分がまだ凍結していた為、地中に残っていた遺骨が彼方此方から出たと聞いていた。

私が帰国してから初めて避難所跡を訪問した 94 年 7 月 4 日、当地の人達に一言インタビューした。「貴方達が畑を耕作する時には、日本人の骨はもう見当たらないですか」。その答えは、「以前は、あちこちから出て来たが今はもう見当たらないよ」とのことだった。

飢え寒さに倒れて逝った開拓民の血と涙が浸みこんだ大地、草場の蔭で同胞達が安らかに眠ってもらう為に、何より大切なのは、生き残った私達が日中友好を深めていくしかないと強く意識して墓地へ向かった。

1958 年 6 月帰国して以来 36 年目、はじめて公墓参拝の機を得て、入り口に立った時、門柱に掛けられている看板に視線を注ぐと日中永久不再戦・世世代々友好と刻まれていた。「戦争犯罪者と日本人民を区別して扱わなければならない」と言う周総理の教えと「中国人も日本人開拓民もみんな戦争の被害者だ」《夢砕満州の序文より》と言ってくれる中国の人達が作ってくれた看板が、無言で私達に平和の大切さを語りかけていた。

境内の周囲には、墓地建立当時に植えられた松の木が、直径 30 センチ程に成長して同胞達の祖国からの線香を待つ時間がどんなに長かったかを私達に教えているのだ。

右の白い塔には方正日本人公墓　左の塔には麻山地区日本人公墓が建立され、その後方には、私が帰国した当時まだ山麓に散らばっていた同胞達の遺骨が大きなコンクリートドームに納められていた。同胞達はここで永遠に眠り続けるのだと思うと、堪えて来た涙が堰を切り止めようがない。一同、家から持ってきた菓子や飲み物を供えた。私は持って来た自作の檜はしを添えて、愚かな戦争に尊い命を散らした同胞達に「安らかにお眠り下さい。」と手を合わせた。追悼行事が終わるまで涙は止めど無く流れ続いた。

閉会式の挨拶は、自興会副会長の尾崎金次郎さんが「今開拓現地からバスで此処まで来

るのに、これ程の時間がかかった。当時老若婦女子が山道経由でよくぞ此処まで辿り着いたものだと思うと胸がいっぱいになる」と挨拶した。

「沢山の供え物や花輪の後片付けをどうしよう」と言うので、私は管理棟へ行くと　黄さんと言う管理人がいた。早速私から「黄先生、花輪や供え物の片づけをお願いして宜しいですか」「好的（ハオダ）、宜しい私が皆さんに替って片づけて上げる、心配無用だ。」私は「拝托了（バイトゥオラ）、お願いします。」を言ってから仲間に心配無用を伝えて、外へ出ると、此処へ来ることは連絡してないのに大工修行の兄弟子や、親方の子女達大勢が私を待っているではないか、兄弟子とは36年ぶりの再会だ。抱き合って再開を喜んだ。「連絡しなかったのに」と言うと、「いつかお前も来るだろうと、日本人の団体が来る都度ここへ来ていたよ」という。

師傅（親方）の墓が遠いので拝んでいきたいが時間がない。バスへ戻って方正鎮へ向かう。県政府から私達一行を迎えに駆けつけてくれた外事弁公室の劉英男主任が私の隣席に座ったので、「方正鎮へ入る道中、道の北側に在った元開拓合作社の建物が戦後方正高等中学校（高校）になっていたが見当たらないですね」と聞くと「あの当時は方正街の城壁から 500 メートルも離れた所だったが今は家屋がどんどん増えて町の中になり、陰になって見えないのだよ」と言う。

1945 年の冬この合作社も避難所になっていて周りは同胞達の遺体の山になっていた情景が脳裏をよぎり、涙で眼鏡が曇る。

鎮内へ入ると東西メーンストリートは私の居た頃、雨が降ると泥濘になって裸足で歩いた懐かしい道だったのに今は、立派にコンクリート舗装されていた。

「この舗装は、日本からのＯＤＡ援助で舗装されたのですが話してはいけない事になっているのです。」と劉主任は話してくれました。

今日、私達の方正県表敬訪問の場所に準備されていたのは、方正鎮の西十字路の東北角に位置する合鑫園酒家（レストラン）だった。此処で表敬行事を済ませて外へ出ると、耕運機に連結したリヤカーに乗り込んだ兄弟子や親方の子女たちが私を見送りに来てくれていた。

話したいことや聞きたいことは山ほど有るが時間が無い。バスに乗り込み、車窓から手を振って「また逢いに来ます。健康に留意して待っててね」と別れを惜しむ私達、動き出したバスは第二の故郷を遠く引き離して行く。

＜かに・りきいちろう：1932 年生れ、1941 年吾妻村（現南木曾町）から渡満、中国三江省（現黒竜江省）樺川県公心集読書分村へ入植、45 年９月から方正県での残留生活を経て 58 年７月帰国。81 年、木曾ひのき製品製造卸の可児工芸社を設立、現在木製品加工に従事＞

『鳴呼　満蒙開拓団』をぜひDVDに！（可児力一郎さん）

木曽の人

歴史を後世に伝えていきたい

可児　力一郎さん(76)
◇…中国語通訳ボランティア・南木曽町…◇

「今年の夏、南木　堪えられません」曽町天白にある満州　9歳で旧満州（中開拓移民殉難者の慰　国東北部）に渡り惨霊碑の清掃にはわず　愴（さんたん）な残か7人が集まっただけ。あの悲惨な歴史が風化していくのは留生活を経験して昭和33（1958）年26歳のときに帰国しました。昭和63年からは中国からの帰国者や、嫁いできた中国の人たちに通訳や生活指導などの活動をボランティアで行ってきています。

「わが家はいつも中国関係者の相談所みたいです。これも63年前、極寒の大地からはい上がって生き長らえた、わたしに課せられた責務だと心得て、手伝っています」

可児さんは5年前、戦争の悲惨さと平和の大切さを知ってほしいとの願いから自らの体験をつづった本を出版。近隣の地域に招かれて講演活動も行ってきました。「異国の地に散った方々の鎮魂が私たちの使命。歴史を後世に伝えていくことが大切だと考えています。広島の原爆被害や沖縄戦の惨状などは映像がたくさんあるのに、同じ戦火に命を散らした24万6千人の開拓民犠牲者の映像は、何一つありません。歴史を体験した仲間が少なくなり、生き証人がいなくなる中、風化されていく歴史を映像化して後世に残してほしいと願う毎日です」

「木曽ホームニュース」2008年10月18日付掲載

可児力一郎さんは、1958年に方正より帰国。「方正の大地で飢え寒さに倒れた同胞たちの遺体が凍結した大地に積み上げられ、衣服を剥ぎ取られた裸体に狼が群がり、首・胴体・手足などがあたりいっぱいに散らばっていた地獄絵を忘れることが出来ない私」という手紙とともに、『風雪に耐えて咲く寒梅のように　二つの祖国の狭間に生きて』という著書が送られてきた。「13年間母国語を使えなかった残留生活により言葉の組み立てさえままならず、紙屑の山の整理もつかない有様で挫折を繰り返してきました」という貴重な体験記だ。

これはどうしても書かずにはおれない人だけがもつ切々たる思いとともに、新たな実相が浮かび上がってくる作品である。

その手紙と著書を追いかけるように次の手紙が届いた。その内容は、過去の苛烈な体験を「映像化し後世に伝えたい」と願う開拓二世もすでに高齢化し、もう自力ではどうすることもできない状態におちいっていた時に、映画『鳴呼　満蒙開拓団』を知り、感激しておりますというものだった。映画の存在を知る前から、上記の新聞を見ていただければわかるように可児さんは、風化されていく歴史の映像化を訴えていた。

しかし、可児さんが住む南木曽から東京まで3時間、齢を考えるとなかなか上京するのも大変とのことだった。自主上映会も考えられると私がいえば、それも南木曽では人が集まらないとのこと。早くDVDにしてほしいという切なる要望である。（大類）

孫たちへ言い残すこと

ユウちゃんとコウちゃんへ ――

酒井　武史

ここには、オジイチャンがこどものときに、自分と自分の家族に起こったことが書いてある。

きみたちはいま５歳と３歳半だから、この文章を読んで理解できるようになるのは、あと数年は先になるだろう。その時になっても、オジイチャンはたぶん元気でいるかもしれない。でも、オジイチャンはもう７０歳、いつなにが起きても不思議はない。だから、いまのうちに書き残しておこうと思う。

実はここに書いたことは、いままできみたちのチチ・ハハやオバアチャンにもきちんと話したことはない。たまたま方正友好交流の会事務局の大類さんから、原稿の依頼があったので、その機会を借りることにした。大類さんには感謝します。

文章のなかで、「ぼく」とあるのはオジイチャンのことだ。「父」「祖父」などはぼくとの関係で、きみたちからみると「ひいオジイチャン」「ひいひいオジイチャン」ということになる。

ぼくが生まれたのは１９３８年１２月。日本は中国と戦争をしているまっ最中だった。

歴史を少しさかのぼると、１９３１年に「満州事変」が起こり、日本の軍隊は満州（いまの中国東北地方）全土を支配した。１９３７年には「蘆溝橋事件」が起こり、日本と中国の本格的な戦争が始まった。１９４１年にはアメリカやイギリスなどの連合国との戦争を始めた。そして、戦争は１９４５年８月１５日、日本の敗戦によって終わった。

この戦争については、「日中戦争」「大東亜戦争」「太平洋戦争」「第２次世界大戦」などいろいろな呼び方がある。「満州事変」から敗戦まで１５年つづいたから、「１５年戦争」といういいかたもある。ここでは「１５年戦争」にしよう。

１５戦争のあいだに、実に多くの人が死んだ。きちんとした統計があるわけではないが、日本人だけで、軍人とそうでない人をあわせて２３０万人が死んだともいわれる。原爆の犠牲者だけで広島２３万人、長崎７万５０００人、東京、大阪の大空襲でもたくさんの犠牲者がでた。方正県に建立された日本人公墓に葬られた５０００人も含まれる。こんな大きな数字をならべてもピンとこないかもしれない。

しかし、この数字のなかにぼくの身内、つまりきみたちの身内が６人含まれるといったら、すこしは実感がわいてくるだろう。

その６人がいつ、どこでどのように亡くなったのか。亡くなった順にあげる。

義弘＝父、１９４０年９月２６日、中国河北省で戦死。２５ 歳。

時期はいつかはっきりしないが、父はぼくがまだ母のお腹にいるとき、軍隊に召集され、中国大陸に派遣されていた。父は中国から母に手紙で生まれてくるこどもの名前、男と女の両方の候補を知らせてきた。だが、けっきょく父はぼくの名前をつけただけで、ぼくの顔はいちども見ないで死んでしまった。

入隊する前、当時東京・渋谷に住んでいた父母が２人で最後に見た映画がアメリカの『オーケストラの少女』だったそうだ。この映画が日本で公開されたのが一九三七年一二月とあるから、たぶん入隊もそのころだったと思う。父母は映画を見たあと、これで東京は見納めになるかもしれないと思い，山手線（いまのＪＲ、当時は省線といった）をなんども回ったそうだ。そのとおり、父がふたたび東京をみることはなかった。

＊

真司（叔父、１９４２年８月２１日、中国山東省で戦死、２１歳）

父・義弘は７人兄弟の長男で、真司叔父は３男だ。この叔父さんが戦死したとき、ぼくは３歳だったから、叔父さんのことはおぼえてない。ただ、とてもやさしい人で、ぼくをかわいがってくれたそうだ。

父につづいて叔父さんも戦死した。さすがに一家で２人も戦死者を出すというのは当時でもめずらしかったらしい。「お国につくした名誉ある家」ということで、祖父母の写真つきで、小さな新聞記事になった。祖母が持っていたその切り抜きを一度みた記憶がある。印刷が悪かったせいもあるが、２人の表情がとても暗かったのが印象に残っている。

父が戦死したとき、次男は他家に養子にでていたから、祖父母は真司叔父をとても頼りにしていた。それだけに、真司叔父の戦死は、祖父母、とくに祖父にとってよほどショックが大きかったのだろう。祖父はまだ定年（という言葉が当時あったかどうか定かではないが）にだいぶ間があったのに、勤めていた女学校の教師をやめてしまった。それ以後、祖父の笑顔はみられなくなった。

＊

加市（祖父。１９４５年６月２０日、豊橋が空襲されたとき死亡、５２歳）

１９４４年ころから、日本の都市がアメリカ軍の爆撃機により空襲を受けるようになった。１９４５年４月、ぼくは国民学校（いまの小学校）に入学した。父の実家のある豊橋市前田南町というところに、祖父母といちばん年下の哲治叔父さんの４人で暮らしていた。

母はどうしたのかと不思議に思うかもしれない。実は父が死んだとき、ぼくは母と二人で満洲で暮らしていた。母と祖父母とは仲が悪かったから、一緒に暮らすのは無理だったのかもしれない。くわしいいきさつはわからないが、ぼくが２歳のとき、母はぼくを酒井の家へおいて満洲へ帰っていった。それ以後、母との関係は一切途絶えた。ぼくが母と再会するのは、ぼくが中学１年のときだった。

１９４５年６月１９日深夜、アメリカ軍の爆撃機の編隊が豊橋を襲った。空襲が始まって、すぐに祖母と叔父さんと僕の３人は玄関の外に出て、祖父がくるのを待っていた。家の前の道路を避難する人がどんどん通りすぎていく。約２キロ東の郊外に向山緑地があり、

みんなそこに避難しようとしていたのだ。西の空は夕焼け空のように炎で赤くそまり、深夜のはずなのに外は明るかった。なかなか出てこない祖父をまちきれず、祖母と叔父さんはぼくを乳母車に乗せ、向山にむかって走り出した。乳母車のなかから前がよく見える。もう焼夷弾が落ちてきていて、道路のところどころが燃えていたが、そのなかを突っ走った。

向山の高台につくと、そこから炎と煙につつまれて燃え上がる豊橋の町の姿がよく見えた。

翌朝、祖母が自宅を見に行き、全焼した我が家の焼け跡から祖父の焼死体を発見した。戦死した父と叔父の写真が飾ってあった部屋の付近で亡くなっていたそうだ。祖母は後に、ひょっとして祖父は逃げる気がなかったのではないか、と言ったことがある。

豊橋市の資料によると、この空襲による死者は６２４人、全焼・全壊家屋１万５８６６戸とある。

＊

光子（叔母、28歳）、浩一郎（叔母の長男＝いとこ３歳）、千秋（同次男＝いとこ、１歳６カ月）。１９４５年８月１４日、旧満州で起きた葛根廟事件で遭難。

光子叔母はぼくの父方のただひとりの叔母さんだった。当時、旧「満州国」の興安（現在の内モンゴル自治区ウランホト）にこども二人と暮らしていた。夫の佐七叔父さんは、数カ月前、軍隊に招集されていた。

１９４５年８月９日、ソ連が日本に宣戦を布告、「満州国」に侵攻してきた。満州に在住していた日本人は祖国をめざして逃げまどい、その間に多くの悲劇が生まれた。葛根廟事件はそのもっとも悲惨な例だ。

この事件については、事件に遭遇し生き残った大橋戊辰さんという方がすぐれたルポルタージュを書いているので、以下の話はその本を参考にしている。

８月１１日午後４時、興安在住の日本人約千数百人が行動隊を組織し、４０キロ離れた葛根廟を目指して徒歩で移動を開始した。そこから列車でさらに南下するという計画だった。叔母さんは３歳と１歳半の幼児をつれての避難だったから、よけいたいへんだったろう。

８月１４日昼ころ、行動隊が葛根廟丘陵付近まで到達したところへ、待ち受けていたソ連軍の戦車部隊が行動隊に対し攻撃を開始した。銃撃されたり戦車に直接ひき殺されたりして、女性、子供を含む１０００人以上が殺された。そのなかに叔母さんたちも含まれていたのだろう。「だろう」というのは、だれも遺体を確認したわけではないからだ。

翌８月１５日敗戦。６月の豊橋空襲のあと、わたしたちは祖母の実家のある遠州灘に面した村に疎開していた。叔母たちの消息はもちろんすぐにはわからなかった。戦後、２，３年たったころだったと思う。わが家でとっていた読売新聞に葛根廟事件で生き残った人の記事がでたことがある。祖母をそれをみて、叔母たちのことはあきらめた。

叔母の夫、佐七叔父さんはソ連の捕虜となって戦後シベリアに抑留され、１９４９年に日本へ帰ってきた。もちろん、そのときはじめて自分の妻とこどもたちの悲劇を知った。

叔父さんはもう２０年も前に亡くなったが、亡くなるまで妻子の消息を尋ねていた。あきらめきれなかったのだろうね。

実はこの事件で生き残った子供たちが何人も中国人に保護され、中国残留孤児となっていたことが後の調査で判明している。いとこたちはそのなかにはいなかったようだ。

ぼくの身内から出た戦争犠牲者の話はこれでおしまい。

さて、さいごにきみたちにお願いがある。いずれきみたちも学校でこの戦争について学ぶことだろう。そのとき、たんに歴史のひとこまとして学ぶだけでなく、いままであげた６人の身内の運命を重ね合わせてほしい。そして、想像力を最大限に働かせてほしい。

たとえば──。『オーケストラの少女』はいまではＤＶＤでみることができる。ときどきテレビでも放映してくれる。

暗い映画館のなかで、まだ２０歳を少し過ぎたばかりの夫婦が、ギュッと手を握りあって、スクリーンを見つめている。二人で映画を見るのはこれが最後になるのではないかと思いながら……。そして、ほんとにそうなったんだ。

（さかいたけし：朝日ジャーナル編集部などを経て、朝日新聞社の定年を待たず退職して、1988年、照代夫人と共に、「自分たちの出したい本を、読者とともに楽しみ考える本を」と、武照舎を創立、現在は出版活動の版元を創土社に移している）

「帰ってきたおばあさん」を演じて

――私が辿った道――

神田　さち子

***ハルピンの新緑は？

石金楷さま　お久しぶりです。お変わりございませんか？今年はハルピンの町も暖冬だったとか。そのため“氷祭り”の賑わいは今ひとつでしたかしら。

昨年10月28日ハルピン市龍江劇場での私の一人芝居「帰ってきたおばあさん」の満場の中で鳴り止まなかった拍手が、今も鮮やかに耳に残っています。石さまの粉骨砕身のお働きで当日、集まられた養父母さん　残留孤児そのご家族のみなさんとの交流会＆舞台観劇のひと時は、平和の旅に参加したメンバーにも終生忘れることが出来なかったようです。私もホテルへ入るやいなや「あなたの写真を飾って会える日を心待ちにしていました！」と養父母の方秀芝さん（82）。車椅子ごとぶつかるように駆け寄り、手を握り締めて仰ったその言葉に感激！抱擁力のある笑顔がかわいくてかわいくて～～思わず抱き合いましたよ。

石さま　今日もあなたはビルの一室の「中日友好の心の拠り所」の事務局で体を張ってお仕事をなさっていることでしょうね。２日程の出会いでしたが心は十分に伝わり合い、その後折りにふれお便りの往来はしましたね。今日は私があの舞台をライフワークとして10余年なぜ、ずーと一筋に演じ続けているか・・・少しお話してみます。

***撫順生まれ

1944年父は満鉄関係　母は教師。私は、その長女として何不自由なく生活をしていたそうです。アカシアの並木が続く街はとても美しく、教え子の生徒さんも比較的豊かな家庭環境だったとか。当時の市井の誰もが思わされていたごとくに、当時の満州の人々のことなどへは毛頭考えがおよばなかった両親でした。

1945年敗戦。47年7月コロ島からの引き揚げまでの生活はみな同じ。よくぞ生きて連れて帰ってくれたと感謝あるのみです。とりわけ引き揚げ船の船底生活を語る時、母は声を詰まらせます。ゴトッゴトッと船員が階段を降りて来る音は“こうりゃんという「餌」”が与えられる生のつなぎ音。私たち兄妹は骨だけになっても食器を我先に出し、ぽろぽろ手から落ちる残飯を這いながら拾いまわった～～。船上では無味乾燥に水葬の音が今日も・・・

「～～あぁ～今日も誰か死んだんだね、と自分が仲間の死に感情を失っていくのが恐ろしくなった、イヤ山のような死体の傍を通過していかないとコロ島にたどり着かない、この一念で両手に２人の子の手を離さずに・・・これのどこがおかしいね。戦争は人間としての最低の尊厳を失わせるのよ」と、母は最後に切ないため息を付くのが常となりました。

両親のたった一つの願いは「舞鶴に上陸したらこの子達に思う存分“真っ白なご飯”を食べさせるぞ」でした。

***「もう何にも日本へ言いたいことは・・・」

1996年、東京は中野区のとある会議室。私は「帰ってきたおばあさん」の原作者でもある良永勢伊子先生に誘われて一時帰国中の中国残留婦人をお迎えしての懇親会に出席しました。ドアを開けた私の目に飛び込んだのは――異常に静寂な会場、ポソッ　ポソッと漏れ聞こえる声は、四隅にひっそり消え入りそう。そして何より皺だらけの白のブラウス、黒のズボン姿の小柄な4人の女性のお姿が強烈に！

それはもう「幾星霜の辛苦に耐えたお姿」と一言でくくればそれまでですが“笑顔ひとつ出ない”深く刻まれた皺いっぱいの顔からは何を質問しても返事がなく、焦点が定まらない虚ろな目――でもその乾いたような瞳が何かを訴えているようで余計落ち着かないのです。懇親会は盛り上がらないまま閉会。私はドアの向こうに去る一人の女性（70代）に「何か私達で出来ることは～～？」と数回畳み掛けました。「もう何にも日本に言いたいことはありません・・・でも私達のようなものが中国にはまだ沢山残されていることだけは忘れないでください・・・」（当時の厚生大臣菅直人氏に直訴しての帰りでした）

九の字に曲がった小さな背中、か細い体が必死に何かに耐え「望郷の念一杯で祖国へ帰郷したはずなのに・・・」と訴えているようでした。その姿を見たとき私は、胸を突かれたのです。能面のように表情なき容貌と後姿はもしかしたら母の姿ではなかったか、TVで映し出されるたびに「マアーマ！」と泣き叫んでいた孤児の方は私の姿ではなかっただろうか～～と。

現在91歳で地元でかくしゃくと一人暮らしを続け凛と生きている母ですが、撫順からコロ島そして引き揚げ船の船底生活を思い出すと、よくぞ生き延びられたと驚嘆することばかりでした。残留婦人たちとの出会いはボタン一つ掛け違えると私たち母子の投影ではなかっただろうか。その確信が私をして「あなた方の“やるせない強き想い”は必ず後世に伝える！！」この決心が「帰ってきたおばあさん」への舞台へと突き進んでいったのです。

***168回目は~~

石さま、長いお便りとなりました。昨年のハルピン公演で養父母さんへの心からの感謝、残留孤児　そのご家族の方との交流のほかもう一つ目的がありました。それは次世代へこの舞台をつなげる為に、私は黒竜江大学、ハルピン工科大学の学生さん達と観劇後、交流会を持つことでした。そこにも石さま、同席くださいましたね。日本語学科の学生でしたので全て日本語でさまざまな感想がでました。嬉しいことに多くの学生が、「日本へ留学していろんな文化に触れ勉強したい！」とその目を輝かせて述べてくれたのには一気に舞台の疲労が吹き飛びましたよ。

中日友好の平和のページは、更に両国の若者たちへとつなげられると信じています。私はそのために自分が出来ることを今年もコツコツとやります。168回目は大連の市民、学生さんたちへ「天命の舞台」を届ける予定です！！

＜かんだ・さちこ：舞台女優。映画「ユリイカ」、ＮＨＫ、関西テレビ、博品館、俳優座などに出演、自主公演も精力的に行う。1996年からひとり芝居「帰ってきたおばあさん」を全国的に公演。2008年ハルピンで初の海外公演。本年も大連、瀋陽、長春公演を企画＞

神田さち子 語り芝居

帰ってきたおばあさん

平成12年度文化庁芸術祭参加作品・再演

忘れられない記憶があります。
伝え聞いた歴史があります。
知らなかった事実があります。

◎原　作　…良永勢伊子
◎演出・上演台本　…杉山　義法
◎企画制作・主演　…神田さち子

全国各地で《共感の輪》《感動の輪》を巻き起こしたもう一つの「女の一生」…
知られざる中国残留婦人の半生を描く、不朽の名作。

2009年7月11日(土)15:00開演(14:30開場)

会場:愛知県芸術劇場・小ホール(地下鉄東山線・名城線栄駅4番出口徒歩3分)

【全席自由】◆前売券:3,000円 ◆当日券:3,500円

チケット取扱い:神田さち子語りの会
Tel&Fax:042-480-9369 E-Mail: sachiko1189@gmail.com

主催:神田さち子語り芝居実行委員会　後援:中日新聞社／中部日本放送／劇団シアター・ウィークエンド(代表・松本喜臣)　協賛:(株)トピア
企画制作:神田さち子語りの会

読売新聞 2008 年 11 月 7 日付掲載

中国で「残留婦人」一人芝居

祖国への思い 演じて知る

調布の神田さん 先月末、初の現地公演

中国残留婦人をテーマに一人芝居を続けている調布市富士見町の女優神田さち子さん(64)が、10月下旬の中国での初公演を終えて帰国した。会場は残留孤児やその養父母、大学生らで満員となり、祖国の地を踏みたいという孤児の思いに、じかに触れる機会もあった。神田さんは「芝居を見てもらっただけでなく、孤児らと直接話ができたのは大きな収穫。もう一度、中国で演じてみたい」と気持ちを新たにしている。

（吉良敦岐）

神田さんは先月26日に出発し、旧満州（中国東北部）のハルビン市を訪問。27日夜、市内のホールで約300人を前に公演した後、日本人公墓などを巡って31日に帰国した。

現地で身につまされたのは、ハルビン近郊で暮らしている残留婦人が今や1人しかいないことだ。この婦人は1997年から2年間、日本に戻っていたが、身元引受人が亡くなり、再び中国での生活を余儀なくされた。病気で外出できないと聞き、神田さんは「どれだけつらい思いをしたのか」と胸が苦しくなったという。

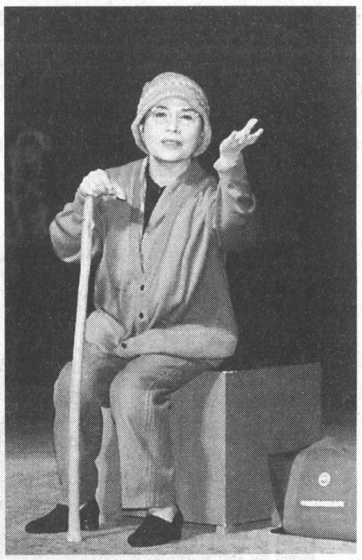
公演には、残留孤児10人と養父母4人が姿を見せ、ホールは満員になった。場面を説明する時はスクリーンに字幕を出したが、セリフは日本語のまま。それでも、芝居が始まると会場は静まり返り、時折、すすり泣く声が聞こえたという。

公演の前後に、孤児や養父母たちとの交流会も開かれ、神田さんは一人ひとりの手を握って話に耳を傾けた。ある孤児の女性(69)は、神田さんを見た途端、目を潤ませた。「自分がどこの誰なのか知りたい。日本にも帰ってみたい」。涙ながらに訴え、目の前で母親が兵士に殺害されたという過去を打ち明けてくれた。

養父母たちは、いずれも80歳を超えていた。「どうして敵国の子どもを育てたのか」。神田さんは率直に疑問をぶつけてみた。ある女性は迷わず言い切った。「どんな境遇であれ、一つの命だ。子どもを放っておくわけにはいかない」

神田さんは、これまでの12年間に日本各地で160回以上の一人芝居を演じ、国内で生活する残留婦人や孤児と触れ合ってきた。それでも現地で聞いた話は、「すべての体験が生々しく、戦争の悲惨さが身に染みて分かった」という。

神田さんは、今後も中国公演に挑戦したいと考えており、「少しでも芝居を理解してもらうために、次はセリフに中国語を入れていきたい」と意気込んでいる。



中国・ハルビン市のステージで中国残留婦人を演じる神田さん

公演前後の交流会で、中国残留孤児の養父母らの話を聞く神田さん（左から２人目）

西日本新聞 2008 年 12 月 29 日付掲載

女優・神田さん 中国公演を実現

一人芝居 残留孤児や 養父母の前で

中国・ハルビン市の交流会で残留孤児の養父母（左）と手を取り合って話す神田さち子さん（写真は神田さん提供）

中国公演を黒竜江省ハルビン市で、今秋実現させた。舞台に自らの境遇を重ね嗚咽する残留孤児に思いを寄せ、初めて聞いた中国人養父母たちの言葉を胸に刻んだ旅。神田さんは「あの時代の愚かさ」を訴えていく決意を新たにした。

残留婦人の半生を熱演

「語り継ぐのが天命」

中国残留婦人の半生を描いた一人芝居「帰ってきたおばあさん」を十三年間演じ続けている福岡県甘木市（現朝倉市）出身の女優神田さち子さん（六四）＝東京都在住＝が、長年の夢だった

作品は、第二次大戦前に旧満州（中国東北部）への開拓団に加わった九州出身の女性が戦後、中国に取り残される物語。自身も旧満州で生まれ引き揚げた神田さんは原作「忘れられた人々」（良永勢伊子さん作）や残留婦人との出会いを機に、「語り継ぐのが天命」と決心。「帰ってきたおばあさん」の一人芝居を始めた。

今回の訪中は、物語ゆかりの地を巡り、「敵国の子どもを育ててくれた」養父母たちの前で演じたいと思い立ち、賛同してくれた十六人と共に訪れた。

ハルビン在住の残留孤児の女性（六九）は、熱演に昔を思い出したのか泣き崩れた。「母が兵士に殺されるのを見た」と話してくれた彼女は今も身元が分からない。「日本に帰りたい」とこぼした。

公演は、日本語を学ぶ学生や市民ら約三百人が観劇。神田さんの芝居に合わせ、場面説明や主なせりふを中国語字幕でスクリーンに映し出した。

漏らした一言に、ただ肩を抱き締めるしかなかった。

残留孤児と養父母、家族ら計三十三人とは交流会でも一緒に過ごした。敵国の子を育てた理由を問われた沙秀清さん（八三）は言い切った。「同じ命。育てるのは当然です」

遠い日本を胸に抱き生き抜いた人たちと、その家族との語らい。「戦争に狂わされた多くの人生を思うと胸が引き裂かれる。それを次世代に伝えるため、自分は生かされていると思うのです」

神田さんは来年、再び中国を訪れて舞台に立つつもりだ。

漫画家にはなぜか旧満州出身が多い

――神田さち子さんを支援するちばてつやさんらが南京で展示会――

右の記事は、09年4月5日の朝日新聞に掲載された記事である。ちばてつやさん、森田拳次さんのお二人とも、旧満州出身者だ。ちばさんは、神田さち子さんの「帰ってきたおばあさん」を支援されている。07年9月、銀座の博品館劇場での上演では私も見に行ったがその日、ちばさんも観劇されていた。ロビーで私もちばさんと少しお話し、方正のことをお話した。

ちばさんは、神田さんによれば「帰ってきたおばあさん」の「台詞を諳んじることができる」ほど、舞台を見て感激され、それ以来のお付き合いだそうだ。

ここに一冊の本がある。『ボクの満洲　漫画家たちの敗戦体験』（中国引揚げ漫画家の会編）だ。登場する漫画家は、お二人のほか、赤塚不二夫、北見けんいちさんなど9人の漫画家、そして漫画評論の石子順だ。北京生まれの横山孝雄、上海で育った高井研一郎を除けば、全員旧満州で幼少期を過ごしている。参加者は、それぞれ体験談を綴り、漫画も描かれている。

終戦日の記憶、南京展示へ

8月、漫画家・ちばさんら

戦争体験を絵などで記録する漫画家や文筆家らの「私の八月十五日」の会（森田拳次代表）が4日、終戦日の記憶を描いた絵や文章を、中国・南京市の南京大虐殺記念館で8月に展示すると発表した。

会のメンバーらは、すでに国内で終戦日の記憶をつづった画集を出しており、その原画や文章の中国語訳を中心に百数十点を出展する。森田さんらの呼びかけに応じ、悲惨な戦争の庶民の体験を次の世代に伝えようと、メンバーらが描いたり書いたりした。

展示は8月15日から特別展示場で行われる予定。絵を出品する漫画家のちばてつやさんは「我々も生死をさまよった。南京へ行って、南京の人たちと戦争とはどういうことか、戦争に巻き込まれるとはどういうことか、話してみたい」と語った。作家の石川好さんは「民衆の戦争体験を共有することが、和解につながる」と話した。

記者会見するちばてつやさん（右から2人目）、森田拳次さん（同3人目）ら＝東京都内のホテル

ちばさんは、昭和14年（1939年）生まれ。「ぼくの満州放浪記」と題された文章には、こんな個所が出てくる。＜関東軍の戦車を奉天（瀋陽）の通りで見たことがある。関東軍が日本を助けにきたと思って、我々はもうありったけの食糧を、そのころはあんまり食糧がなかったのに、保存していたカボチャなんかを、「兵隊さん頑張ってください」と言って、兵隊さんにあげた。終戦になる直前のことだった。その戦車は、要するに我々をほったらかして逃げるところだった。その逃げる兵隊に、知らないから戦ってくれにきたんだと、我々を守ってくれる、と思っていたわけだ。兵隊が戦車の上に上半身を出して敬礼していた。我々は日本人街から出てきて、拍手と歓声で見送った。今想えば、「ごめんね」と言うつもりだったのだろう。あの敬礼は。＞とある。

森田拳次は「ぼくの満引き物語」でこう記している。＜昭和五十六年（1981年）、第一回中国残留孤児肉親さがし訪日調査団が新聞の社会面をにぎわしたころ、孤児たちの年齢や顔を見ると、「ひとごとではない」と感じた。自分に近い年齢だし、ぼくは、弟を五円で買いにきた中国人も見ている。売られていった日本の子どもたちと視線を交わしたこともある。ぼくらが、あの欄に出る出ないは、本当に紙一重であった＞

旧満州体験者も本当に少なくなっている。南京での展示会の成功を祈りたい。

（大類善啓）

方正日本人公墓と世代友好碑

武吉　次朗

中国の杭州市西湖湖畔の柳浪聞鶯公園に、「日中不再戦」と書かれた石碑が建っている。1962年に当時岐阜市長だった松尾吾策氏が揮毫したものだ。中国侵略戦争期間、岐阜にあった旧陸軍歩兵第68連隊は、盧溝橋事変の翌月から戦争に参加した。その深い反省に立ち日中友好の誓いとして建立された、という経緯がある。他方、岐阜市の岐阜公園には日中友好庭園があり、王子達杭州市長（1962年当時）が揮毫した「中日両国人民世世代代友好下去」（中日両国人民は世世代代友好的にしていこう）の石碑が建っている。二つの碑文は1962年10月に交換され、翌年、両地にそれぞれ建立された。

国交正常化の10年も前に、このようなことがおこなわれたのは卓見と勇気によるものだが、もっと感銘を受けるのは、中国側の碑文を考案したのが周恩来総理だったことである。私はこのことを、1964年に杭州で「日中不再戦の碑」を参観した際にうかがった。それ以来、「中日両国人民世世代代友好下去」は、中国の対日方針の基調となり、力強い呼びかけとなって、中国の歴代指導者により唱えられている。周総理自身も、1972年に田中角栄首相が国交正常化のため訪中した際の歓迎宴会で、公式にこの言葉を使った。

長々と二つの石碑について書いたのは、方正の日本人公墓が1963年に周恩来総理により許可されたことを知ったとき、ほぼ同時期に岐阜の碑文が決まったことを思い出したからである。

思いおこせば1958年、日中貿易が全面中断の事態になったのは、当時の岸内閣が露骨な中国敵視政策をとったことへの中国側の対抗措置だったが、その後日本側で日中関係打開を政府に要求する運動が起こり、やがて日米安保条約反対闘争の一環に発展していった。当時の政治環境では、安保反対と中国敵視政策反対は表裏一体になっていた。このような盛り上がりを背景に、周総理により中日関係の政治三原則が提示され、貿易三原則に基づき友好貿易が発足、つづいて半官半民の覚書貿易も始まり、1963年には北京と上海で日本工業展覧会が開かれ、毛沢東主席はじめ中国首脳がこぞって来訪、参観した。同年秋には中日友好協会も誕生した。この数年間には、わが国の各界各層から多くの代表団が訪中し、中国側と共同声明を出してもいる。また、国交正常化の暁には日本に対する戦争賠償請求を放棄するという中国側の重要方針も、この時期にしだいに形成されていった。

前記の碑文も方正の公墓も、このような時代背景のもとで、周恩来総理により決裁されたといえるのではなかろうか。

つまり、毛主席や周総理らの中国首脳は、日本軍国主義者と日本人民を明確に区別することを踏まえ、日本との友好関係を重視するとともに、日本の各界各層と協力して「以民促官」（民間の力で政府を促す）で実績を積み重ねていくことにより、国交正常化と世世代代の友好が実現可能であると確信していたわけである。

※　　※　　※　　※　　※

では、中国首脳の「日本軍国主義者と日本人民を明確に区別する」という方針は、何時、どのように形成されたのだろうか。

まず、「万国の労働者、団結せよ」というマルクス主義の基本的な階級観が根底にある。

次に、第二次世界大戦後の連合国による戦後処理・戦後和解の方針という背景がある。つまり、第一次大戦後のドイツに対する巨額の賠償が「報復」感情を煽ったことを教訓として、戦争犯罪者と被害者の区別を明確にし、やはり被害者であった枢軸国の民衆との融和を促す、というものである。中国が東京裁判を評価し、A級戦犯が合祀された靖国神社への首相参拝に強く反対しているのも、これが下地になっている。

以上の２点を日本人民との友好の「必要性」あるいは「必然性」と呼ぶなら、もう一点、その「可能性」を実証した事例が、戦後間もなく、ほかならぬ中国の大地で起きていたことも、重視しなければなるまい。それが「留用」された日本人たちである。

「留用」とは、「一定期間留めて任用する」という意味の中国語だが、「留用」に人生を賭け、青春を捧げた日本人が、中国東北部に１万数千人（家族を含めると２万余人）いた。「留用」になった経緯と動機はさまざまだったが、初期は「戦争に負けたのだから仕方がない」と思う一方、持ち前の職人気質（かたぎ）から、与えられた仕事は怠けず手抜きせずやり遂げた。恐怖感をもたなかったのは、東北民主連軍（後の人民解放軍第四野戦軍）の規律が厳正で態度が穏やかだったからだ。

これに対応して、中国共産党は次のような政策を定めた。「留用の日本人は捕虜ではなく友人である。政治面では日本軍国主義者と明確に区別し、一視同仁にあつかう。仕事の面ではその技術を尊重し、努力を信頼する。生活面では同等に処遇し、可能な範囲で配慮する」というものだった。

同じ釜のメシを食べ、同じオンドルで起居するうち、日中双方にあったわだかまりが消え、連帯感が芽生えてきた。日本人に最も深い印象を与えたのは、中国共産党幹部の人間的な魅力だった。「人民に奉仕する」とはお題目でなく、毎日接する上司たちの言動そのものだった。人生、意気に感ず。「留用」された日本人たちは、日本の軍国主義者と民衆とは違うのだということを身をもって示した。言い換えるなら、戦争で破壊された中国との友好を自らの汗と血で修復した、とさえいえる（もっとさかのぼれば、中国侵略戦争期間における日本の反戦兵士の存在も忘れられない）。

このような事績を踏まえて、周恩来総理は 1954 年 10 月 11 日、日本の国会議員訪中団と学術文化訪中団と会見した席で、次のように語った。「われわれは 15 年戦ってきたが、日本軍が武器を捨てたときから、日本人は中国人と仲良くなり、中国人も日本人を友人としてあつかい恨みをもたなかった。最も生き生きとした事例が東北にある。多くの日本軍人が武器を捨てたのち帰国せず、一部の居留民とともに中国人民解放軍に参加した。病院の医師と看護婦、工場の技師、学校の教官……ほとんどがりっぱに働いてわれわれを助けてくれた。われわれは深く感謝している。……これが友情であり、これこそが真の友情といえる。……これこそがわれわれの友好の種子なのだ。」

以上、わたしも体験した史実の一端を、ご参考まで書き綴ってみた。

＜たけよし・じろう：1932 年生まれ。58 年中国から帰国。国際貿易促進協会、摂南大学國際言語文化学部教授を経て現在に至る。翻訳講座を長年亘り主宰。著書『新版現代中国 30 章』、訳書『中国の出稼ぎ熱とその行方』『新中国に貢献した日本人たち』など。

方正県政府より緊急支援の呼びかけ

大类善启先生:

您好!

感谢您对中日友好所作的贡献,感谢您对方正县与日本友好交往的努力!

我们正对中日友好园林进行维修,以使其更好地发挥中日友好交流的桥梁作用。由于日本人公墓,养父母公墓,陈列馆以及其他设施年久尖修,多处破损,维修资金投入大,我们一方面积极筹措资金,另一方面也在呼吁社会各界捐赠善款。特别是今年马上要对陈列馆进行维修,资金缺口为人民币 10 万元。因此,烦请大类先生能否在日本呼吁有识之士慷慨解囊,以解维修燃眉之急,我们将载入中日友好园林建设史册,以记住这些日本友好团体,友好人士。

最后,祝愿大类先生身体健康,欢迎到方正县参观访问!

方正县人民政府外事侨务办公室

王偉新

(訳文)

大類善啓先生:

こんにちわ!

中日友好に対する多大なる貢献、方正県と日本の友好交流に努力していることに大変感謝いたしております。我々は中日友好園林が中日友好交流の更なる橋渡し役となるために、現在修繕作業を行っております。日本人公墓、養父母公墓、陳列館及びその他の設備は長い年月が経ち、多くの個所が破損しております。修繕資金が多大なため、一方では積極的に資金を調達する傍ら、各界の善意による募金を呼び掛けております。特に、今年は陳列館の修繕が間近に迫っており、10 万元(日本円で約 150 万円)の資金が不足しております。このため、大類先生に日本でも有識者に援助いただけるよう呼びかけていただければと思っております。緊急の課題である修繕を行い、中日友好園林の歴史に日本の友好団体、友好人士を刻みたいと思っております。

最後に大類先生のご健康をお祈りするとともに、方正県への御来訪をお待ちいたしております!

方正県人民政府外事僑務辦公室

王偉新

2009.4.27

方正県人民政府外事弁公室主任の王偉新さんより、上記のような手紙が４月２７日にFAXで届いた。我々の会は、多くの日本人に方正の公墓の存在を伝えることが使命だと考えている。本来、日本人公墓の維持、修理などについては日本政府が関わるべきことであると思っている。公墓の現在の状況については、これから関係者たちと話していきたいと考えているが、会としては方正県人民政府からの要請もあり、１０万円を送ることにした。

方正友好交流の会　事務局長　大類善啓

班忠義さんと方正

奥村　正雄

班忠義さんといえば、いま日本の中国侵略戦争と性暴力に対する最も先鋭的な追及者として注目を浴びている映像作家である。しかし私が班さんに初めて会った２０年前、彼はその一作で鮮烈なデビューを飾って間もない、気鋭のノンフィクション作家だった。１９５８年中国遼寧省撫順市に生まれた彼は黒竜江省大学日本語科を卒業。中国残留婦人の人生を描いた『曹おばさんの海』で第７回朝日ジャーナル・ノンフィクション大賞を受賞したばかりだった。私とは一面識もないその彼から、ある日突然電話がかかってきた。「会いたい」という。私は「会いたい」理由がわからないまま、話題の中国青年の申し出を二つ返事で応諾し、千葉大学前の喫茶店で会った。そこで彼から切り出されたのは、黒龍江省に住む、ある中国残留孤児から私が預かった公証書を返してやってくれ、という要請だった。

■　方正で託した公証書

なぜこういう経緯になったかを少し説明しなければならない。この頃私は方正やチチハルの残留婦人たちを訪ねて支援活動を続けていた堀越善作さん（故人）に誘われ、ある中国残留孤児支援組織の仕事を手伝っていた。この団体はバブルの時代に日本で汚れた仕事をする若者が払底した時期に、そうした人手不足の解決策を求めていた企業から金を出させ、いっぽう中国で帰国を切望している残留孤児、残留婦人の２世、３世を呼び寄せるという、欲と善意といかがわしさが混在した団体だった。１９９１年７月、企業の代表者を含め９人が訪中、ハルピン、チチハル、方正を回った。各地とも大勢の孤児たちが集まった。希望者と面談、それぞれ公証書を預かって後日連絡することになった。方正で応募した孤児Ｋさんは、該当する青年や身内の公証書を大量に預けた。貧しい孤児の生活から言えば、有料の公証書を何人分も発行してもらうのは大変な出費だったはずである。

方正はなんといっても帰国を望む孤児が多かった。そのためここで２泊を予定した。当時まだホテルはなく、方正政府の宿泊施設、招待所に泊った。ところが私と同室のＴは「こんなところで２泊はできない。明日ハルピンへ帰ろう」と言い出した。理由は部屋のトイレに前泊者の残した汚物が、流されないままになっていた、それだけである。実はこのＴなる男、通産省（当時）詰めのＴ紙記者で、お金儲けがらみの話にだけは嗅覚鋭く、このアイデアと企業オーナー集めも実は彼の主導によるものだったが、この一件でも明らかなように、残留孤児問題などはハナから彼の眼中にはなかったのだ。

こうして私たちが方正からハルピンに戻り、北京経由で帰国。ある賛同企業は中国からの帰国２世のための宿泊施設を準備するなど、受け入れ態勢が進み始めた頃、バブル経済の破綻がきて、この計画は白紙に戻さざるを得なくなり、孤児２世たちから預かった公証書などは事情の説明とお詫びの文章を入れて、すべて返送した。班忠義さんが黒龍江省各

地の孤児たちを訪ねながら方正に至る途中、会った孤児Ｋさんから、日本へ帰ったら私に会って公証書を返すように伝えてくれと頼まれたのは、その間のことだったのである。

この一件がクリアされた後、しばらくして班忠義さんから誘いの連絡が入った。「曹おばさんの海」の出版記念会の案内だった。私は仲間を誘って会場の後楽園・函徳亭へ出かけた。会場には小川洋子さんも顔を見せていた。酔いが回った頃、班さんが私に何か話せと言う。「班さんとの出会いは敵としてでした」と言い出したら律儀な班さんはあわてて「いや初めから敵などではなかった」と応じたことを覚えている。

■　「孤児」から「性暴力」へ

その後、中国残留孤児問題は日本人の支援組織がさまざまな形で取り組んでいることを見届けた彼は、一転して日本の中国侵略戦争時の性暴力を白日の下に晒し、今も貧窮と病魔に苦しみながら過去を口にできない被害者の救援に山西省の黄土高原の貧しい村々をかけずり回り始めた。同じ中国人でも東北生まれの彼には山西の訛りは聞き取れないことが多かったという。それより何より、同じ村人にも過去を隠している老婆たちが、東北から来た見知らぬ男に、周囲の誰にも言わなかった自分の過去を、気安く語りだすはずがなかった。班さんは同行した知人の女性を間に立て、何度も訪ねては、やがて病んだ老婆たちの固く閉ざした心の扉を少しづつ開いてもらっていった。あるときは朝鮮出身の、同じ境遇の女性が、死ぬ前に一度祖国朝鮮の故郷の村へ帰って、身内にもう一度会って死にたい、というので、カメラを回しながら韓国へ同行した。老婆は悲願を果たしたが、もう再び中国山西の仲間の元へ戻る力はなく、息絶えた。こうして山西省の山間の村を訪ね歩くうち、彼女たちと同じ運命をたどったひとりの女性の存在を知る。美女だっただけに受けた凌辱も他の比ではなく、晩年、誰にも省られることなく死んでいった彼女の異名「蓋山西」（山西省一番の美女の意）からタイトル名をとった『ガイサンシーとその姉妹たち』（本と映像）で、班さんはその全貌を明らかにした。

従軍慰安婦に償うとした政府主導の「女性のためのアジア平和基金」が、そのまやかしが明らかになるのとは対照的に、班さんの行動と訴えが当然ながら人びとの心をとらえ始めて行った。今から１０年前にできた「中国人元慰安婦を支援する会」（責任者・中島俊江、電話０４２－３２３－７７２９）の元にカンパや励ましの声が寄せられている。しかしまだまだ足りない。中国ではシーサンシーの姉妹たちの残る寿命がわずかになってきている。ひとりでも多くのシーサンシーの姉妹たちにお詫びと償いの気持ちを届けなければ、私たちはいつまでも歴史の債務者であり続けなければならないのではないか、と思う。

こうした日本の侵略戦争の性暴力の犠牲になった中国人女性を、山西省の山間僻地で、探し出し、病院で治療させ、証言を聞き取る作業は、日本政府への配慮から中国の行政も対応は冷たい。この名乗ることもできずに、ぼろぼろになった老いた犠牲者に会い、入院させ、戦争の真実を明らかにする班さんの行動を支援する輪が、今から１０年前にできた。「中国人元慰安婦を支援する会」（責任者・中島俊江、電話０４２－３２３－７７２９）である。

＜おくむら・まさお：本会・参与＞

前史と方正交流の歳月

林　郁

《前史》

「趙尚志将軍の頭がついに見つかりました。ついては『趙尚志伝』の映画を作り、テレビでも中央電視台から全国放送しますので、お会いして話したい」という手紙を 2005 年 2 月に中国の映画監督峻厳氏から受け取り、中国東北人のねばり強さに私は改めて感じ入った。そして、ほっとした。1987 年新年、単身で中ソ国境を訪ねたとき、最初にハルビンでお会いした李敏女士から「将軍の首探し」を頼まれてから 18 年。その年月が一気に凝縮して感じられた。

あの時、エスコート役の王英春青年（当時黒竜省外事弁公室に入って 5 か月目、22 歳・数え 24 歳）の案内で先ずハルビンで見学したのは東北烈士記念館だった。そこで私は初めて抗日軍総司令 1 軍楊靖宇と次の総司令 3 軍趙尚志の大きな肖像画に会い、「尚志将軍はウラツキコトで殺されました」と王英春さんから説明され、趙尚志の人柄と志の良さ、人気の高さを教えられたのだった。

ウラツキコトは「謀略」の英春先生の造語だとすぐ判った。彼は造語の名人で、「真面目深い」「気持ちあつめて（一生懸命）」、「不良深い」「野郎屋（女郎屋のこと・野郎が行くから）」など、ぴったりの言葉を発するので、思わず私は拍手したのだが、趙総司令の最後の話はあまりに痛ましかった。ついで李敏女士（前黒竜江省長陳雷先生の妻、朝鮮族、当時、省政治協商会議副主任、省少数民族事務委員長）から真剣に、真面目深く頼まれたのだ。「夫の陳雷と私は抗連 6 軍の同志で尚志軍 3 軍と合流して闘いました。あの趙尚志同志が 1942 年 2 月 33 歳の若さで犠牲になったあと、首が日本に持ち去られたと言われています」

楊靖宇のホルマリン漬の首は解放後に長春中央銀行地下室で見つかったが、趙尚志の首は不明のままだという。そこにはたくさんの無名の犠牲者への悼みが重なっている。李敏さんの家族も 6 人全員犠牲になった。父と兄は日本軍に殺され、母と姉は餓死、解放を見ずに逝ったと静かに話された。

そのあと私は王英春さんと零下 40 度～45 度の国境へ。ハバロフス対岸、撫遠の「残留婦人」宅や少数民族赫哲族（ナナイ）、オロチョン族、ダフール族、朝鮮族の郷など訪ね、長谷川テルと劉仁夫妻の墓参もして、旧暦春節を祝い、ハルビン「尚志大街」を見物して、帰国すると 2 月に趙将軍謀殺責任者、元警察隊特務の東城正雄氏を群馬県に訪ねた。東城さんは撫順戦犯管理所で深く反省した中国帰還者連絡会の人だから、正直に謀殺の詳細を語り、資料もくださった。「私は趙尚志の首を飛行機でチャムスから長春に運び、そのあと首は市内の般若寺境内に埋めたと聞きました。埋めた地点は判りません」。さらに「生き残り関係者に尋ねましたが、やはり般若寺境内ということです」という手紙がきた。

その旨、私はハルビンに手紙で知らせた。抗日運動研究学者金宇鐘先生と李敏女士はすぐ般若寺に探しに行ったが、見つからなかったと金先生から返事がきた。それが。趙尚志没後 63 年目で見つかったのだ。

般若寺の塀の内側近くから頭骨が出土、李敏女士が駆けつけ、左眼の下の傷で当人と確

認、中央での検査でも確認、中国では大きく報道された。地元新聞は全面特集である。

国家1級監督峻厳氏は北京で活躍中の戦後生まれだが、長春映画出身なので、この英雄伝記映画の監督に選ばれ、訪日調査に見えた。お連れ合いは東京の医薬品貿易会社役員、世界各地で活躍中の実業キャリア、その東京の綺麗なお宅で若々しいご夫妻と話した。過去の史実というより身近な人を語るような話しかたがとても印象的だった。

「李敏さんは日本の林さんに早く知らせなさいと申しました」と言われ、私は「何と誠実な！」と思った。95年春に他界された天国の東城政雄さんもこれで安心できると思った。

趙尚志は1908年遼寧省朝陽県農家の11人きょうだいの6番目に生まれ、父が農民自治運動の参加したため困窮の中で育ち、17歳で入党、黄埔軍学校で若き教官周恩来の影響を受け、卒業と同時に逮捕拷問されたが完全黙否をつらぬき、出獄後すぐ9・18が勃発した。ただちに黒竜江省珠河（尚志県）で抗日遊撃隊をつくり、一面坡から方正県に組織を拡げ、抗日連軍第3軍軍長兼北満総司令になり、第6、9、11軍と土着戦闘隊、山林隊、計2万余を率いて松花江両岸と小興安嶺ふもとの20余県で農民と共に未耕地を開墾、「生活自立農村根拠地」をつくった。この地道な自立自治活動は高く評価されている。

抗連は15の隊が組織され、東北各地で活動、「方正地区」は趙尚志3軍の重要拠点で、華川、依蘭方面から方正山間部を通ってハルビンに抜けるのが活動主要ルートだった。

日本軍警は反満を恐れ憎んで「匪賊、紅匪」として大討伐し、やむなくゲリラ戦になる。農民が密かにゲリラを支援するので「匪民分離工作」のために農民の集団部落移住囲い込みにかかる。この築造塀を尚志軍が破壊し、残されたビラには「兵士、警官の皆さん、祖国へ帰れ、我家に帰れ。父母、姉弟妹は男を兵隊に取られ、苦しみ泣いている」と日本語で記されていた。抗連に多いという朝鮮人が書いた日本語だと推定された。

珠河の初期同志は94人中朝鮮人43人。反満派は多民族共闘、初々しく平等団結を目指したが、武力猛攻撃で犠牲が増え、北方の山に追い詰められてゆく。現地人は苦力にされ、炭抗や関東軍陣地造営の労務者として連行された。作物の供出も厳しくなった。

日本側資料では「方正近くの陣地にあって抵抗する匪賊3千余を、蛮勇をもって壊滅、捕虜5百人、残党を依蘭に追い詰め、ついに富錦まで占領した」（1937~38年）

抗連の山塞には黒板、謄写版、古いミシンが残されていたという。昼は山塞に隠れて勉強し、明るい歌を作詞作曲して歌い、木の皮や乾草をかじって夜間に活動したという李敏さんたちは、多民族の絆固く、武力に敗れても心は明るかったという。解放後、李敏さんが歌った抗連歌曲50曲のテープが北京に残されている。

李敏さんは6軍教導隊教官の陳雷先生と結ばれ、夫妻は解放後いきいきと活動したが、文化大革命で別々の暗い牢屋に5年間投獄され、夜中にも尋問され、李敏さんは直腸癌になる。文革終了で解放されてすぐ手術し、命をとりとめた。術後のハンディにめげず要職を勤めあげたその人が趙同志の頭骨のために即刻列車で長春に駆けつけたと聞き、その気力、生命力に感激する。

峻厳監督の手紙は「貴重な歴史資料、東城さんの当時の写真、受け取りました。わざわざ図書館に資料を調べに行って頂き、感謝の気持ちどんな言葉で言ったらいいか。高橋哲郎先生・推薦の元中帰連事務局長ともお会いでき、非常に嬉しかったと思います。高橋先生の素晴らしい考え、平和の心、感動させられた言葉を映画に入れるつもりです」

趙尚志殉難の地、梧桐河で頭骨の納骨式が盛大に行われ、伝記映画は成功したという。

1992年から16年間、日中共同研究『満洲国とは何だったのか』の協働作業が続いた。中国側（東北淪陥14年史総編室）の学者研究者にとって「偽満」の最も重要な課題は「反満抗日史」である。論文の量も情熱も際立ち、植民地支配の実態へとつながり、「残された日本人問題はたいして重要ではない」という意見が中国側から出された。それは棄民された日本人を軽視しているのでなく、軍国主義の被害者として中国は人道的に処遇した。それでいいではないか。文革で「残留婦人」は苦労したが、私たち中国人も非常に苦労した、という意見に対し、日本側（植民地文化研究会・07年から学会）は、「満洲国」の生き証人として「残留日本人」問題、個々の人生は大事であると述べ、その短章は私・林郁が受け持った。戦後60余年たっても軍事支配の後遺症は重い。戦後の国家観も違う。

人の痛みがわかること、互いの痛みと希望を理解し合うことが歴史認識を共有する基であり、友情だと思ったことだった。

《方正交流の成果》

方正県が反満抗日の拠点だったことを想うと、そこが関東軍の占領拠点になり、一転、日本人難民の大集結地になり、残された日本人の集中地となり、生かされ、生き抜いた人びとが中日の家族をつくり、日本人公墓が建立されたことが「宝」のように思える。砲台山に散乱する遺骨を悼んだ松田ちゑさんの訴えが中央の周恩来に届き、日本人公墓が建立されてからの維持、王鳳山さんたちの協力、日本からのたくさんの墓参団の受け入れ、日本側の懸命な協力の歳月は、友好の手本だと素直に思う。

牧野史敬さん、大類善啓さんとは30年ほど前に大本教の王仁三郎研究会で知り合い、石井貫一氏を知った。大類さんたちの長い方正交流は、抽象的イデオロギーでなく、現実の生活に役立つ支援を現地の人々に添って積み重ねてきたことが良かったのではと思う。金丸千尋氏には中ソ国境調査でお世話になって以来、実行力と包容力に幾たび敬服したことか。金丸さんと親しい黒竜江省外弁要人孫志堅さんの動じない笑顔も忘れがたい。

80年代すでに藤原長作さんの方正での米作りは高く評価されており、王英春さんも「東北の民が米を食べられるのは藤原長作老のおかげです」と笑顔で言っていた。あの笑い好きのハンサム王英春青年が、今では黒竜江省外事弁公室副主任として、藤原長作さんの米作指導を褒めておられる。越しかた歳月を想うと感無量である。

酷寒の凍結破損で道路が通行止めになった方正にすでに立派な高速道路がのび、羽田澄子さんの記録映画「嗚呼　満蒙開拓団」が完成した。登場する人びとの真情あふれる言葉と白髪になった姿、広い現地と信州泰阜村の「耕して天に至る」風景、歴史観など、素晴らしい記録映画だと思う。奥村正雄さんの植民地文化研究会での「方正日本人公墓の報告」も心がこもっていた。

悲劇を忘れずに乗り越えた鎮魂・友好のシンボル「方正日本人公墓」の基礎は、平和！平和の永続を祈ります。

<はやし・いく：作家、『新編・大河流れゆく』（本稿参考文献）『満州・.その幻の国ゆえに』『家庭内離婚』（どれもちくま文庫）など。「植民地文化研究」編集委員>

日中友好よ、永遠に

吉川　春子

中国帰国者支援に取り組んで

日本の侵略戦争の傷跡は中国にとってはもちろんの事、日本人民にとっても痛ましいものですが、満蒙開拓団の悲劇は私はとても他人事とは思えません。私は、いわゆる残留孤児といわれる方々と同世代なのです。そして私が3歳から小学校卒業まで過ごした長野県は、満蒙開拓団として全国一、大勢の県民を送り出し、その半数の人々は再び祖国の地を踏むことはできなかったのです。

1985年に参議院議員になった私は、中国残留弧児の方々の帰国や日本語の習得、就職などについて十分な対策を取るようにたびたび国会で政府を追及してきました。そして坂本伊佐治官房長官に「満蒙開拓団は国策であった、開拓団の方々には苦労かけてすまなかった」と謝罪をさせました。

また、終戦当時 13 歳以上であった方々は、自分の意思で中国に残ったとされ、帰国支援も全く不十分でした。このいわゆる中国残留婦人12人が、93年9月5日、突然に、日本への永住帰国をもとめて成田空港に降り立ちました。翌日私は、所沢の中国帰国孤児定着促進センターへ飛んで行って皆さんのご要求を伺い、厚生省を私の国会事務所に呼んで対策を講じてもらいました。

中島多鶴さんとの出会い

私は中国残留孤児・婦人の要求を政府に対策を取らせる活動を行う中で、泰阜村の中島多鶴さんと知りあいました。中島さんは自らも満蒙開拓団の一員として家族をあげて旧満州にわたり戦後の引き上げでは家族ばらばらになって単身で帰国されました。手書きの満州の地図で私に逃避行の生々しい経験を語ってくださいました。その経験から残留婦人の帰国やその後の生活支援に尽力し、何十回も訪中されています。８０歳を超えた今も、ＮＨＫの取材のために訪中するなどその精力的活動はとてもまねができません。

中島多鶴さんから私は泰阜村の満蒙開拓団の碑へも案内してもらいました。そして「方正の日本人公墓に共産党の現役国会議員が参っていないのでは」とご指摘を受けました。

多くの人が眠っている彼の地にいつかは行かねばと思っていました。何とか時間を作りたいと思っていましたが、ようやくチャンスに恵まれたというわけです。2006年夏、私は国会議員としてモンゴル友好議連一行とウランバートルを訪問し雄大な草原に遊びモンゴル国の大統領など要人にお会いした後、単身で北京に向かいました。そこで瀬古由起子元衆議院議員、有馬正秀秘書、二男の豊と落ち合って中国東北地方へ向かいました。チチハルで毒ガスの調査、鉄嶺でハンセン施設跡を調査して最後にこの度の第一の目的地であるハルビンの方正県方正鎮に向かいました。以下当時の日記から引用します。

旧満蒙開拓団の公墓へ

８月１１日金曜日、８時ホテル発、今回の中国訪問の最大の目的地である「満蒙開拓団」で犠牲になり現地で眠る人々の墓のある方正（ほうまさ）鎮へ。高速道路を走ること２時間、方正市の出口に到着、地方人民政府の人々の出迎えを受ける。人民政府の車の先導で

約一時間走る。物の本で読み聞かされていた方正の町は、落ち着いた地方都市という感じで、にぎやか。ここで六十一年前、日本人にとって地獄絵が展開された。

庁舎に到着。新築間もないきれいな建物の大会議室のスクリーンには、大きく「吉川春子参議院議員一行歓迎」の文字がパワーポイントを使って示されていた。迎えてくれたのは、ハルビン市方正県人民政府外事弁公室主任・王偉新、張国文・人民政府副市長、田文武さん、通訳の結紅萌さんであった。大きな会議室テーブルには果物とお茶が用意されていた。

張さんは次のような歓迎の挨拶をした。

「友人の仲間に対し方正人民政府を代表して歓迎する。長年の交流の結果、日本、方正双方にとってそれぞれの地が第二の故郷になった。方正県の人民は日本で生活している。多くの日本人に対して、方正県の人が豊かな心を持って恨みに代えてもてなした。中日国交正常化の後、方正と日本は特別の血縁を結んだ。８０年代以来１６回の日本への訪問活動を行った。今年も別の訪中団を受け入れた。吉川さんは長年中日友好の往来のために貢献された。今日の方正は、日本の投資の受け入れのための建設を進めている。

これから日本人の公墓に行けばその様子が見られる。日本の有識者が方正を訪問するように、皆さんがこの様子を伝えてほしい。黒龍江省随一の、投資者（日本企業）によい政策を検討している。日本人にいろいろの便宜を提供している。日本人の多くの人に方正にくるように伝えてほしい。日本政府の支持と力添えを得られるように伝えてほしい。交流友好訪問を通じて経済発展がかなうように。」と。

方正（ほうまさ）は、中国東北地方の他の地域と同じように、満蒙開拓団の悲劇が起きた場所であった。１９４５年８月１５日、終戦直後北部のジャムス市から１万数千人の開拓民が逃避行でハルビンを経て日本への帰国船の出るコロ島を目指した。山道で、歩いてきて、食料もなくばたばたと倒れたという。その通過点が方正であったとのこと。開拓団本部に１万人くらいの難民が収容された。真夏であり３分の１の４千人～５千人が亡くなった。１万人の３分の一は列車でコロ島へ行った。

（しかし列車に乗ると危険だとの風評が流れ、空のまま列車だけが走り去った。その結果、歩行による逃避行となり、より多くの命が失われる結果となった、と私は聞いている）

冬の間に病気で多数が死亡した。春になって雪が解けて人骨が多数露出した（私は４０００柱と聞いている）。骨を残留孤児・婦人たちが集めた。方正人民政府は文書を作って中央政府に「敵の骨ではあるが、出して公墓をつくりたい」との申請を行った。周恩来は「日本人民もまた日本軍国主義の犠牲者である」と墓の建立を認めたという。

毎年多くの日本人関係者が墓参に訪問する。私は最多の「満蒙開拓団」を送り出し、多くの犠牲者を出した長野県人の国会議員として、初めて方正を訪問した。墓標の前で、集団自決前に歌ったであろう、”ふるさと”か”信濃の国”を歌いたいと思って来たが、心の中でも、声に出してでも歌える状況ではなかった。言葉が出なかった。

中国政府が日本人を手厚く葬ってお墓を立派に管理していてくれることに感謝したい。小泉総理も靖国神社参拝を行うと強気だが、一度方正に行くべきだ。

「日本人民も被害者だ」と言うことを中国で度々聞いた。日本の国民も無意識にそう思っていないだろうか。しかし、国民の多くが戦争に反対したら指導者だけでは戦争はできない。日本国の方向を誤らしめない人物を政治家に選ぶ、国民一人一人が本当にしっかりしなければならないときだ。

方正鎮は人口６万人、方正県は２３万人、そのうち４万人くらいが満蒙開拓団ゆかりの人だという。訪中前に現地で懇談できる日本人はいないか、日中友好協会が探してくれたが「皆帰国し、養父母は亡くなり、いない」といわれていた。

当地に来て分かったのは残留婦人のお年寄りが一人いるが認知症とのこと。しかし私たちを案内してくれた県職員は妻が残留孤児２世で、妻は日本に帰国しているとのこと。自分は公務員で仕事があり日本には行けないと。祖母から当時の苦労話を聞いたという。

長野県泰阜（やすおか）村の協力で、小学校を建てたと聞いていたので立ち寄った。１０００人の児童が学ぶと言うきれいな学校であった。方正県と泰阜村は姉妹関係にある。

３０分ほど車を走らせると大きな蓮の咲いている池がある。中国の規模はどこも大きいが驚くほどの広さである。盛りは過ぎていたがピンクの大きな花が咲いていた。そこで長野県から来たという残留孤児２世という人に出会った。私も長野県出身だというと、懐かしそうだった。

お米の栽培も日本人（１９１２生まれ）が指導した水田が広がる。おいしいお米を昼食にいただいた。あちこちに絆が残っている。平和の絆として発展させてゆきたい。ハルビンの中心を流れ、ロシアのアムール川に注ぐ松花江という大きな川は、幼子が流された悲劇の川であった。ホテルの窓から見下ろすと夏休みを楽しむらしい子どもが泥水（清流とはいえない）の中泳いでいた。（以上当時の日記より）

平和な世界へ日本の責任

私は「慰安婦」問題に取り組んでいます。朝鮮半島や中国各地から少女や若い女性を何十万人も拉致し、「慰安婦」にした日本政府は責任を回避しようとしています。しかし、国際的本流は、戦争違法化、人権保護の方向です。今、アジア諸国のみならず欧米からも、また国連やＩＬＯ（国際労働機構）からも繰り返し、「日本は過去と向き合って『慰安婦』問題の責任を取れ」という勧告を突き付けられています。

ひとたび戦争を起こせばその傷は癒えるまでに数十年から１００年以上の歳月を要します。その影響はもっと長く尾を引くでしょう。いつも犠牲になるのは弱い人々、女性、子どもです。絶対に戦争を引き起こさない、日本国憲法をあくまで守る、そのことを私は方正県の日本人公墓に眠る方々にかたく誓ってきました。

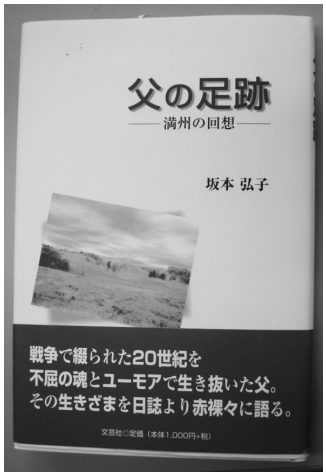
＜よしかわ・はるこ：1940 年東京生れ、埼玉県八潮市議１期を経て参議院議員 4 期 24 年。参議院環境委員長、ＰＫＯ、政治改革等の特別委理事歴任。自衛隊海外派兵、郵政民営化、女性の深夜業規制撤廃などで活躍してきた＞

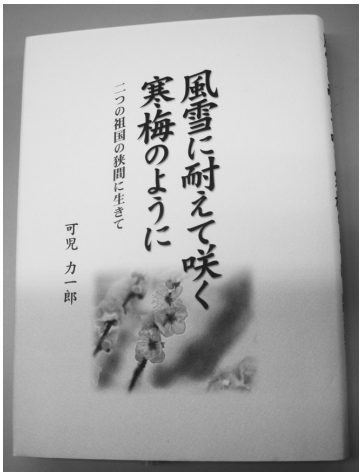
満蒙開拓移民について想う

坂本弘子著『父の足跡――満州の回想』と可児力一郎著『風雪に耐えて咲く寒梅のように――二つの祖の狭間に生きて』を読んで

藤井　正義

最近読んだ旧満州に関する二冊の本を紹介する。一つは坂本弘子著、「父の足跡―満州の回想」であり、もう一つは、可児力一郎著、「風雪に耐えて咲く寒梅のように――二つの祖国の狭間に生きて」である。





激動の時代を生き抜いた父の日記

「父の足跡―」の方は、東北の農家に生まれ、生活に窮して炭鉱夫や季節労働者となり、後に兵役で渡満、九十五歳の天寿をまっとうするまで、激動の時代を生き抜いた父親の、波乱に満ちた生涯の日記である。娘の著となっているが、ほぼ原文のままであるという。

父親は１９３１年の柳条湖事件の頃、兵役で旧満州に赴任、古参の下士官にまで出世して帰国、十一年の兵役を終えると、再び渡満して旧満鉄に入社、北満に転勤となり哈尔浜（ハルピン）を基地として関東軍の軍需品の運搬に当たった。

敗戦を佳木斯でむかえ、軍や難民の輸送のため船舶の手当てにあたっていたが、ソ連軍の追撃を受けて途中で打ち切り、食料を積み込み、方正港で負傷者と婦女子を収容し、家族のいる哈尔浜に引き揚げた。日本人狩りで拉致されたが、途中で脱出、いろいろな仕事をして生計をたて一年後の昭和２１年９月、哈尔浜駅より奉天・胡蘆島（ころとう）経由で帰国した。確かに、小学校しか出ていない父親が、激動の時代を生き抜いた逞しさは文面の随所に読み取ることができて、その生き様には頭がさがる。

開拓移民についての克明な証言

「風雪に耐えて咲く寒梅のように―」は、実体験を通じて、満洲開拓民とは何だったか、実に克明に、かつリアルに描いている。いわく、開拓移民の時代背景、著者の生まれ故郷である読書村（よみかきむら）（現在の木曽郡南木曽町）で分村計画が実施に移された様子、入植地に到着

直後味わった失望感（こんな筈ではなかったと！）、現地での過酷な日常生活、純朴な中国人達の親切、そうして敗戦。被害者である中国人との立場の逆転、彼らの温情と打算、著者のいう「血だらけの逃避行」辿り着いた避難所での地獄絵さながらの惨状、日本への帰国を待つときの焦燥感、帰国後の思わぬ肉親間の感情的ギャップ（時の隔たりと言葉の障壁）等々、内容は広範囲に及ぶ。本号に著者ご自身による寄稿もあるから一読されたい。

ここでは、可児著や坂本著その他の出版物から得た私の浅薄な知識に基づいて、満蒙開拓移民について私なりにおさらいをしてみたい。

ソ満国境の防衛と農村の口減らしのために

満蒙開拓移民は、対ソ戦略と抗日ゲリラ対策の軍事上の観点から、また、急増する内地の人口と昭和恐慌で打撃を受けた農村対策という経済的な観点から計画され、実施された。１９３２年、永豊鎮へ入植した弥栄（イヤサカ）村開拓団を最初とするが、このときは自分の土地をゲリラから守りたいという大地主と、日本の軍部の利害が一致した完全武装移民だった。続く第二次移民も完全な武装移民だった。１９３６年からは広田内閣のもとで本格的な移民として「分村移民」が導入された。その狙いは、やはり一つには、ソ満国境の防衛であり、更には人口増加による耕地面積の不足を解決するためだった。目標は、２０年間に百万戸、五百万人の移民を行い、満州総人口の一割を日本人で占めることであった。農業耕地の足りない県や、大正から昭和にかけての生糸暴落による養蚕収入の減少県では、農村の疲弊を解決するため、村民の一部を旧満州に移民させ、村の口減らしをする、いわゆる「分村移民」計画がたてられた。食べるに困る農民は、「満州に行けばふんだんに土地がある」との甘言にのせられ、これを拒む者には「米の配給を停止する」と村役場から半強制的に迫られたのである。

だまされた開拓移民たち

入植先での生活は緊張と不安に満ちていた。到着初日から、一家に一丁銃が与えられたところもある。日本人を遠巻きにしている中国人達の目は不穏な色を宿していた。現地の農民達は不当に安い価格で農地を満州拓殖公社に強制買収され、周辺の荒地に追放されたという事実を開拓民たちは知らされていなかった。炊事のための燃料にも事欠き、水がなくて遠く離れた井戸から、中国人に有料で汲んできてもらったりした。学校への往復は牛や豚の糞だらけの道だった。開拓民たちは入植してまもなく、「だまされた」と思ったという。それでも開拓民たちが現地の生活に慣れると、無学で義理堅い現地人は、生きるために開拓民と手を組んで生活する様になった。北満の厳しい自然に適した中国流農業を開拓民に教えたり、中国馬を提供してくれたりした。開拓民も現地人が一番欲しがる服地を提供したりして、結構よい協力関係が生まれた。１９４３年以降、戦況が悪化すると、それまで開拓民には免除されていた徴兵義務が課せられ、学校の先生までも招集され、授業はできなくなった。一家の主を召集された開拓団の家では現地人に田畑を貸す人も出てきた。

悲惨な逃避行

やがて魔の八月九日、ソ連軍の侵攻が始まると十八歳から四十五歳までの男子には全員口頭伝達による召集命令が発せられた。県公社から集団疎開命令が出て、閭家駅には読書、

泰阜、中川、七虎力などの４開拓団や、他の開拓団も集結してその数、数千人が引き揚げ列車を待った。しかし、せっかく準備された列車も、現地に留まるべきだとの反対派のために、空のままで発車した。開拓民は集落に戻ったが、そこは暴徒の襲撃の恐れがあるため、再び、集落を離れ、徒歩で危険をおかして「血だらけの逃避行」が始まったのである。開拓民は方正へ向かった。方正が落ち着き先の避難所となったのは、それ以上に陸路で哈尔浜へ行くのは匪賊の襲撃があり危険であること、また、開拓団本部跡の近くにある尖山に関東軍の要塞があるから、軍需品や軍用衣服、医薬品、食料などが蓄えられていると思ったからである。しかし、要塞は、現地人に荒らされた上、まもなく駐留したソ連軍に占拠された。ソ連軍は日本軍の遅れた武器弾薬には興味を示さず、それ以外の物資を十月までには運び去ってしまった。伊漢通港から松花江を哈尔浜へ向かう引き揚げ船が来るかも知れないという淡い期待もあった。鹿児島（沖縄）など先住の開拓団が逃げ去った跡の空き家も、流入した数千人の避難民を収容するのに充分とはいえないまでも、またとない施設であった。

現地中国人の温情と打算

逃避行中も、逃避先の避難所でも、中国人に身をゆだねる人が続出したが、貧困のどん底にあった現地の中国人が、何故われ先にと避難民を受け入れたのであろうか？彼らはそれほどまでに情の厚い人たちだったのだろうか？　私だけでなく他の人々もかねてより抱いた疑問であったと思う。可児著を読んで一つの真実が明らかになった。当時、結納金が支払えないために未婚のままの中国人男性が多かったが、日本人女性を娶るなら結納金は要らない。日本人はよく働くから子供も労働力として役立つ。低年齢の女子は適齢期まで待てば結納金を取って他の家に嫁がすことができる。高年齢の男子はすぐ農作業に使える。これに目をつけた日本人狩りのブローカーが暗躍した。勿論、昨日まで主であった日本人開拓民の落ちぶれた姿を見て同情した中国人も多かった。

割を食った開拓民たち

終戦前後、旧満州には１５５万人の日本人がいたといわれる。満蒙開拓団の在籍者は２７万人だったが、１９４５年の「根こそぎ動員」により、そのうち４万７千人が現地で召集された。ソ連の参戦時には開拓団人数は２２万３千人に減り、その殆どが老人、婦人、子供だった。

引き揚げの順番は、軍司令部と軍人、軍属とその家族、官庁（旧満州国政府）の日系家族、満鉄や満州拓殖公社など国策・国営会社の職員とその家族、最後に一般市民だったが、哈尔浜など大都市にいた人の方が情報を得やすく、避難しやすかった。一番割りを食ったのは、遙かソ満国境近くに入植した開拓民だった。関東軍の主力は１９４３年には、南方戦線に、あるいは、本土防衛に「転進」し、１９４４年９月には大本営は防衛線を新京（現、長春）・図們を結ぶ京図線と新京・大連を結ぶ連京線以内に撤退し、事実上、旧満州の５分の４を放棄した。入植地は大部分が新たな防衛線の外側にあった。しかも、最終組の入植した１９４５年５月、終戦の３か月前であるといわれるから唖然とせざるをえない。

＜ふじい・まさよし：社団法人日中科学技術文化センター参与、　本会事務局＞

日本中国友好協会発行「日中友好新聞」
2009年２月１５日付（左）と５月５日付掲載

方正日本人公墓と映画「嗚呼 満蒙開拓団」

大類善啓

大類善啓さん

方正県の「日本人公墓」

1945年夏、旧「満州」にいた多くの開拓民たちは、ソ連の参戦と日本の敗戦によって逃げ惑い、やっと辿り着いた先がハルビン市から約180キロ東にある方正だった。しかし関東軍は撤退した後だった。その方正で、酷寒の中、餓えと栄養失調、発疹チフスなどで、およそ4500人が息絶えた。

後年、その時の累々たる白骨の山を見たある残留婦人は、埋葬したいと思った。その願いは周恩来総理にまで届き、1963年、中国政府は日本人公墓を建立してくれた。公墓は、荒れ狂う文化大革命時でも守られた。

宝清県と区別するために、「ほうまさ」と呼ばれた方正県にはそれゆえ、残留婦人が一番多く住んでいた。

定住を余儀なくされた残留婦人たちを支援しようと、敗戦時、日本人の引き揚げに力を尽くした石井貫一氏などを中心に、1993年「ハルビン市方正地区支援交流の会」が設立され、私も参画した。

今年2月15日付の本紙「私と中国」に登場した今村春江さんのお父上、董殿義さんも方正出身華僑の1人として参加された。その後、方正の残留婦人はほとんど日本に帰国し、石井先生も亡くなった。

会は改めて、中国に唯一存在する日本人公墓を多くの人びとに知っていただき、公墓建立の国際主義的な精神を広めようと、2005年に「方正友好交流の会」を発足させた。

その会報『星火方正』で日本人公墓の存在を知った映像作家の羽田澄子さんが、記録映画「嗚呼 満蒙開拓団」を創られた。

6月に東京の岩波ホールで一般公開されるこの映画で、国境を越えた友愛の象徴である日本人公墓の存在が、ますます光り輝くことを願っている。

（方正友好交流の会 事務局長）

私と中国〈775〉

中国帰国者3世、「方正友好交流の会」理事
今村 春江さん

中国の「日本人公墓」訪問を呼びかける

中国ハルビン市郊外の方正（ほうまさ）県に、日本の「満蒙開拓政策」で犠牲となった5000人近い人びとが眠る「日本人公墓」が存在していることは広く知られていません。

春江（中国名・董力強）さんの祖母ヤエさんは、奄美大島から開拓民として方正県に入植。辛酸をなめつくした体験を経て、1978年帰国しました。父親の董殿義さん（64歳）は人民解放軍広報課の仕事をしていましたが、今村さんの母とともに来日し日本で暮らしています。

その父が「日本人公墓を日中友好のシンボルに」と方正友好交流の会を1993年に旗揚げし、現在約500人の会員がいます。

春江さんは7歳で来日し、高校まで日本の学校に通いましたが、中国語がほとんど話せず、天津の南開大学で中国語を覚えました。

「日本人公墓」を訪問して、その悲惨な歴史を知り、「父の仕事を受け継ごう」と決意しました。方正県を訪れる開拓団関係の日本人はいますが、日本人訪問者もハルビン止まりが多く、方正県までは足を延ばしません。

春江さんは「日本の若い世代がたくさん来て欲しい。現地で、中国政府や国民が墓地を建立し、いまも管理している事実を見て日中友好の気運を高めて欲しい」と話します。そして「日中友好の架け橋は、国民同士が真に理解し合うことなしに、立派な架け橋にはなりません」と言葉を強めました。（お）

「方正友好交流の会」
連絡先 ☎03-3295-0411 FAX 03-3295-0400
映画「嗚呼満州開拓団」は6月13日～7月末、岩波ホールにて

ここに紹介されている今村春江さんは、会報の発送作業になると、小学１年になる男の子を連れて参加してくれる。上の記事では、父上の董殿義さんが、前身の会を立ち上げたような表現がされているが事実ではないので訂正しておこう。董殿義さんは、方正出身華僑として会の趣旨を理解し大いに賛同してくれた一人である。

さて、この会の活動を続けていると、どうしてこの会が出来たのかと聞かれることが度々ある。そこでこの機会に、当会の前身「方正地区支援交流の会」が成立した経緯を綴った「方正県との出会いとその関わり」（『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』所収）を次頁以降に、また前身の会長であった石井貫一氏の軌跡を綴った『日本と中国 その底辺を翔けた７０年』（石井貫一編著）に収録されている王鳳山氏（元・方正県副県長）の「方正地区日本人公墓の由来」という記事を紹介する。この原稿の初出は（社）国際善隣協会の『善隣』（94年９月発行）に掲載されたものである。（大類）

『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』（04年4月発行）より転載

「方正県」との出会いとその関わり

ある一つの方正支援活動報告

大類善啓

中国東北地方において、日本とひときわ縁が深く、いわば日中友好の魂の地としての方正県に対し、多様な支援を行おうとして結成された「方正地区支援交流の会」はその後、いくつか名称を変えて継続した。この会も、誕生経緯を翻って見れば実にドラマティックな紆余曲折の歴史があった。本稿は、当初から末席の一人として会に関わった私のささやかな思い出であり、同時に一つの「歴史回顧」である。後に続く人々のための参考になれば幸いである。

一、設立の発端
―ある篤志家の願い―

会の発端は、資産を持つ、ある老いた婦人がそれを有益に使いたいという志から始まった。

その婦人の名前は大塚しづさんである。彼女の夫は、宗教法人「大本」の信徒で歯科医であった。しづ夫人は、医者の夫君とともに布教を兼ね、昭和の初めメキシコに赴いた。その時、大本教団の創設者である出口王仁三郎はしづ夫人に遥かかなたのメキシコを、「ちょっとそこまでや」と語ったそうである。メキシコへは当時二か月の船旅だった。

「なにがちょっとそこなんや。聖師さんやっぱり変わった人や」、と後年しづ夫人は友人に語った。

ともあれ、しづ夫人は戦前戦後、中米メキシコに三〇年滞在し医院を開業する夫を支え続けた。その後、一九五一年日本に帰国した。帰国後大塚夫婁は、大本教団の地方幹部として活躍。その後、夫君も亡くなり、お子さんもなかった大塚夫人は、92歳の高齢になった一九八八年五月の時点で、外国に定住する日系の人々に何らかの形で援助したい意思を明らかにし、財産（約五億円）の遺贈を決意された。

大塚夫人はこの意志を、親交のある大本信徒・牧野史敬氏（本名は八郎、当時設立する財団の事務局長の予定者）に伝え、そのための計画、方法、手続きに関する一切の事項を牧野氏に委託した。牧野氏はその決意に感激、また事の重大さを思い、その基本的な構想及び処理方法などについて、石井貫一氏に意見と協力を求めた。

大塚夫人の念頭にあった対象になる人々は、中南米に在住する日系人にあるものと思われた。そこで牧野氏は、中南米事情に精通している石井貫一氏に相談した。石井氏は戦時中、満蒙開拓民問題に関わり、戦後は移住を中心にした中南米政策を研究、『わが国の中南米政策』の著者でもあり、中南米関係の団体理事などをしていた。

石井氏は牧野氏に対し、中南米に関する民間の各種団体は一応整備しており、新しく団体を設立する余地がないことを話した。そして今必要なのは、中国に定住を余儀なくされている中国残留邦人（孤児及び婦人）と、その二、三世及び養父母に対する支援を行う団体の設立であると語った。

二、残留婦人たちへの支援構想

この構想は、石井氏が日本の敗戦後、北京から瀋陽（奉天）に赴き、百万余の日本人の円満な引揚げ工作に従事した経験に基づいており、日

中国交正常化以来絶えず念頭にあったことだった。日中両国政府の届かない部分に対して、民間が戦後処理を補完するという有意義な事業としての石井氏の構想であった。

牧野氏と石井氏はこの構想を持って、大塚夫妻と親交があり、また大本信徒で地方幹部でもある豊田利郎氏（財団設立に際しては副理事長予定者、九九年七月死亡）に報告し相談した。

豊田氏は、この構想が大本教団で聖師として慕われた出口王仁三郎の教えにも一致するものであるとの結論に達し、この件を教団の師として慕う、元・大本総長であり元・人類愛善会会長（教団組織の外郭団体として平和運動など社会活動に関わる組織）である出口栄二氏に報告し協議した。

戦前、大本教団は絶対的な天皇制国家の下、二度にわたり弾圧された宗教教団として、知識人や心ある人々から好意的かつ畏敬の念を持たれていた。

戦後も、かつて弾圧された体験を持つ故、平和運動に積極的に関わり、日本宗教界にあって、その特異な存在が象徴的な意味あいを持って各界から見られていた。

ことに出口王仁三郎（戦後の一九四八年死亡）は、戦前から日中間について、その親善と安定的な関係の発展を望んでいた。出口栄二氏はその王仁三郎より直接薫陶を受け、とりわけ反戦平和運動に熱心だった。そのような事情もあり、出口栄二氏は一九六二年モスクワで開催された平和と軍縮のための大会に、日本宗教界の一員として参加した。その折り、中国仏教会・会長の超樸初氏と出会い、氏の招請により日本への帰途、北京を訪問した。

その北京である晩遅く、出口氏は周恩来首相と会見した。戦後日本宗教界のリーダーとして初めての周総理との会見であり、二時間に及ぶ会談になった。周首相はその際、戦前戦後の大本の活動を聞き、中国でもっと大本を知らせる必要があると、その場で立ち会った中国の新聞、雑誌関係者に語った。その会談は『人民日報』にも写真入りで報道された。

そんな経緯もあって数日後、出口氏は『人民中国』の記者から取材を受け、それは日本語版に記事として掲載された。余談になるが、およそ二十年後、その時の『人民中国』の記者だった唐忠朴氏と私は協同で出版の仕事をすることになった。その仕事で唐氏が来日、中国への帰途大阪に立ち寄った。その折り、通訳の日本人のK君が、私が大本関係の雑誌に原稿を書いていることを唐氏に話したところ、唐氏は大本についてはよく知っており、聞けば出口栄二氏を取材したという。これはまた奇遇だとその晩、出口氏に電話すれば出口氏はちゃんと氏の名前まで記憶しており、翌日唐氏と出口氏との再会が大阪で実現するハプニングが生まれた。

さて、出口栄二氏は、豊田氏からの報告と、提唱者・石井貫一氏の構想に共感し、当面の準備活動費として篤志の寄付を豊田氏に与えられた。豊田氏はこれに勇気づけられ、同信の同志らに呼びかけ設立に至る準備活動費を用意した。

その構想、理念は要約すると次のようなものである。

1）中国に定住する日本人（残留孤児及び婦人）、及びその二、三世、並びに養父母らその地域住民が、中国の文化、経済の発展に寄与し、ひいては日中友好増進に貢献する有為な人材を育成する。

2）そのために『友誼の場』を十ケ所建設する他、公的資金を活用する経済技術協力を実施する。

3）日本に永住する二、三世らの進学のための永続的な育英事業などを行う。というものであった。

石井氏は、この協会の趣旨、事業案の作成、政府関係機関の対外援助、及び日中関係の過去と現状などを総括し、周到な調査と方向性を示唆。主要役員人事の諒解を得るべく、まさに一年有余を日勤の形で活動した。

一方、一九八九年（平成元年）四月十日には、寄付行為者・大塚しづを遺贈者として(財)中国定住者愛善協会（当時の仮名称、愛善という言葉は、大本の教えの根幹を表現する。その後、日中愛善協会に改称）に寄付行為を行う旨、公証人立会いの下、公正証書を作成した。遺言執行者及び証人に、石井貫一、豊田利郎、牧野八郎、北島眞吾、吉野秀夫氏、そして私・大類もつらなり、それぞれ署名した。この時、しづ夫人は同居

の婦人にだき抱えられるようにしお顔を見せられ神棚に手を合わせられた。

三、岡崎嘉平太氏の秘話 周恩来の言葉

石井氏が奔走した結果、名誉会長には宇都宮徳馬氏（石井とは親友、京大で同期）、会長には田川誠一氏が就任することに同意された。このとき宇都宮氏は、石井氏にこの構想は斬新な試みであるので、進めるにあたっては各方面に充分に配慮してやるようにと、忠告し激励された。

また長年、日中国交回復運動に情熱を捧ぎ、周総理とも親しい関係にあった岡崎嘉平太氏（財団法人・日中経済協会顧問）に会の最高顧問になってもらうべく石井氏は交渉した。石井氏と岡崎氏は親しくはないが、戦時中大陸において知り合いであった。岡崎嘉平太氏は戦争中、南京、上海の日本大使館参事官として、石井氏は北京の大使館一等書記官（官房長）として、共にそれぞれ別々に底辺における日中和平工作を進めていた関係でお互い知り合いであった。

その際岡崎氏が、「石井さん、貴方の構想は私も以前から考えていたことであり、遅きに失した感がある。しかし、これからが本番であるからしっかり頑張れってくれ！。財界方面の工作は私が引き受けるから」と石井氏に強い激励を送った。

同時に、日中国交回復の裏工作に当たり、今まで誰にも話さなかったことであるが、と前置きして、次のような秘話を明らかにされた。

「周総理が一番頭を悩ましたのは、日本に対して賠償金を放棄すると決意した後も、中国に最後まで残された多くの残留日本人を援助し支援した金額の賠償だけは譲れず、日本に請求するようにとの声が官民一同、特に人民の間からは強かった」と述べ、残留婦人のことには今後の日中間における一番難しい問題が内在しており、後々まで尾を引く問題であることを指摘された。そして、この構想の必要性と重要性を語り、今後も全面的に協力する旨約束された。残念ながらこの会談の一か月後、岡崎嘉平太氏は逝去された。財団設立の工作中、石井氏にとって最も感激し強い印象を残した話だった。

このほか、財団設立活動中、朝日新聞の当時の論説副主幹・今津弘氏と編集委員の坂本龍彦氏の両氏、また調査室の西園寺一晃氏らからは、常に適切な助言と協力があった。また、他にも思いがけない応援があり、着々と準備体制が整いつつあった。

四、方正県・王鳳山副県長らの来日

そんな折り、たまたま一九八九年（平成元年）十月、山形県大石田町の招聘により、方正県副県長・王鳳山氏、外弁室主任・王広臣氏、同副主任の陳福堂氏（通訳）が来日。これは大石田町と方正県との友好協定締結の準備と日中水稲王・藤原長作氏への表敬訪問が主要目的であったが、朝日新聞・坂本龍彦氏の斡旋で、石井氏、豊田氏、森山誠之氏（設立発起人の一人、国際善隣協会・元東北委員長）、牧野氏、大類ら関係者との会談が実現した。その際、石井氏から（1）日中愛善協会の趣旨を説明、（2）中国農業の現代化については牧野氏が提言をした。その後の懇談会等において、日本側から日本人公墓設立の詳しい由来と真相（書いたもの）を求めた。

黒龍江省方正県（一九九二年ハルビン市に合併）は、戦後の新中国で唯一の日本人公墓が建立されており、残留孤児・婦人問題などを論じる時、どうしても欠かせない中心になる地である。そこで、この地を財団設立後のモデル事業候補地の第一号とすべく、非公式に話しをした。

中国側からは、山形県との交流は出来たが、長野県との交流がない。方正県の残留日本人には長野県出身者が多いので、長野との交流を実現したい旨要望があった。

その後、王鳳山氏ら三人は、千葉県にある大権農場を視察。代表幹事の林幹男氏の詳しい説明に、王鳳山氏らは一言の質問もなく、「まるで吸取紙のように聞き入りメモを取った」（牧野氏）。聞けば、有吉佐和子の『複合汚染』の中国語訳を王鳳山氏が事前に中国で読んでおり、今日の農業の問題を熟知していたのだ。

王鳳山副県長らは帰国後、前記の事項について県幹部と協議し黒龍江省とも連絡、日本側の申し入れを受けて立つとの決意を表明され、氏自身が対日連絡担当となった。

このように両国内の準備活動は順調に進んでいた。設立準備事務局としては、一九九二年（平成二年）中に、日中両国政府及び関係機関の賛同と、更に現地の準備調査を行い、一九九二年八月の財団設立に向けて準備が進行していた。

五、大塚夫人の養子縁組と逝去

ところがここで思わぬ事態が生じた。一九九〇年五月十二日、九二歳の大塚夫人が逝去されたのだ。そして次のような事態が判明した。

大塚夫人が病気重体になってから、大塚夫人と大塚夫人宅に同居し介護者でもあった園頭夫妻（大本信徒）との養子縁組が、平成二年（一九九〇）三月十四日付けで行われ、遺産を遺贈する旨、署名されていたのだ。大塚夫人は当時、日大医学部付属病院に入院中であった。準備活動に奔走していた豊田、牧野両氏と園頭夫妻は熟知した間柄であったが、何等の連絡もなかった。

豊田、牧野両氏も、その点では不覚にも大塚夫人の死去まで、このことが知らされていず、まさに晴天の霹靂であった。

しかし豊田、牧野両氏は、大本信徒らしく実に、活淡として潔くこの事態の推移を認めた。

私自身は、このドラマの底に流れる人間の業、行為ということに改めて思いを巡らすばかりだった。

こうした中で、当初からこの活動を支援してきた大本信徒グループの中からも、当時大本教団の教主争い（裁判にもなった）の渦中であったこともあり、不協和音が囁かれてきた。このあたりについては、宗教教団特有の後継者争い、権力争いなど外部の人間には伺い知れない複雑な感情のもつれも起因していた。この点については私は今でも豊田、牧野両氏にいたく同情の念を禁じ得ない。

そこで発起人代表、相続権者、支援宗教者グループとの間の折衝などが極秘裏に進行したが、一九九〇年（平成二年）十一月十一日の相続税申告の時期までに、その調整がつかなくなった。

発起人の中には優秀な弁護士をつけ訴訟を起こすことを主張する者もいた。そうなれば、法律的には養子縁組が優先するが、寄贈者は入院中で重体であり三月十四日の養子縁組の時点において、果たして大塚しづ夫人の意思決定の判断能力有無が問題になり、医師の証明が必要となる。そうなれば裁判になる。残留邦人問題で裁判沙汰になれば、正邪善悪は別として内外の物笑いにもなることは必至と考え、発起人代表三名（石井、豊田、牧野）は、涙をのんで、同年十一月事務局の閉鎖を決意。協会設立への活動及び運動の展開は挫折、頓挫してしまった。

「三年前、私たちが協会設立を思いたった理由は、遺産を人道的事業に役立てたいという篤志家大塚しづ氏の遺産を母体にして、中国残留孤児の養育に厚くしてくれた養父母や地域社会に感謝の気持ちを示したいということにありました」。「事をなす上での展望と着手において、とりわけ私たち発起人の不明と不徳とを深く痛感せざるを得ません。幾重にもお詫び申し上げます」という詫び状は、日中愛善協会（会の名称はこの時点ではこう変わっていた）設立準備委員会・発起人代表として、石井貫一氏、豊田利郎氏、そして事務局長・牧野史敬氏の名で協力関係者に発信し、石井、牧野氏ら主要関係者は断腸の思いで事務所を閉鎖した。

六、会再興の声広がる

一九九一年（平成三年）になると、各方面からこの崇高な理念と構想を再現したらどうかという声が高まってきた。また、方正県からも再建してほしいという声が上がってきた。規模を小さくし対象を方正県一か所にしぼって実施してはいいのではという意見が出てきた。そして、一九九一年（平成三年）五月、劉副県長一行の来日を機に、ハルビン市方正地区支援交流の会が設立された。

一九九一年（平成三年）、王鳳山氏より再度、石井氏と森山氏に、「方正県の残留者には長野県出身者が多いから、なんとか長野との交流をつなげてほしい」との連絡が入った。そこで、石井、牧野氏らは奔走。牧野氏と学校法人・小山学園長野研修センター長・平沢信夫氏が主となり、長野県の訪中団（方正県との交流）を組織した。そして、（社）長野県農協地域開発機構常務理事・山川伊一郎氏、主任統括部長・林隆志氏、

戸隠村助役・鈴木喜公氏、平沢氏らが、長野在住の中国人・劉莉女士を伴い方正県を訪問、日中農村経済交流発展について、双方は覚言に署名した。

七、方正県・陳福堂さんの日本留学

陳福堂さんに最初に出会ったのは前述したように一九八九年十月のことだった。その前年より私は日本語学校を友人と設立し新たな活動に入っていた。私の新しい日本語学校の名刺を見せると、王鳳山氏が「陳さんは日本に留学したいんだよ」と私に話しかけた。

通訳で来日した陳福堂さんはもちろん日本語はできる。

ハルビンにある黒龍江大学で日本語を学んだ経験もある。しかし、日本での生活体験は全くない。日本で日本語をもっと勉強したい気持ちは私にもとてもよくわかった。

その話題はその場で終わったが、牧野氏が王鳳山氏一行を成田空港で見送った際、王鳳山氏から正式に陳福堂さんを日本に留学させたい、ぜひ応援してくれという話になった。

もちろん私は日本語学校で受け入れる準備をした。が、当時は今と違って、法務省入国管理局の審査がとても厳しい時代。まして陳さんはすでに三十歳を越えていた。入管局も基本的に二十歳代の若い青年を受け入れる体制である。身元保証人制度もあった時代だ。

しかし、牧野氏は全力を挙げて奔走した。私もぜひ入学させたいと万全の書類を整え、無事日本留学の審査に合格した。一九九〇年十月に入学した陳さんは、学生の中では一番年長だったが、人柄もおおらか、がつがつアルバイトに精を出す学生ではない。クラスメートの学生はもちろん、先生方からもその人柄は一目置かれていた。子供たちを苦労して育てた母の思い出を綴った作文は、職員の中でも涙を誘い、「もうこんな人は日本の若者にはいないわね」と話題にもなった。

陳さんは二年の日本留学を終え、九二年の秋無事帰国。方正県の外事弁公室で更に磨きをかけた日本語で残留婦人たちとの対応や対日関係の仕事に戻る一方、王鳳山氏を校長として設立された私立方正日本語学校の副校長として活躍の舞台を広げた。

八、王鳳山氏の再来日

一九九二年（平成四年）十月、日本側の招聘により方正県から県長代行の県常務委書記・鄭洪徳氏、県人代常務委副主任・王鳳山氏らが来日した。そして、十一月一日東京の私学会館において、方正県との友好交流シンポジウムが開催された。

テーマと講演者は次の通りだ。

一、ハルビン市方正県の現況と展望
　鄭洪徳
二、方正県公立日本人公墓建設の経緯　王鳳山
三、日中農村発展交流の意義
　石井貫一
四、日本人公墓の顕彰について
　森山誠之（社）国際善隣協会元中国東北委員長
五、方正県友好交流の灯をかかげて
　堀越善作（立正佼成会・嵐山会会長）
六、方正県農村見たままと所感
　山川伊一郎

このような活動を通して、日中愛善協会設立の趣旨と理念を再認識し、活動の拠点を方正県にしぼり、『方正地区支援交流の会』として発足した。そして公的支援としてＯＤＡの活用方途、ＮＧＯ団体としての支援方途を調査研究するということで意見の一致をみた。その後、都立衛生研究所・食品添加物研究科・風間成孔科長から、漢方生薬の入手依頼。中国当局に認可された方正日本語学校（校長・王鳳山、副校長・陳福堂就任）への支援、ＯＤＡによる支援など、石井貫一氏は八〇歳の高齢を押して連日、政府関係機関へ奔走。何度か随伴した牧野が「老僧の辻説法を見る思い」と感嘆するほどだった。

一九九三年（平成五年）、劉慶有・副県長一行が方正県経済貿易代表団として来日した。この機会をとらえて同年五月二一日、日中友好会館において、ささやかながらハルビン市方正地区支援交流の会・設立総会を開催して正式に発足した。また、石井、関洋一（元・ＪＩＣＡ職員）、牧野氏らは、一九九四年春（平成六年）、ＯＤＡ実施予算案として詳細な概算申請書を国際協力事業団（Ｊ

ＩＣＡ）に提出した。そして、方正地区支援交流の会は、副題として、「住民福祉の向上（ＮＧＯを想定）と産業発展（ＯＤＡを想定）のための支援交流を行う会」とすることを確認した。

九、初の方正県訪中団

一九九三年（平成五年）七月、日本から第一次方正県訪中団を送った。豊田利郎を顧問、牧野史敬氏を団長として、林幹男氏（大権農場代表）、大類善啓（当時、日本語学校校長）董殿義、徐誠、李国軍（東京在住の方正県出身の華僑たち）氏らが、方正日本語学校開校記念寄付金、日本人公墓の維持管理基金預託金、公墓参詣者に配布する参詣符のサンプルを持参して参加した。

現地の方正県ではかつて大権農場に研修生として来日していた金永春、韓嘯氏二人が吉林市から通訳として参加した。

現地では劉慶有・副県長、王鳳山、由広恒、王治国（弁公室主任）、王広臣、陳福堂氏らが会議に参加した。また、林幹男、李国軍氏らは現地の有畜複合農業、環境重視の有機農業を研究テーマにして現地の農場を視察。牧野、董殿義らは、サイクロデキストリン研究のため方正生物化工廠を視察した。

豊田、大類らは、方正日本語学校を視察した。王鳳山氏に案内された日本語学校では、三〇人近い生徒が熱心に学習していた。半分近い生徒は残留婦人二、三世の子弟だった。

二人の熱心な先生が教壇に立たれていた。その一人はもうすぐハルビンの方に移るとのことだった。日本語を教える体制を充実させ、熱心な生徒に応えるようにしなければと見学後改めて思った。

十八日、全員で日本人公墓を参拝。牧野氏が司祭になって神式による清祓・慰霊式を行った。

帰途、ハルビンでハルビン市農政担当副市長・張松嶺氏らと会見。ハルビン市とＪＩＣＡ間においてＯＤＡ協定を結ぶことに意見の一致をみて帰国した。

※※

※※

方正地区日本人公墓の由来―王鳳山

訳・森山誠之

はじめに

歴史は一面の鏡である。歴史をもって興隆を知り、善悪を明かし、得失を論究する。

本世紀の初めから40年代の半ばまで、日本軍国主義は侵略の魔手を中国に伸ばし、中国人民に重大な災難をもたらし、長い中日関係の歴史に点々と血痕の１ページを留めた。このほぼ半世紀来、平和の鐘声は世界の大地を震憾し、平和の慈雨は中日両国人民の心田をうるおした。今この１篇を草する唯一の目的は歴史の悲劇を繰り返させず、中日両国人民が世々代々友好を継続させることにある。

方正県域を出て哈尓浜－同江の公路を東に７粁、哈同公路187粁の一里程標の東50メートルの三叉路から東南方を望めば約1.5粁の遠方に、松花江の南岸、炮台山西北麓に一群の松林に覆われた墓地を望見することができる、これが即ち内外に著名な日本人墓地である。

この公墓にはかつて黒龍江省に生活した5,000余の日本人が眠っている。彼等は当時日本政府によって開拓団として中国に来た者で、その絶対多数は無辜の婦女子であった。彼等は騙されて中国東北に来たが、一塊の王道楽土も開拓せず、却って異国の他郷に葬られ、日本軍国主義侵略戦争の殉難者となり、1945年以来、“他郷に客死”したが“冤魂は消えず”、“恨みを九泉に携え”ている。彼等は子孫に“中日の友好”と“世界の平和”の大切さを心から希い、それを訴えてやまない。

１　開拓民は難民となる

日本の移民政策は1900年以来当時の日本政府の統治集団の内部に形成されていた。この移民政策は当時の日本政府の七大国策の１つであった。

1939年、日本政府は移民を開拓民と改称した。その開拓政策は日本国内の人民を開拓団に組織して、偽満州国(中国東北地区)に送り、土地と資源を掠奪し、人口を増やし、植民統治を図るものであった。

1936年５月11日、日本関東軍は《満州農業移民100万戸移住計画方策》を策定し、1937年以後20年間（毎５年を１期として計４期）に中国移民100万人を提議した。

1936年７月、日本拓務省はこの計画数を基礎に日本政府の《20年100万戸送出計画》を設定し、1937年５月、日本拓務省の《第一期計画実施要項》を発表し、1937年～1941年を第一期と決定した。この五年間に中国東北地区移民は10万戸であり、こうして《100万戸移民計画》は正式に実行を開始した。

《100万戸移民計画》の設定と推進に従い、日本国内では分村分郷移民と16歳から19歳の青年の満蒙開拓青少年義勇隊方式がとられて中国東北地区に送り出された。この第１期５カ年計画期間に、日本が中国東北に移出した開拓民は42,636人、義勇隊は54,394人、計97,030人。この数と日本政府の計画した162,200人とはその差は甚だしい。これは日本国内の人民も故郷を離れて中国東北に行き侵略戦争に参加することを望まなかったことを証明する。第２期５カ年計画は1942年から1946年であるが、中国東北開拓民22万、そのうち一般開拓民159,600人、義勇隊60,400人。しかし実際はこの数を達成できなかった。

日本帝国主義の中国侵略戦争はことごとに失敗し、多数の青年開拓民も応召入隊して軍を補充した。かくて後期の開拓団は大多数が老人、婦人と子供であった。即ち日本侵略者の移民政策は1934年に於いて既に失敗し、第２期５カ年計画は到達期前に日本帝国主義そのものの失敗によって壊滅した。統計によれば、中国東北地区に移住した開拓民は概ね22万人で然も移住地の大部分は黒龍江省であった。

これら開拓団民の中国東北に移った絶対多数は已むを得ず来た者である。当時３つの原因があった。

①は日本国内の移民政策の緊迫で、当時の日本政府はこの殖民政策推進のために専門の拓務省及下部組織の拓務局、拓務課を設け、全国の上から下までの工作機構を整備した。開拓民の招集、訓

練、輸送は凡てその責任で、日本全土の上下が常時の工作態勢に在り、当時一般の日本貧民はこの潮流から逃れることは難しかった。

②は大部分の開拓民は生活の逼迫と連年の戦争から、日本国内の経済は愈々貧困を加え、もし一人の開拓民を出せば、その家には僅少ながら補助金が支給された。方正県に残留した一日本婦人曰く、彼女が開拓団に参加したので家は3俵（約75キロ）の大豆を貰ったが、当時の日本農家にとっては大きな補助であった。家庭の衣食を維持するために、青年のある者達は義勇隊を志願した。ある者は家人の離散を嫌い家中で東北に移った。

③は兵隊のがれである。日本政府は中国や東南アジア各国の侵略のために国内で大量の兵隊を徴集しなければならない。日本青年の誰が進んで兵隊になり戦争に征きたいだろうか。日本政府は青年を動員して満州に送るために、“開拓団に参加すれば兵役を免除される”と嘘を言って青年を騙した。兵役のがれのために多勢の青年が騙されて中国に来て開拓民や義勇隊に入った。実際は大戦の後期には日本の侵略戦争がことごとに敗退した為に、中国東北地区の開拓民中の青・壮年は根こそぎ動員で前線に征き、開拓民も兵役から逃れることはできなかった。

2　難民の命運

1945年8月15日、日本の侵略戦争は失敗した。日本政府は世界に向け無条件降伏を宣言した。ここに至り、凡ゆる中国の日本開拓民は日本政府から放棄され、当時の満州国政府からも棄てられ、日本関東軍からも棄てられた。戦争後期においては、18歳～45歳の男子は皆応召入隊して、前線戦場に出征していたために、開拓団中に残る者は僅かに老・弱・病人と婦女子と子供だけであった。彼等が日本の敗戦を知り、日本政府の無条件降伏の情報を知った時は正に青天の霹靂であった。彼等の、身は他国の異郷に在り、孤立無援、只ひたすらに故郷－日本への帰国を想った。よって8月16日から各開拓団は各自集結して帰国の方途をさぐったが、彼等はこのとき既に天涯無援の落人であった。佳木斯附近の樺南、樺川、湯原等の開拓民は牡丹江を経由して帰国しようとしたが、中途で阻止され再び依蘭県に戻り、林口、依蘭県の開拓民と一緒に方正県行の道を珠河県（現尚志県）から哈尓浜に出て帰国しようと考えた。

ここで方正県東部各地開拓民は方正県内に集結を始めた。集計によれば当時、方正県に集結した開拓民は全東北地区開拓民の12.5%（即ち2万人余）に達したと見られる。彼等は日本政府が既に敗戦降伏したために開拓民も戦々兢々であった。彼等は本道上を歩けず、山道を、昼間は歩けず夜歩いた。飢は迫るし、加うるに連日の雨で毎日僅に数キロがやっと、携行食糧も尽き、附近の畑で、とうもろこしや藷を盗み取って飢をしのいだ。彼女等は生後何カ月の乳児を背負い、幾歳かの子供の手を引き、老弱病人を扶けねばならなかった。天からは雨が降り、土地は泥濘、山を登り、河を渡り、林を抜け、着物は破れ、蚊や虫に刺され、飢餓と寒気交々迫り歩行艱難を加えた。依蘭県から方正県まで100キロ余の路を1カ月も、2カ月もかかった。団体行動のため、取り残されることは許されず、ある者は子供を山上や林の中に置いて来たし、ある者は河中に、ある者は路傍において中国人が収容して助けてくれるのを祈るしかなかった。或は老人、病人、衰弱者は河を渡るとき溺死して他人に迷惑をかけないようにした。真に一路血涙、歩々難辛であった。

これ等開拓団民が方正県吉利開拓団本部に着いた時は既に晩秋であった。大部分の者は長途跋渉のために体力の消耗甚だしく、その上飢餓のため、病人になって歩くことも出来なかった。当時この本部に集結した開拓団民は優に1万名を超え、家には入り切れず、馬小屋に住み、或は地下に穴居した。食物が無いので附近の中国人農家に乞い、畑へ行って取って来たのを焚火して日本軍用鉄かぶとで煮て食べた。

一同は一時期、休養後また出発しようと想った。然し幾日もせずに厳冬に入り、大雪が地を覆った。

方正地区日本人公墓の由来

王鳳山
訳・森山誠之

方正地区日本人公墓の由来

王鳳山

訳・森山誠之

家の中は凍るのに身には単衣を着て土の上で眠った。伝染病が流行し始めたため死の恐怖が開拓民達を襲った。幾日もせず死亡者は漸次増加した。当地の村民や残留日本婦人の話によれば“一軒の家に幾十人も住んで居たが最後に生き残った者は数人に過ぎなかった”と。

最初は、死亡者を運び出して埋葬したが、後には死人を運び出す力もつきて、家の中に積み重ねる有様となり、一軒の大きな家に数人の生きた者と幾十もの屍体と、残りは未だ息を引きとらぬ者であった。彼等は病に冒され、身体は衰弱し、飢を忍び、凍傷にかかりながら尚頑張っていた。彼等は尚強烈な生きる欲望を持ち、唯一の目的は厳冬を越して日本に帰る――、自分の祖国に帰りたい念願だけだったが、このような艱苦な条件下では生きる希望は渺茫たるものであった。

開拓民達は滅亡の災と対面した。不完全な統計ではあるが、黒龍江省に入植の開拓民は68,713人、その中最も多かった長野県開拓民は11,547人で16.8%を占めた。死亡人数は23,115人で、その中長野県人は5,168人で22.36%を占めた。未帰国人数は9,987人、その中長野県人は1,998人で20.1%を占めた。換算すれば長野県から黒龍江省に送られた開拓民は11,547人中死亡5,168人で死亡者の比率は44.76%に当る。長野県の死亡者と未帰国者総数は7,166人で、長野県から黒龍江省に入植した開拓民11,547人の62.06%に当り、これは長野県人民の不幸であった。

1946年2月、方正県人民政府が成立するや、人民政府は日本開拓民の悲惨な情景を目撃して直ちに決定したことは、①方正鎮、伊漢通、徳善郷の人民を動員して人と車を出して開拓民の屍体を遠方に運搬し、家屋周辺の屍体を取り出して埋葬することであった。回憶によれば当時収集した屍体は4,500体余りで炮台山の東側の“楊二玄溝”でガソリンをかけ三日三晩で火葬した。②は附近の住民を動員して未だ呼吸(いき)のある開拓民を各自の家に引取って扶養することであった。

統計によれば、当時方正県の老百姓（一般庶民）が収容した日本開拓団民の残留者は4,200余人の多きに達した。これは当時、日本の侵略戦争による重大な災害であるが、一方、経済的に甚だ困難な中国老百姓（一般庶民）のこのような措置と行為は人道主義的精神の表れであり、その気高い品性は表現を超えた高貴なものと言うべきであろう。

建立時の「方正地区日本人公墓」。後に礎石部分が造り直された

3　公墓建立

戦争も終り、艱苦の歳月も過ぎ、方正県の老百姓（人民）の引き取った残留婦人、子供達も精神的安堵と医療と扶養を得て皆健康を取り戻し夫々の家庭の一員と成り、あるものは中国人と結婚して子女を生み新生活を開始した。但し多くの者は常に炮台山附近を訪ねて亡き人々を弔った。炮台山の東側には片々たる白骨があって、これを看る者には大へんな悲痛と凄惨を思い出させた。多数の当地日中人民の申し出により、県政府は省政府の同意の下に、1963年5月4日炮台山の東側に一基の日本公墓を建立した。1973年の春、ダムの建

方正地区日本人公墓の由来

王鳳山
訳・森山誠之

設によって埋没するため、公墓を炮台山西北麓に移転するに当っては、省政府の補助金を得て用地を買収し周囲に松林を植栽してこれを再建した。その経費は省政府の補助と県政府当年歳人の14%に当った。再建した公墓はコンクリート造りで直径3メートル、高さ1.5メートルの円形とし、墓前に花崗岩の石碑を建て、刻するに“方正地区日本人公墓”の文字を以ってした。碑は日本型で、高さ3.3メートル。遺骨はすべて円形の墓に納めた。

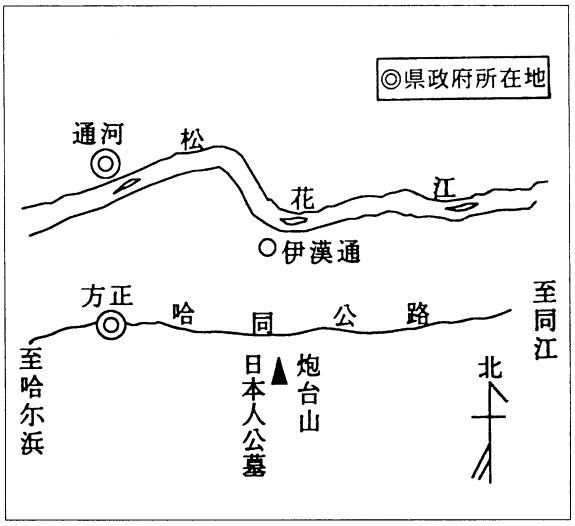
1984年9月18日に至って、日本側が省外事弁公室領事部と諮り鶏西市麻山西側に在った530体の日本開拓民の遺骨を方正地区日本人公墓に移葬し、別に“麻山地区日本人公墓”を建て、同じ規格で石碑も建てられた。

1984年10月19日、日本国哈達河友好訪中団一行31名は、団長石山博一、顧問金丸千尋引率の下に方正県の“方正地区日本人公墓”に来て、“麻山地区日本人公墓”の遺骨に対し慰霊祭式典を厳修した。

1989年、省政府の許可の下に、また補助金を受け、県政府も一部分の経費を支出して周囲の土地を購入し墓地を拡め、公墓の四周に100メートルの鉄柵をめぐらし、コンクリートの階段、祭台を設け墓と碑を新たに補修した。墓地の正門には鉄の大門があり、両門扉には富士山と万里長城の色彩画を掲げ、“中日友誼”と“永不再戦”の標語を書した。公墓の清潔を保ち、参拝者の祭祀の便宜のために墓地の近くに59平方メートルの建物－参拝者休息所と別棟の手洗所を設け、県政府外事弁公室は1名の専従者を配して常時この墓地を看守らせている。この20年来に100を超える日本の団体、数千人が参拝のために方正を訪ね、中国東北唯一の日本人公墓を葬祭しここに眠る親族や友人を慰霊追悼した。

おわりに

47年は過ぎ去った。日本の中国侵略戦争は我々に苦痛の回憶を残した。それは中国人民に重大な災害を及ぼしたばかりでなく同時に日本人民にも



苦痛と災難をもたらした。日本の幾十万の開拓民こそ中国侵略戦争の犠牲者であり殉難者である。これに反して、日本帝国主義侵略の災難を満喫した中国東北地区人民、別しても方正県人民は日本開拓民に対し、深切な同情心を以って、方正人民の国際主義、人道主義精神を発揮した。

当時経済的にも極めて困難で生活状態も甚だ苦しい中で、開拓団の帰国に便宜を提供し、奉仕的援助を与え、また数千名に及ぶ日本開拓団の残留者を救護扶養した。荒野に曝された屍体や遺骨を埋葬し方正県に日本人公墓を建立した。明らかに証するに足ることは中国人民が終始日本軍国主義分子と日本人民とを区別し一貫して中日両国人民の友好應待を堅持していることである。

47年は過ぎ去って、中日国交正常化20周年の今日、我々両国人民は何れも中日両国人民が嘗めた苦難の歴史を忘れることはできない。“前事忘れず、後事の師となす”――中日両国人民が世々代々友好を貫く可能性と、並にアジアと世界平和のために為すべき貢献を尽くしうることを私は確信する。

ここに私は数篇の日本残留婦人の回想記を添えるが（略）、これは彼女達の苦痛の回憶である。我々が彼女達を探訪したとき多くは泣いて声にならず、今は日本に帰国した者もあり、尚、中国の方正県に留まる者も有る。彼女等の中には日本に親族が居っても、彼女達を扶育した中国養父母に対する深い感情から離れ去れない者も居る……。

（1992年末　記）

中国・交流と歴史検証の旅（第６回）

■　日程　　７月２９日（水）　新潟空港ロビーに集合　　１０：００
　　空港発（ＣＺ６１６便）　　１２：１５
　　ハルピン空港着　　１３：４０
　　宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル
　　３０日（木）　貸し切りバスで方正へ（高速道・約２時間半）
　　方正県政府表敬訪問、墓参と日中交流
　　宿泊＝鑫禧大酒店
　　３１日（金）　ゆかりの地（伊漢通開拓団跡地ほか）訪問
　　貸し切りバスでハルピンへ
　　宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル
　　８月１日（土）　ハルピン市内見学（太陽島、７３１細菌部隊記念館）買い物
　　宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル
　　８月２日（日）　ハルピン空港発（ＣＺ６１５便）　９：５０
　　新潟空港着　　１３：００
　　空港ロビーで解散
　　＊　時間は現地時間、中国は日本の１時間遅れ

■　定員　　１５名

■　会費　　１５５，０００円（シングルの宿泊ご希望の場合は差額１０，５００円プラス。集合、解散の新潟空港までの交通費はふくまれていません）

■　申込み　６月３０日までに下記・奥村までお申し込みください。なおその折、パスポート（顔写真のページ）を下記のファックスへお送りください

■　ご送金ほか

①　〔**会費の払い込み**〕振込用紙をお送りしますので６月２５日までに指定の口座へお振込みください。

②　旅行にかかわる保険料は含まれていません。保険は空港でもできます。
東京→新潟（新幹線、片道１０，４７０円、高速バス片道５，２５０円）
新潟駅→空港、バス３５０円、約３０分間隔で運行。

③　その他、お問い合わせはお気軽に下記へどうぞ。

方正友好交流の会

〒１０１－００５２　東京都千代田区神田小川町３－６
（社）日中科学技術センター内
電話　０３－３２９５－０４１１
旅行の問い合わせ：　奥　村　正　雄
電話　０４３－２７２－９９９５
ＦＡＸ　０４３－２７２－０２１４

近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅

――普通の旅行ガイドでは出てこない旧満州の奥地へ――

■　日程

８月２８日（金）	成田発（CZ６３０）		１３：２５
	大連着		１５：２０
	大連発（CZ６６２５）		１７：００
	延吉着		１８：２５
２９日（土）	延吉		９：００
	図們	豆満江の岸辺　図們大橋	１０：３０
	龍井	旧間島省・日本総領事館	１５：００
	延吉	旧市街視察	１６：３０
	宿泊	２８、２９日は延吉泊	
３０日（日）	延吉		８：００
	鏡泊湖		１２：００
	牡丹江	旧満鉄社宅　旧放送局	１６：３０
３１日（月）	牡丹江		８：３０
	綏芬河	中露国境を視察	１１：００
	東寧	旧日本軍トーチカ跡　旧市内	
	牡丹江		
	宿泊	３０、３１日は牡丹江	
９月１日（火）	牡丹江		８：００
	樺南	大八浪、弥栄村（いやさか）開拓団跡	
	佳木斯	エスペランティスト長谷川テル墓参	
		旧日本人街視察	
	宿泊	佳木斯	
２日（水）	佳木斯	市内視察	８：００
	方正着	県政府表敬　日本人公墓参拝　伊漢通開拓団跡	
	方正発		１５：３０
	ハルピン	宿泊はハルピン	１８：３０
３日（木）	ハルピン	７３１部隊記念館（または東北烈士館）	
		ユダヤ教会　花園小　極楽寺参観	
	ハルピン発（CZ３６０４）		１５：２０
	大連着	宿泊は大連	１６：４５
４日（金）	大連発（CZ６２９）　空港へ		８：４０
	成田着		１２：２５

■　定員　　１５名

■　費用　　２５０，０００円（予定、なんとか低い価格に抑えたいとホテルなど調整し折衝中ですので、ご了承ください）

■　申込み　７月１０日まで、ご希望ご関心のある方は、詳細日程、申込書などを送付します。

■　ご関心ご希望のある方は下記までにお問い合わせください。

主催：社団法人日中科学技術文化センター　　協力：方正友好交流の会

問い合わせ：大類、木下　　TEL.０３－３２９５－０４１１
FAX.０３－３２９５－ ０４００
Email：ｏｈｒｕｉ@ｊｃｓｔ．ｏｒ．ｊｐ

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、国際的な友愛精神、国際主義的な精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03ー3295ー0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HPアドレス：http:/www.houmasa.com/

書籍案内

方正友好交流の会が編集した本と会員の関係著書をご紹介します。

＊　『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

方正友好交流の会　編著

定価 1500 円

この本には、日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆、また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されている。（事務局に残部あり）

＊　『天を恨み　地を呪いました　－中国方正の日本人公墓を守った人々－』

奥村正雄　編著　定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」―ハルビン市方正県物語』にも収録されているが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちゑさんの息子・崔鳳義さんの貴重な体験記も入っている。（事務局で取り扱っている）

＊　『風雪に耐えて咲く寒梅のように　二つの祖国の狭間に生きて』

可児力一郎　著

定価 1700 円

著者は、旧満州へ入植してから 17 年ほどの中国での残留生活を経て帰国するまでの記憶を綴ろうと、慣れない日本語と苦闘しながら、2003 年本書を書き上げた。この本についてはＰ５３に藤井正義が紹介しているのでお読みいただきたい。また可児さんにも寄稿（Ｐ２６）していただいている。本書は事務局でも扱っているので、払込取扱票を利用されたい。著者宛てに直接申し込んでいただいても結構である。

〒399－5303　長野県木曽郡木曽町田立１２２３　可児力一郎（かに　りきいちろう）

ＴＥＬ：０５７３－７５－４７５５　ＦＡＸ：０５７３－７５－４５５７

＊　『父の足跡――満州の回想――』　坂本弘子　著

定価：1000 円（税別）

本書についても可児さんの著作同様、藤井がＰ５３に紹介している。著者（旧姓で出版）はお兄さんと弟さんをハルピンで亡くされている。自分が今日生かされているのは兄弟の命と引き換えではなかったか、という思いが年々強くなっていた。なんとかお墓参りをと

いう思いがあったところ、埋葬された場所は今「公園になっている」と、かつてハルピンにいた日本人から聞かされた。一方、ハルピン出身の中国人の知人に事情を話したところ、彼はインターネットで方正日本人公墓と当会を知り、著者にその存在を教えた。そして著者からの電話だった。方正公墓に「なんだか兄弟たちが眠っている」ような気がするとおっしゃるのだ。(大類)

この本を希望される方は、直接著者に申し込んでいただきたい。

〒343-0835　越谷市蒲生西町２－８－１　山田弘子　電話：０４８－９８７－５５０９

＊　『二つの祖国　ある中国残留孤児の証言』　　北澤博史　著

定価 1500 円（税別）

製作・発行　夢工房

著者の北澤さんは 1935 年長野県赤穂村で生まれ、1940 年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様子や難民となった苛酷な体験を絵と文章で描写されている。(事務局で取り扱っている)

＊　『赤い夕陽の満州にて　「昭和」への旅』　　高橋健男　著

定価 3400 円（税別）

著者は 1946 年生まれ。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識の下、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著。ご希望の方は直接、刊行先の新風社販売部に。電話 03-3746-4648　FAX 03-5414-3494。

≪報告≫　　ありがとうございました

前号の会報７号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。０９年４月２７日現在)

羽田澄子　小柴玲子　斉藤兵一　出口三平　吉川春子　小島晋治　米山惇　岩嵜弘三　森川忍　延浄寺・網代正孝　原磯子　阿部恵一　篠田欽次　藤原作弥　西沢昭裕　穂苅甲子男　山内良子　小関光二　小関征子　東山健吾　久保祐雄　玉山昌顕　野澤淑子　岩佐一福久かずえ　石原健一　藤原知秋　芹澤昇雄　高橋健男　川村範行　伊原忠　伊原泰子　渡辺保雄　武吉次朗　石田和久　阿久津国秀　師岡武男　杉田春恵　北澤博史　永原今朝男　北澤吉三　望月迪洋　近畿地区中国帰国者支援交流会・小栗勝則　辻康子　黒岩満喜　魚崎宏　柴崎葦律子　新谷陽子　白西紳一郎　山田寿子　山田陽子　瀧亀久男　金丸千尋　萩原武太郎　稲川清一　名取敬和　谷口誠　森田恭子　二つの観音様を考える会　塩野泰彦　登丸誠　生田和美　小原昌一郎　宮腰直子　西澤潤一　佐藤嘉恭　河内宏光　奥村勉　鵜沢弘　伊藤泰夫　伊佐昭紀　岡庭成巳　田中實　小林英子　奥村恒雄　林郁　塩谷建　木村美智子　渡辺洋一　湊谷節子　小畑正子　可児力一郎　土川克宏　山川禎一　西尾清　加藤稔　伊藤幸枝　吉川雄作　星浩一　飯田成夫　堀江はつ　神田幸子　酒井正文　坂部晶子　高橋増江　竹島泰浩　大頂子東仙道開拓団の証を守る会・加藤浩司　山下くに　藤村光子　高木涼子　矢野光雄　山田弘子　風間成孔　渡辺亮介　森清多美恵　吉岡稔

片岡稔恵　福田順子　南哲夫　金子静子　宮下春男　斉藤忠雄　齋藤實　大森猛　山田正一　八子充子　深山信雄

＜編集後記＞

《訂正とお詫び》

前号（７号）に誤りがあった。ひとつは、前号Ｐ４に日本政府の草の根無償資金協力の黒竜江省に関する５つの案件のうち、４つが方正県に関するものだと書いたが、正しくは３つだ。ハルピン市双城市のものも方正に入れてしまった。それともう一つ、Ｐ２７の下段の写真、撫順戦犯管理所に収容されていた愛親覚羅溥儀の写真を溥傑と記してしまった。実は少しばかり溥儀か溥傑かで迷った。その際、時間を惜しまずにちゃんと資料に当たれば良かったのだが、溥傑さんへの思いもあったせいか、風貌からも間違いはないと思ってしまった。読者から指摘していただいた。感謝。

＊　＊　＊　＊　＊

先日、大阪から会員の山本義輝さんが訪ねて来られた。山本さんは農業機械の指導で、黒竜江省に３度行かれた方だ。今でも阪南市日中友好協会でご活躍だ。中国の農業機械化の発展のためにと、５５年余りの間、農業機械の試験や研究、製品開発、普及に役立ててきた図書や発表論文などを整理して、中国農業大学の図書館に寄贈された。総重量は２６５Ｋｇ（梱包を除く）という膨大なものだ。山本さんは、かつてその大学に３年半、ＪＩＣＡの農業技術者として派遣されていた。その日、大学図書館からの感謝状と掛け軸を中国大使館で受け取られた後、来訪されたのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

いよいよ６月１３日から岩波ホールで『嗚呼　満蒙開拓団』が上映されることになる。マスコミ向けの試写会も５月１９日で終わり、徐々にメディアでこの映画の紹介記事が出るのではないかと期待している。方正日本人公墓が更に多くの人々に知られることによって、不毛なナショナリズムが払拭されることに少しでも役立ってほしいと思う。映画によって、日本側に見られる歴史認識の欠如が少しでも補われ、旧満州時代が何だったのかという深い認識が深まることを願っている。つい最近の新聞報道で、「中国、愛国教育強化へ」という記事を見つけた。中国側もいたずらに“愛国主義”などと言わずに、国際主義的な精神が復興することを期待したい。かつて北京放送局の若い記者は、方正日本人公墓の存在を中国の若者にも知ってもらいたいと語ったこと思い出すのだ。（大類）

≪表紙写真撮影・佐藤斗久枝（自由工房）≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第８号）　2009年5月16日発行
発行：方正友好交流の会　　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町3－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会
HPアドレス：http:/www.houmasa.com/